

貝塚 (SM-1) 出土の骨角器

余市町

入舟遺跡

(1998・1999年度)

余市川改修事業および余市橋線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2000. 3

北海道余市町教育委員会



(側面)



(正面)

貝塚 (SM-1) 出土の動物形骨製品

口絵 3



(南方向より)



(北方向より)

遺跡の全景



貝塚 (SM-1) 出土の人骨状況



石組炉 1 全景



石組炉 2 全景



(SM-4)



(SM-5)

貝塚の遺物出土状況



貝塚 (SM-5) 出土の漆椀



貝塚 (SM-1) 出土の骨角器



(12Hグリット周辺)

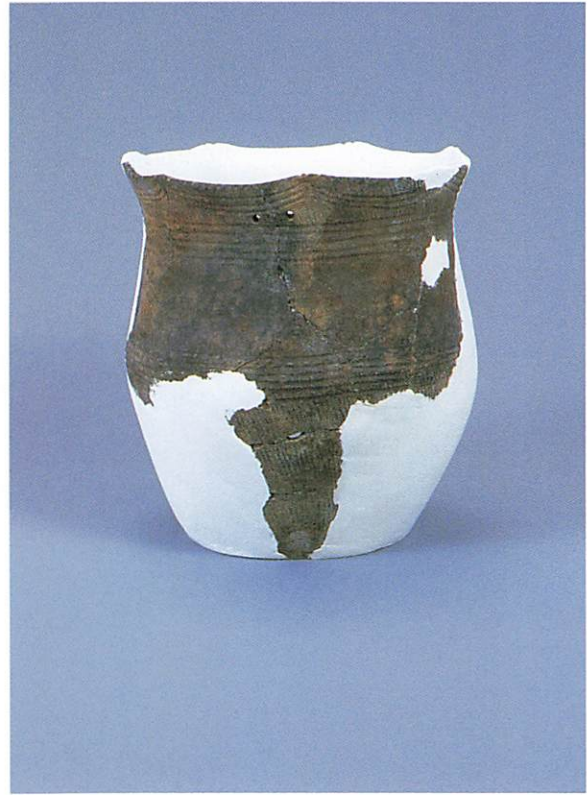


(南方向より)

護岸石垣の状況



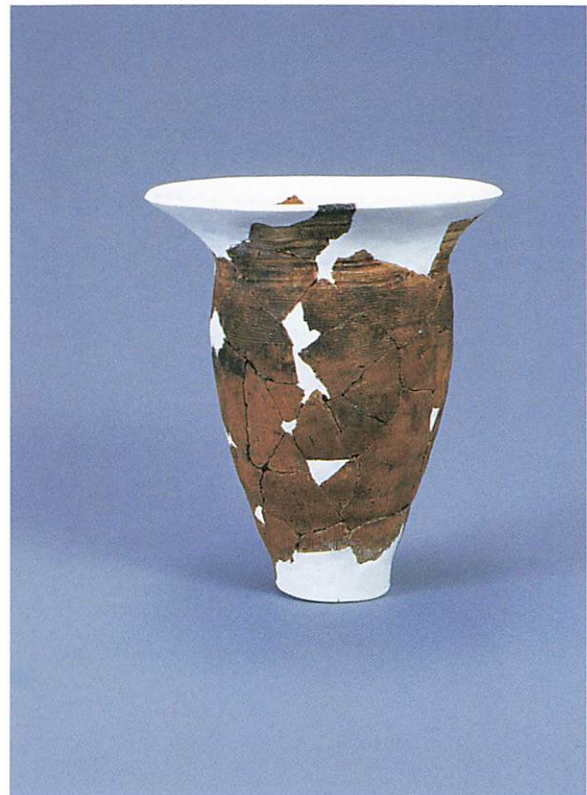
第IV群B土器 (SM-1)



第IV群B土器 (SM-1)



第IV群B土器 (H-3)



第V群A土器 (包含層)

遺跡および包含層出土の遺物



(SM-1)



(SM-5)

貝塚出土の石器・骨角器



包含層出土の石器



包含層出土の木製品



包含層出土の木製品

序

余市町は江戸時代からニシンの千石場所として知られ、北海道内では比較的温暖な気候に恵まれているところから、海の幸、山の幸が豊富な町として発展を続けてきました。

その歴史を物語るように、町内には数多くの文化財が点在し、国指定重要文化財・史跡旧下ヨイチ運上家、国指定史跡フゴッペ洞窟、国指定史跡旧余市福原漁場を始め、道指定文化財2件、町指定文化財33件を数えております。

埋蔵文化財につきましては、町内で64ヶ所が確認されており、古代からこの地に人々が生活を営んでいたことを示しております。

今回刊行する報告書は、平成10・11年度に余市川改修および余市橋線街路事業に伴って発掘調査された入舟遺跡の記録です。

2年間の調査で多数の遺構・遺物が検出され、余市川兩岸の生活史が具体的になってきました。

今後はこの発掘成果を広く地域の方々に紹介し、文化財保護活動の一助とする所存です。

今回の調査にあたりましては、北海道教育委員会をはじめ関係各位から種々のご指導をいただきました。また、発掘調査とそれに引き続く整理作業に従事された皆様のご努力、さらには調査原因者である北海道小樽土木現業所のご理解や、地域の皆様のご協力によって成果をあげることができました。ここに衷心より厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

北海道余市町教育委員会

教育長 利 輝 夫

例 言

1、本書は、平成10～11年度に実施された北海道小樽土木現業所による余市川改修および余市橋線街路事業に伴う記録保存を目的とした入舟遺跡の発掘調査報告書である。

2、本書は乾芳宏が執筆編集をした。

3、発掘調査及び整理体制

(1) 平成10年度

- ・調査体制 教 育 長 笹山義孝
教 育 次 長 利 輝夫
文化財課長 佐々木功治
文化財課業務係長 盛 昭史
博物館学芸員 浅野敏昭
- ・調査担当者 文化財課文化財係長 乾 芳宏
調 査 補 助 員 安西雅希、岡崎次郎、小川康和
- ・発掘作業員 水田るり子、高野真弓、白銀富子、佐藤人美、阿部栄子、富岡昭子、高野名竜子、斉藤朱美、内田豊子、新谷美香、北川千登世、仲鉢悦子、合谷幸代、大森朋恵、岡崎すみ子、野田眞紀子、佐藤洋子、森久美子、佐藤糸穂、久末洋子、古田千穂、千葉貴子、岡西悦子、水谷洋子、久保照代、東門田ルミ子、滝川博、渡部昭哉、竹内榮佐、阿部正徳、柏谷忠勝、寺岡重幸、福岡春夫、大田口義剛、横山和志、工藤忠幸
- ・整理作業 遺 物 実 測 阿部栄子、北川千登世、久保照代、渡部昭哉
遺物トレース 阿部栄子、北川千登世
洗 浄 ・ 注 記 白銀富子、古田千穂
遺 物 復 元 竹内榮佐、阿部正徳
遺構実測・トレース 岡崎次郎、安西雅希
動 物 遺 体 内田豊子、富岡昭子
- ・遺跡の調査内容

遺 跡 名	入舟遺跡（登載番号 D-19-6）
所 在 地	北海道余市郡余市町入舟町
調査期間	平成10年5月11日～10月31日
整理期間	平成10年11月1日～平成11年3月31日
事業主体	北海道土木現業所
発掘主体	余市町教育委員会
調査面積	1,513㎡

(2) 平成11年度

- ・調査体制 教 育 長 利 輝夫
教 育 次 長 田口和志
文化財課長 佐々木功治
文化財課業務係長 盛 昭史

- | | | |
|----------|--|------------------------|
| | 博物館学芸員 | 浅野敏昭 |
| ・調査担当者 | 文化財課文化財係長 | 乾 芳宏 |
| | 調査補助員 | 安西雅希、岡崎次郎 |
| ・発掘作業員 | 阿部正徳、荒岡民雄、柏谷忠勝、鎌田忠、工藤忠幸、今和明、滝川博、福岡春夫、涌井大輔、渡部昭哉、阿部栄子、新谷美香、内田豊子、大森朋恵、北川千登世、久保照代、腰越洋子、合谷幸代、斎藤朱美、佐藤糸穂、佐藤洋子、白銀富子、千葉貴子、富岡昭子、仲鉢悦子、野田眞紀子、橋本文子、畑澤理佳、久末洋子、古田千穂、松原智子、水田るり子、森久美子、渡部優子、伊藤美念 | |
| ・整理作業 | 遺物実測 | 阿部栄子、内田豊子、大森朋恵、北川千登世 |
| | 遺物トレース | 阿部栄子、北川千登世 |
| | 拓 本 | 水田るり子、富岡昭子 |
| | 洗浄、注記 | 新谷美香、斎藤朱美、白銀富子 |
| | 遺物復元 | 荒岡民雄、柏谷忠勝、鎌田忠、工藤忠幸 |
| | 撮 影 | 今 和明 |
| | 遺構実測・トレース | 安西雅希、岡崎次郎 |
| | 漆器復元 | 阿部正徳、古田千穂、畑澤理佳 |
| | 植物遺体 | 久保照代、橋本文子 |
| ・遺跡の調査内容 | | |
| | 遺 跡 名 | 入舟遺跡（登録番号 D-19-6） |
| | 所 在 地 | 北海道余市郡余市町入舟町 |
| | 調査期間 | 平成11年5月12日～平成11年10月31日 |
| | 整理期間 | 平成11年11月1日～平成12年3月31日 |
| | 事業主体 | 北海道土木現業所 |
| | 発掘主体 | 余市町教育委員会 |
| | 調査面積 | 999㎡ |

4、遺物の保管

発掘調査によって出土した遺物は余市町教育委員会が保管管理する。

5、発掘調査及び整理作業には次の方々の指導、助言、協力を得た。

- | | |
|--------------|----------------|
| 北海道教育委員会 | 畑 宏明・大沼忠春・田才雅彦 |
| 北海道埋蔵文化財センター | 木村尚俊・種市幸生・佐藤 剛 |
| 札幌市教育委員会 | 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二 |
| 石狩市教育委員会 | 石橋孝夫 |
| 小樽市教育委員会 | 石川直章・青木 誠 |
| 仁木町教育委員会 | 嶋井康夫 |
| 伊達市教育委員会 | 大島直行・青野友哉 |
| 函館市教育委員会 | 佐藤智雄 |
| 常呂町教育委員会 | 武田 修 |
| 黒松内町教育委員会 | 高橋 興世 |

名古屋大学 新美倫子
瀬戸市埋蔵文化財センター 藤沢良祐
国立歴史民俗博物館 西本豊弘
東京大学 丑野毅
くらしき作陽大学 北野信彦

田部 淳、小柳太一、小柳リラコ、近藤芳二、青木延広、佐藤利雄、仲鉢 浩

凡 例

1、遺構の平面及び本文中で使用した略称は下記のとおりである。

竪穴住居 H (House) 土坑 P (Pit)
貝 塚 SM (Shell Mound) 炉跡 FP (Fire Pit)
剥片集中 FC (Flake Chip)

2、挿図の縮尺については基本的に下記のとおりである。

遺構関係 1/20 場合によってはスケールで示した。
遺物関係 土器・陶磁器・鉄鍋 1/3
 陶磁器の染付 1/2
 石器・鉄器・骨角器・玉・金属製品 1/2
 場合によってはスケールで示した。

3、写真図版の縮尺は任意である。

目 次

序 余市町教育委員会 教育長 利 輝夫

例 言	i
第 I 章 遺跡	1
1 調査の経緯	
2 遺跡の立地と層序	
3 調査の方法と整理	
第 II 章 遺構と遺物	10
第 III 章 包含層の遺物	33
第 IV 章 まとめ	79
第 V 章 付編	
・入舟遺跡出土の角胴について	浅野敏昭 85
・入舟遺跡貝塚出土金属輪の蛍光 X 線分析による調査結果	赤沼英男 89
・入舟遺跡貝塚 (SM-1) 出土の古人骨について	乗安整而 91

入舟遺跡図版目次

第 1 図 遺跡位置図	vi	第 22 図 遺物の出土状況 (4 F) と集石	30
第 2 図 遺跡周辺図	1	第 23 図 石組炉 (1・2・3) の平面および断面図	31
第 3 図 発掘区位置図 (1/500)	2	第 24 図 石組炉 (4・5・6) の平面および断面図	32
第 4 図 遺構平面図	7	第 25 図 包含層出土の遺物(1)	38
第 5 図 土層断面図 (南北および東西)	9	第 26 図 包含層出土の遺物(2)	39
第 6 図 貝塚 (SM-1) と出土遺物	14	第 27 図 包含層出土の遺物(3)	40
第 7 図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物	15	第 28 図 包含層出土の遺物(4)	41
第 8 図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物	16	第 29 図 包含層出土の遺物(5)	42
第 9 図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物	17	第 30 図 包含層出土の遺物(6)	43
第 10 図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物	18	第 31 図 包含層出土の遺物(7)	44
第 11 図 遺構 (H-1) と出土の遺物	19	第 32 図 包含層出土の遺物(8)	45
第 12 図 遺構 (H-3・4) と出土の遺物	20	第 33 図 包含層出土の遺物(9)	46
第 13 図 貝塚 (SM-4) の遺物状況	21	第 34 図 包含層出土の遺物(10)	47
第 14 図 貝塚 (SM-4) 出土の遺物	22	第 35 図 包含層出土の遺物(11)	48
第 15 図 貝塚 (SM-4) 出土の遺物	23	第 36 図 包含層出土の遺物(12)	49
第 16 図 貝塚 (SM-5) と遺物状況	24	第 37 図 包含層出土の遺物(13)	50
第 17 図 貝塚 (SM-5) 出土の遺物	25	第 38 図 包含層出土の遺物(14)	51
第 18 図 貝塚 (SM-5) 出土の遺物	26	第 39 図 包含層出土の遺物(15)	52
第 19 図 貝塚 (SM-5) 出土の遺物	27	第 40 図 包含層出土の遺物(16)	53
第 20 図 遺構平面および断面図 (F P-1~20)	28	第 41 図 包含層出土の遺物(17)	54
第 21 図 遺構平面および断面図 (F P-21~38)	29	第 42 図 包含層出土の遺物(18)	55

第43図 包含層出土の遺物(19).....	56	第49図 包含層出土の遺物(23).....	62
第44図 包含層出土の遺物(20).....	57	第50図 包含層出土の木製品(1).....	63
第45図 包含層出土の遺物(21).....	58	第51図 包含層出土の木製品(2).....	64
第46図 包含層出土の遺物(22).....	59	第52図 包含層出土の木製品(3).....	65
第47図 包含層出土の遺物(23).....	60	第53図 包含層出土の木製品(4).....	66
第48図 包含層出土の遺物(24).....	61	第54図 包含層出土の木製品(5).....	67

— 写 真 目 次 —

口絵 1 貝塚(SM-1)出土の骨角器
口絵 2 貝塚(SM-1)出土の動物形骨製品
口絵 3 遺跡の全景
口絵 4 貝塚(SM-1)出土の人骨状況
口絵 5 石組炉1・2全景
口絵 6 貝塚(SM-4・5)の遺物出土状況
口絵 7 貝塚(SM-5)出土の漆椀・V層出土の遺物状況
口絵 8 護岸石垣の状況
口絵 9 遺跡出土の土器(SM-1・H-1・V群)
口絵10 貝塚(SM-1・5)出土の土器・石器
口絵11 包含層出土の石器
口絵12 包含層出土の木製品
口絵13 包含層出土の木製品

写真図版 1 発掘の全景	95
写真図版 2 護岸石垣状況・埋立土の土層断面	96
写真図版 3 住居跡(H-3)の全景・集石1の全景	97
写真図版 4 貝塚(SM-4・5)の遺物出土状況	98
写真図版 5 遺構遺物の出土状況	99
写真図版 6 貝塚(SM-4)出土の遺物	100
写真図版 7 包含層出土の土器	101
写真図版 8 包含層出土の土器(IV~V群)	102
写真図版 9 包含層出土の土器(V群)	103
写真図版10 包含層出土の石器	104
写真図版11 包含層出土の石器	105
写真図版12 包含層出土の土製品・石器	106
写真図版13 包含層出土の茶臼と木製品	107
写真図版14 包含層出土の木製品	108
写真図版15 角胴資料	109

余市町要図



第1図 遺跡位置図 (1 : 50000)

第I章 遺 跡

1、調査の経緯

入舟遺跡は余市川の左岸にある。対岸の大川遺跡は大正時代から知られ、学術的な発掘調査は1958年に名取武光・峰山巖氏と郷土文化研究会が中心となって行なわれている。

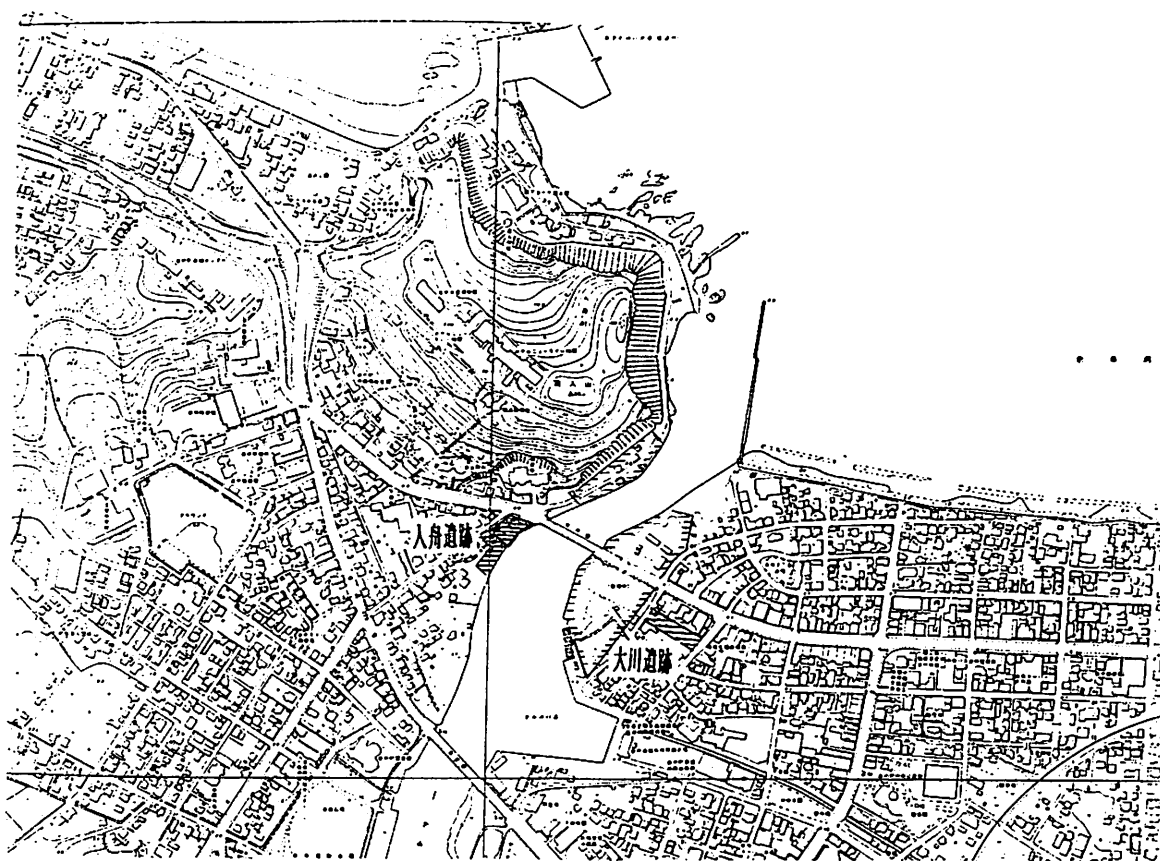
さて、町の中央を流れる余市川はたびたび洪水をおこすことから治水対策として1984年から余市川改修事業が着手されることとなった。

しかし、兩岸には大川・入舟遺跡があることから1987年北海道小樽土木現業所から余市町教育委員会に埋蔵文化財に対する事前協議書が提出された。町教育委員会ではこれを受けて北海道教育庁に進達、協議をすすめた。北海道教育庁文化課では範囲確認調査を実施し、その結果として多量の出土遺物から現状保存となったが困難であることから記録保存として発掘調査を実施することになった。

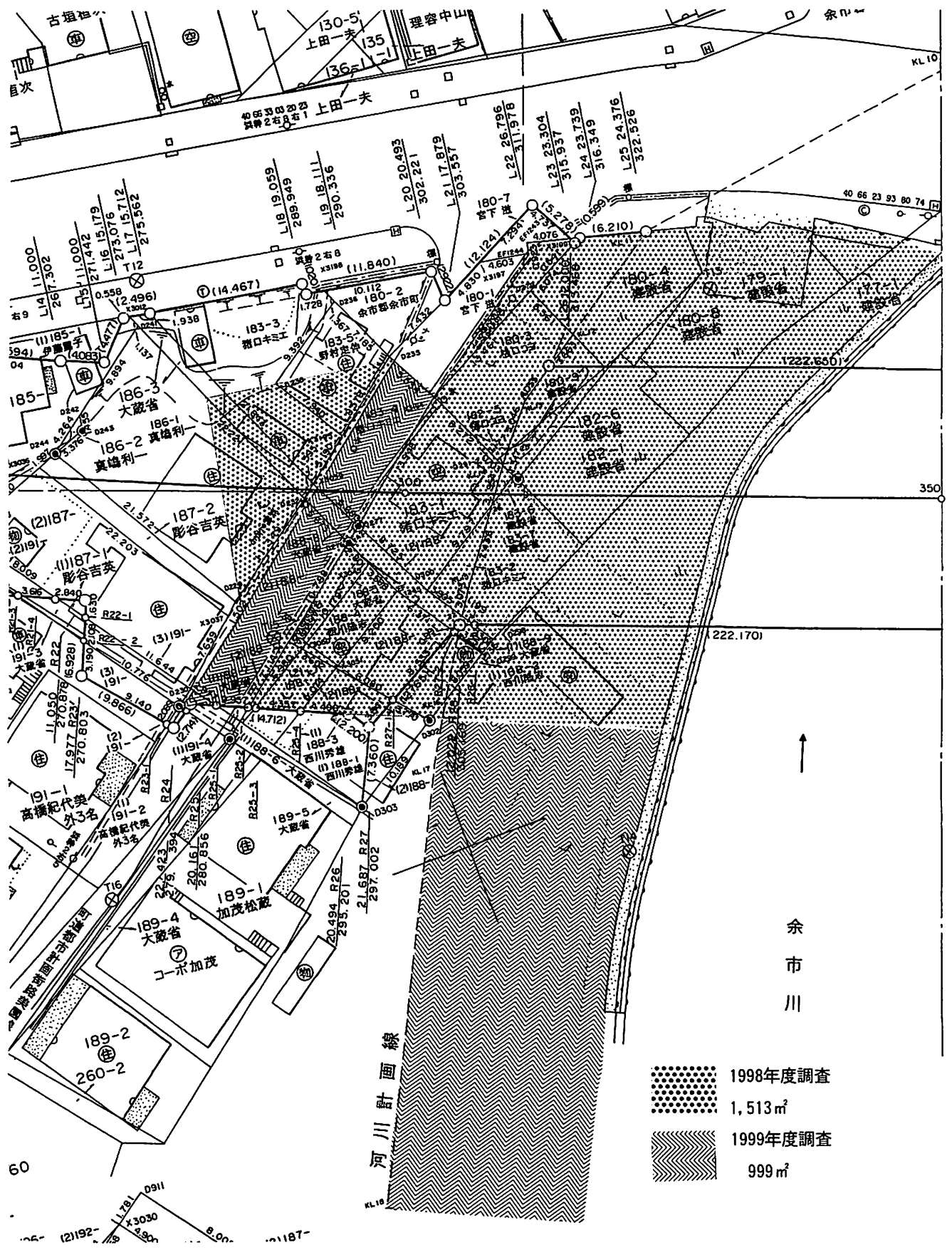
これによって大川・入舟遺跡の発掘調査は余市町が委託をうけて1989年から発掘を開始し、河川改修事業とともに大川橋線街路事業が1998年から着手されることになった。

2年間の発掘調査区は1995・1997年の入舟遺跡の上流に位置し、新設される余市橋の橋脚部分とその周辺である。

今回の調査地区は、下流の入舟遺跡と隣接しているため1997～1998年に範囲確認調査を行い発掘調査に至ったものである。



第2図 遺跡周辺図



第3図 発掘区位置図 (1/500)

2、遺跡の立地と層序

余市川左岸の河口から約40mの位置にあり、標高約5mの砂丘上に立地している。古地図においては余市川は蛇行がおおく河川流域は湿地が広がっていたようである。

しかしながら、この一帯は近世から戦前にかけてニシン漁が盛んであったことから民家が立ち並び、遺跡の部分もそれらの関係から表土が大きく攪乱されている。また、余市川の氾濫原であることから大正から昭和時代にかけて護岸工事に伴う埋め立ても行われている。

層序は基本的に6層とし、以下のとおりである。

- | | | |
|-----|-------|--|
| I | 黒色土 | 表土であり、埋め立てなどの客土がほとんどで攪乱が激しい。 |
| II | 黒色土 | 上部は攪乱されているが部分的に遺物包含層が残っており続縄文時代から近世・近代までの長期に至っている。
特に続縄文時代前半の恵山文化の遺物はⅢ層上部からⅣ層下部にみられる。 |
| III | 黄褐色砂層 | 固くしまっている砂層で厚さは約30cmである。対岸の大川遺跡のⅢ層に対応し、縄文時代中期から続縄文時代にかけての遺物包含層である。
グリット名13ラインから南方は川の蛇行の外側のためにⅣ・Ⅴ層に対応する堆積物がほとんどない。川底といえる粗い砂層となっており包含層は無い。 |
| IV | 黄褐色礫層 | 礫を多量に含む砂層であり、わずかながら礫間に縄文時代中期から後期にかけての遺物が見られる。 |
| V | 黒褐色土 | 泥炭層といえるもので川底の堆積物層である。
川の蛇行の内側（入江）のために深みとなり、遺物や土砂が堆積しやすい状態であったために形成されたものである。多量の木製品、材、陶磁器類が含まれ、護岸の石垣の基盤となっている。現在はコンクリートの護岸となっているが川水が浸透するためたびたび発掘調査が中断される場面があった。厚さは約30cmほどあり、下部は灰色の粘性を帯びる砂層となっている。 |
| U | 埋め立て土 | 礫、黄色粘土層(砂質凝灰岩)などによる埋め立ての客土である。護岸工事(石垣・コンクリート)の時に搬入したもので土層から大量の土砂を短期間に埋め立てていたことが理解できる。
この埋め立てによって多くの民家が軒を並べることが可能となっている。 |

3、調査方法と整理

(1) 調査の方法

1995～1997年に発掘調査された時のグリット設定を踏襲し今回の調査を進めることとした。

しかし、グリット名については北西、南方向に伸びることに、このまま使用するには記号上難しいために新たに番号をつけ直している。

遺物については5 mグリットを1 mの小グリットに25分割(01～25)して遺物を取り上げることとした。

発掘にあたり、表土および攪乱層は重機を利用して掘削し、Ⅱ・Ⅲ層はすべて移植ゴテで掘り下げることにした。

埋め立て土は固く、厚く堆積しており、当初は人力でスコップ掘りをしたが、広い面積のため必要に応じて重機を使用した。

遺構に関連すると思われる遺物、包含層にあっては一括遺物などは地点を実測、写真撮影をして取り上げることにした。

遺構、遺物の出土の実測については、1 mグリットを基準として水系実測とし住居跡については20分の1、集石については10分の1とした。

写真撮影については小形のホワイトボードに地点、遺構名、年月日を記入して背景とともに写すこととした。写真フィルムについては多目的に利用できるスライドフィルムのみとし、写真整理の繁雑さをないようにした。

人骨の取り上げについては、きれいに掘り上げた後に実測をして各部位ごとに番号を付して取り上げた。しかし、解剖学的な見方からはむしろ形のくずれないように迅速に土や砂のついた状態で取り上げることが肝心であることを後日ご教示受けた。

貝塚の実測については平面図と断面図とし写真を併用しながらすこしずつ遺物を取り上げた。

続縄文時代前半の恵山文化の貝塚(SM-1)は1 m四方のサンプルを採集し1 mmのメッシュの篩ふるいにかけて貝や魚骨などの自然遺物と小遺物の見落としのないように心がけた。また、すべての貝層を50 cm四方に記号付して取り上げ篩にかけて遺物の採集をおこなった。

他の貝塚についても1 m四方でサンプルを採取して同様な作業をおこなった。

泥炭層からは多量の木製品が出土している。桶、樽、木杭、板材、浮子、串、縄、漆器製品などである。これらの大半は近代のものであるため、小遺物のみを取り上げ、他は写真記録にとどめた。

取り上げについては木製品の大型のものは水の入ったコンテナ、漆器などの小物は水をいれた小ケースに収納した。またそれほど変形がないと思われたものについては自然乾燥し注記をした。

(2) 遺物の整理

発掘と整理は併行して進めるようにし、発掘の遺物は早めに洗浄し、遺物の特徴を把握するようにつとめた。

遺物の注記は入舟遺跡の発掘年度、大グリット・小グリット・出土層を記すること

によって後世に活用できるようにした。

木製品については悪臭がひどいため、2～3回程度洗浄し、水の入った容器に収納した。

漆器の取り扱いについては膝の表層部分のみのもの、木質部が残っている物がある。前者は洗浄した後に小片をピンセットでひとつずつ大和のりで和紙に張り付けガラス板にはさんで保管することとした。後者は水の入った容器に入れて収納保存をすることとした。

実測については形態がほとんど失われているために困難であるため、観察と分析のみにとどめている。

鉄製品は腐食はしているが丈夫であることから錆落とし程度とし実測を行なった。

土器、石器については原則として全点に注記をすることとし、その後に接合、修復をすることとした。

土器については接合した時に半分以上あるものは石膏で全体復元をしたが、それ以下のものは今後の収蔵も考慮して接合部分の弱いもののみ石膏で修復する程度にした。

遺物は実測は現寸であるが、微小のものについては拡大実測も併用し、トレースは土器については3分の2に縮小し、他はそのままとした。陶磁器の実測において手書きの染め付けをどのようにしたらより鮮明に表現できるかについてアートペン、筆ペンなどをつかってみたが上手くいかず鉛筆の濃淡で表現することとした。土器破片は拓本を中心とし、凹凸のあるものは実測とし、写真撮影も必要に応じて行なった。

人骨については、遺物ではあるが過去に生きていた人間であるため人権的な考慮を重視し札幌医科大学にすべて運搬して、研究そして保管していただくことにした。人骨については、出土状況を実測した後に、各部分に番号をつけて骨を取り上げ、大形の骨を各ケースにそれぞれ収納し、また墓底の土を篩にかけて出土した歯や小片も同様にした。

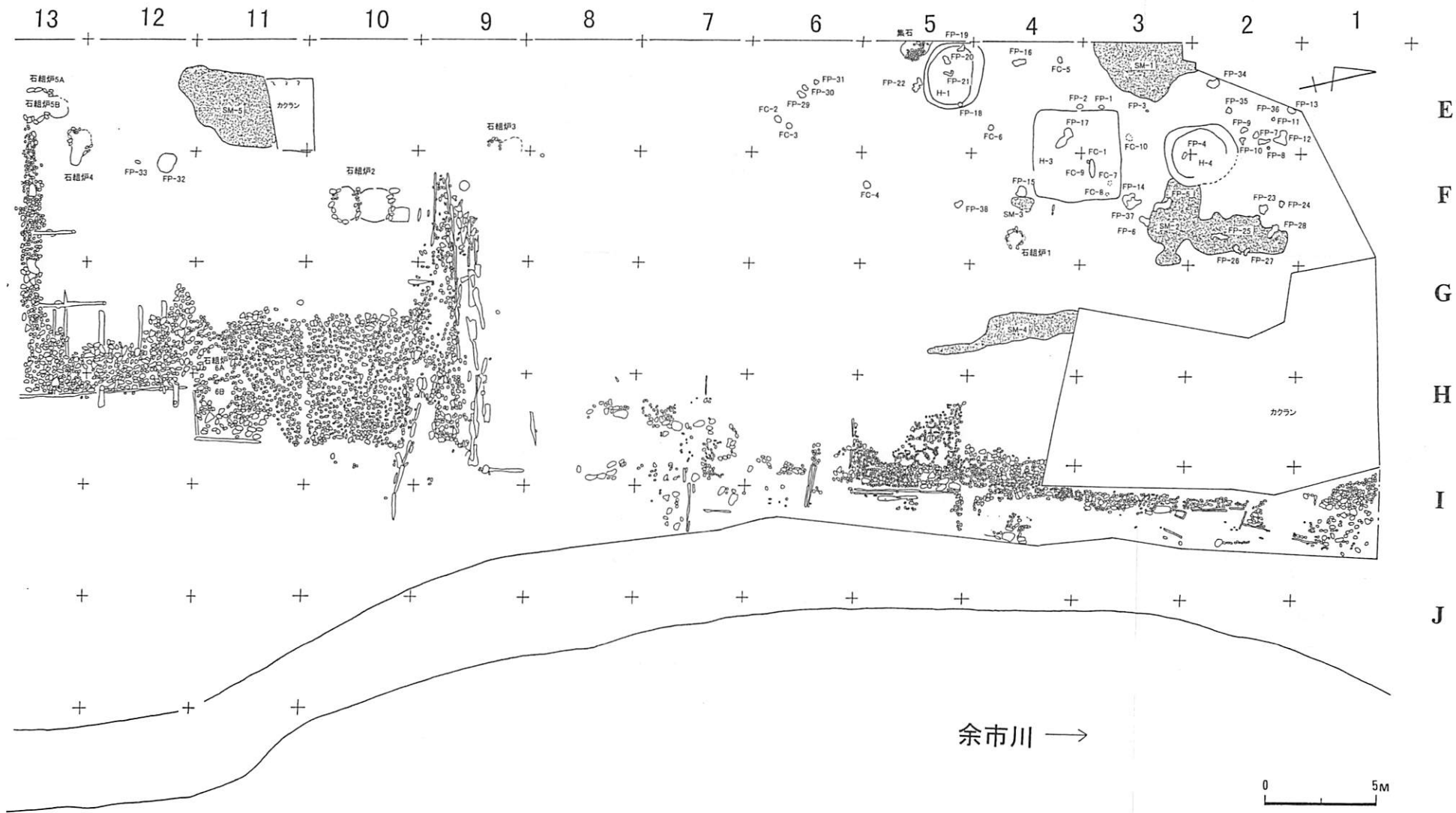
遺物の整理については主要な遺物は報告書の図版にあわせてコンテナや小さいケースに保管し、一般の方々に供するようにした。

報告書の刊行後、主要な遺物については、博物館の展示や学校での授業などの教育普及として活用を図っていく予定である。

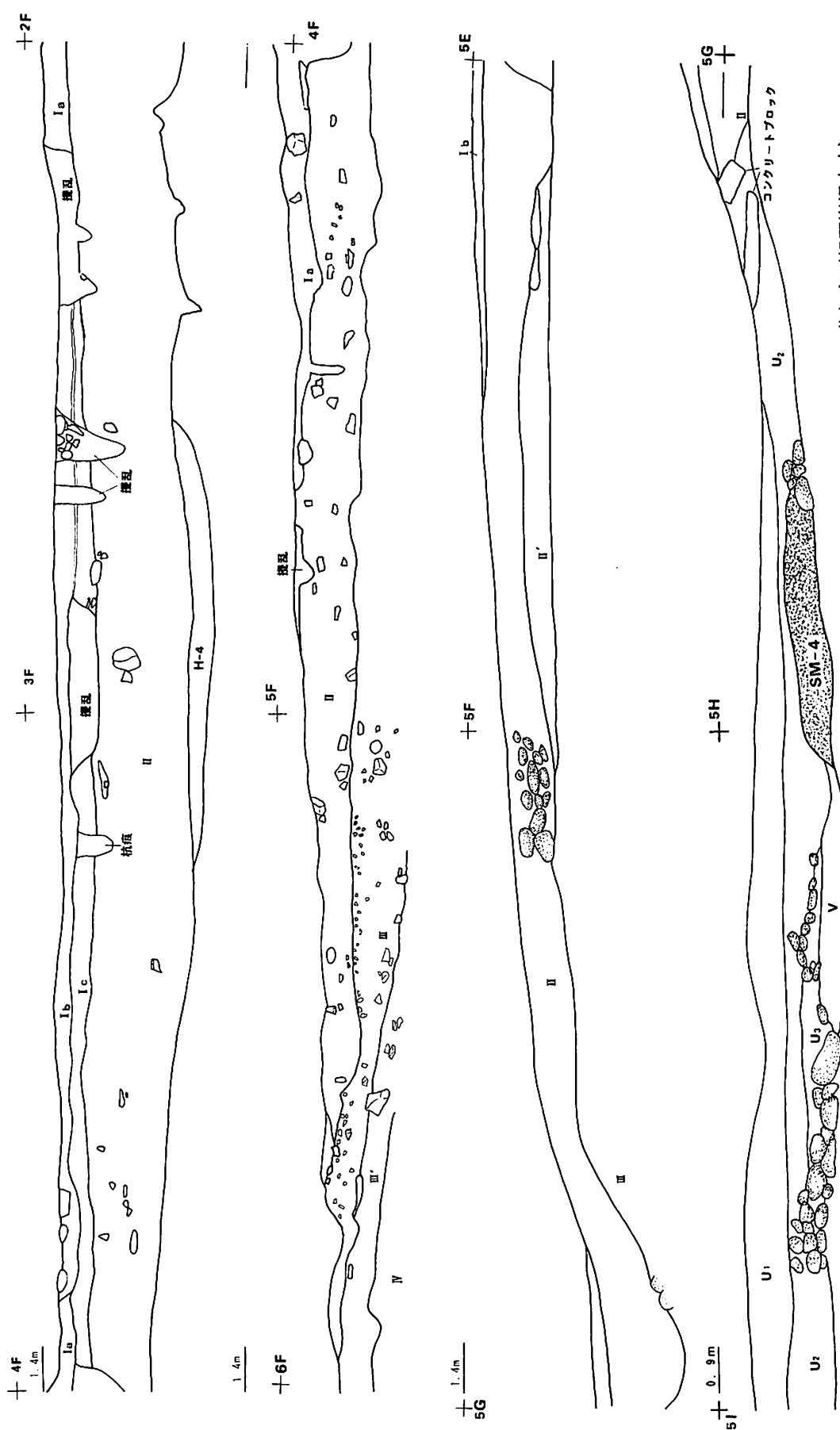
最後に教育普及活動についてであるが、入舟遺跡では夏に小学生から一般の方々を対象として発掘調査の体験学習を2回実施した。

その成果として参加者が自ら古代に接することができ、郷土の歴史に興味と関心を持っていただいたことである。

今後もこのような教育活動を通して、文化財に対する理解を深めていきたい。



第4図 遺構平面図



- U₁ 黄色土 (凝灰岩埋立土)
- U₂ 暗褐色土 (凝灰岩をブロック状に混入)
- U₃ 暗褐色土 (粘性を有する)
- Ia 黑色土
- Ib 黄褐色 (凝灰岩混りの埋立土)
- Ic 黑色土 (シルト粒が混入)
- II 黑色土 (角礫が多く混じる)
- II' 暗黑色土
- III 黄褐色砂
- III' 暗黄褐色砂
- IV 黄褐色砂 (しまり有)
- V 黑色土 (泥炭層)

第5図 土層断面図 (南北および東西)

第Ⅱ章 遺構と遺物

1、遺構について

発掘調査によって下記の遺構が確認され、続縄文時代、擦文時代、近世・近代の遺構が判明した。

住居跡	3軒（続縄文時代1、擦文時代1、不明1）
焚き火跡	38ヶ所（続縄文時代1 時期不明37）
貝塚	5ヶ所（続縄文1、近世・近代2、昭和時代？2）
集石	1ヶ所
剥片集中	13ヶ所
石組炉	6ヶ所
護岸石垣	1列

2、遺構の特徴

遺構について説明するが出土した個々の遺物については一覧表を参照していただきたい。

(1) 貝塚（SM）

5ヶ所が確認され、それぞれにSM-1～5がある。

◎SM-1（第6～10図・口絵4）

発掘区の関係で全形を知ることができないが、約4mほどの範囲で厚さ約30cmほどの貝塚でⅡ層中に確認できた。貝類はコタマガイ、カキ、イガイなどが主体となる混土貝層である。出土遺物は土器、石器、骨角器などで恵山文化の所産のものである。

恵山式土器の器形は頸部に無文帯を持ち肩の張る甕形のもので、頸部の上部と下部に平行沈線を数条施し、肩部には省略した結節沈線が見受けられるものを特徴とし、鋸歯文や波状工字文（No27）も見られる。恵山式土器に相当するもので器形のなだらかさ、文様の簡略などから後半の位置付けをしておきたい。後北式は貝塚の周縁の出土である（No31）。石器は有茎石鏃、無茎石鏃、スクレイパー、礫玉、魚形石器がある。特徴的なものは魚形石器で鼻部と尾部に沈線を一条配している。No47は魚形石器の破片で鼻部を作出しているものでNo48は通常の場合石材を縦にして形を作りあげているが、ここでは横にして形を整えている。

骨角器は動物を模したと思われる尖頭具の一部と推定されるもの（No49）、組み合わせ釣針の先（No50）、銛頭（No51～57）、針（No58、61～65）、中柄の破片（No60）、用途不明の尖頭器（No59）などがある。

銛頭は2段ほどのあぐをもつ閉窩式のもので、恵山型と称されるものである。針は頭部にくびれをもつ特徴がある。

また、貝層および土壌を篩ふるいにかけた時に径約6mm、幅3mmほどの金属製の輪が採取されたが、分析によって亜鉛と判明したため部分的な攪乱遺物の混入と考えたい。

貝塚の南方には長軸1.5m、短軸1.2mほどの墓坑が貝塚を堀こんで一基確認され人骨の残りは良好であった。

頭位は西方向であり、骨の出土状況ではまともまっているため改葬をしている可能性

がある。人骨の側に副葬されていた恵山式土器はややくびれをもつ深鉢で全面に縦走縄文が見られる。

◎SM-2・3 (第4図)

表土を取り除きⅡ層上面に見られた。SM-2は径7mほどの不定形、SM-3は径3mほどの円形を呈し、厚さは3cmほどでイガイが散在していた。遺物の出土は無く近・現代のものと思われる。

◎SM-4 (第13~15図・口絵6)

4Gグリット周辺にあり、川岸に形成されたものである。イガイを主体としてもので斜面に約20cmの厚さをもっている。

遺物は無造作に捨てられているもので陶磁器類、漆器、金属器、骨角器などが出土した。

陶磁器として幕末と思われる伊万里焼の酒徳利 (No2~4)、明治時代前半と思われる焼酎徳利 (No1)、三平皿 (No6) などがある。

漆器はアイヌ民族がシントコ (行器) と称するもので脚部で金具がついている (No11.12)

金属器は鉄鎌、小刀、鉄鍋、釣針、キセル、耳飾りがある。

鉄鎌は意識的に折り曲げたようで、刃部のみである。鉄鍋の耳には一孔、多孔のものがあり、小形の三脚のものもある。耳飾りはアイヌ民族がニンカリと称しているもので、青色のガラス小玉が先端に見られる (No24)。

骨角器は銚を作るための素材 (No7)、銚頭と思われるもの (No9)、針入 (No8)、中柄 (No10) などがある。

◎SM-5 (第16~19図・口絵6)

11Eグリット周辺にあり、平坦部に形成されたものである。イガイを主体としたもので約20cmの厚さをもっている。

遺物は無造作に捨てられているもので陶磁器類、漆器、金属器、骨角器などが出土した。

陶磁器として幕末に輸出用に醤油や酒などをいれた容器のコンプラ瓶 (No7.8)、明治時代前半と思われる焼酎徳利 (No1~6) などがある。

金属器は鉄鎌、小刀、鉄鍋、キセル、舟釘、耳飾りなどがある。

鉄鍋は大形のもので耳は二孔で、三脚がついている。耳飾りはアイヌ民族がニンカリと称しているもので、先端につけられたと思われるガラス小玉は失われている (No13)。

骨角器は中柄 (No18~20)、刺突具 (No21)、針 (No23)、針入 (No27.28)、エイの尾骨 (No24.25)、用途不明 (22.26) などがある。

エイの尾骨は加工はしていないが猛毒であるらしく狩猟、漁労に使用されていた可能性もあるだろう。

針入は鳥管骨を利用したもので金属器で鋭利な刻みの文様が施されている。

(2) 住居跡 (H-1・3・4)

Ⅲ層の上面において確認されたもので当初は4軒としたが単なる落ち込みと思われ

るものがあつたために3軒とした。

◎H-1 (第11図)

径6mの楕円形を呈し、深さ20cmほどである。床面からは縄文時代の恵山式土器、覆土からは石鏃、スクレイパー、石錐などが出土した。

恵山式土器は胴部がのびた深鉢形で、上下を併行沈線で区画し縄文が施されているもので恵山式(南川Ⅲ群併行)に相当する。

◎H-3 (第12・22図・写真図版3)

4Fグリットに位置し約3.5mほどの方形を呈すると思われ、竪穴上面には土器が密集していた。南側に土器底部を伏せて粘土で固め、石片の煙道らしき痕跡が見られた。床面近くから初期の擦文土器とロクロを使用した土師器坏が出土している。

◎H-4 (第12図)

2Fグリットに位置し、長径2.9m、短径2.6mほどの楕円形を呈し、Ⅲ層を掘りこんだ皿状の床面となっている。柱穴は検出できなかったが、剥片のブロックが2ヶ所あり、石器の製作跡かもしれない。時代はさだかではない。

(3) 焼土 (第20・21図)

Ⅱ層中にみられるものでFP-1からは縄文時代の恵山式土器と思われる小片が出土したのみで他については出土遺物は皆無のため時代は定かではない。

遺構と遺物の分布などから縄文～擦文時代にかけてのものと思われる。

(4) 集石 (第22図・写真図版3)

5EグリットにおいてⅢ層をわずかに掘りこみ自然の円礫が密集している。下部にはわずかであるが焼土の痕跡が認められた。時代については定かではない。

(5) 石組炉 (第22～24図)

石組炉は5ヶ所確認されたが、当時の原形そのままなのは石組炉1のみで他は大半が崩壊されていた。時代については石組炉2が貝塚(SM-4)の一部を切って構築されているため明治時代前半以降といえるが下限は定かでない。聞き取り調査でも明確にできず昭和時代初期頃までと考えておきたい。

記録にはこの場所について石組炉をはじめ漁業についての記述がなく、今回の考古資料は貴重な歴史の裏付けとなるだろう。

◎石組炉1 (第23図・口絵5)

4FグリットにありⅢ層を掘り込んでいる。直径約1.2mで安山岩の細長い礫をたてに並べて粘土で固めている。焚口は川の方角に向かっており、南東の向きで焼土などは確認できなかった。

◎石組炉2 (第23図・口絵5)

10Fグリットにあり、Ⅲ層を掘り込んでいる。炉はそれぞれ直径1mほどで2ヶ対のものである。細長い自然礫を積み粘土で固めている。焚口は山方向の東向きである。

炉の断面は木炭層と灰層が厚く堆積する。

◎石組炉 3 (第23図)

9 Fグリットにあり、Ⅲ層を掘り込んでいる。炉は直径1 mほどで2 ケー対のものである。細長い自然礫を積み粘土で固めている。焚口は定かでない。

炉の断面は木炭層と灰層が厚く堆積する。

◎石組炉 4 (第24図)

13 Eグリットにあり、Ⅲ層を掘り込んでいる。炉は直径1 mほどでほとんど原形がなく細長い自然礫の囲いのみである。炉の断面は木炭層と灰層が見られる。

◎石組炉 5 (第24図)

13 Eグリットにあり、石組炉 4 と接近し、Ⅲ層を掘り込んでいる。炉は直径1 mほどでほとんど原形がなく細長い自然礫の囲いのみで2 ケー対の可能性もある。炉の断面は木炭層と灰層が見られる。

◎石組炉 6 (第24図)

11 G・11 Hグリットにあり、護岸礫の上から検出された。炉は直径1 mほどでほとんど原形がなく細長い自然礫の囲いのみで2 ケー対の可能性もある。炉の断面は木炭層と灰層がわずかに見られる。

(6) 剥片集中 (第4図)

13ヶ所が確認された。剥片(フレイク)、微小剥片(チップ)が20 cmほどの範囲に集中しているもので、石器製作に関係していると考えられるが時代は特定できなかった。

遺構全体図に場所のみを図示している。

(7) 護岸石垣 (第4図・写真図版1・2)

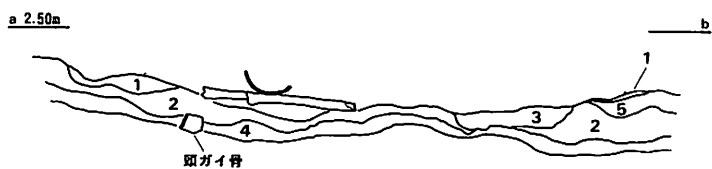
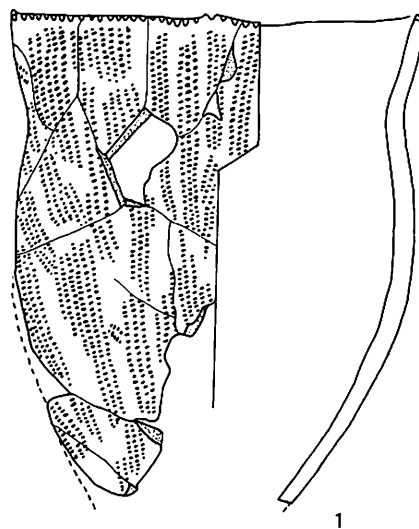
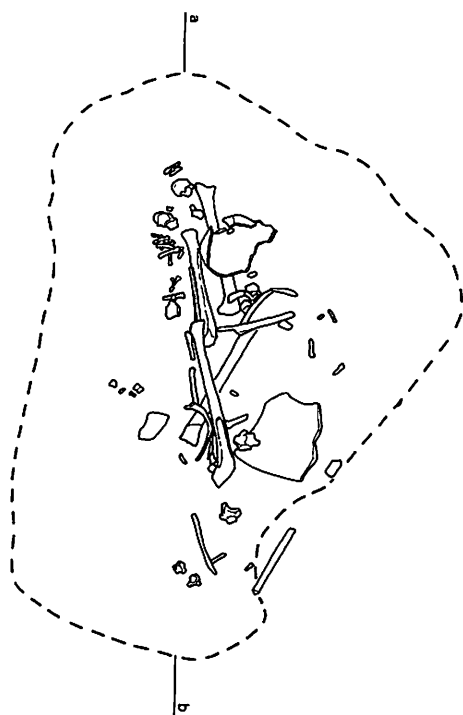
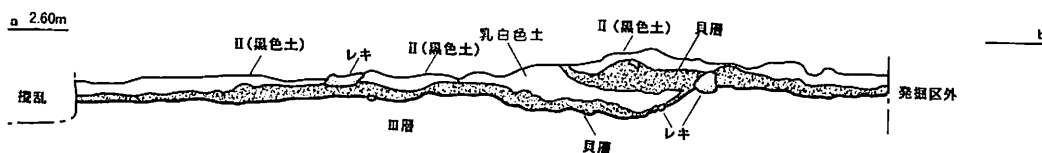
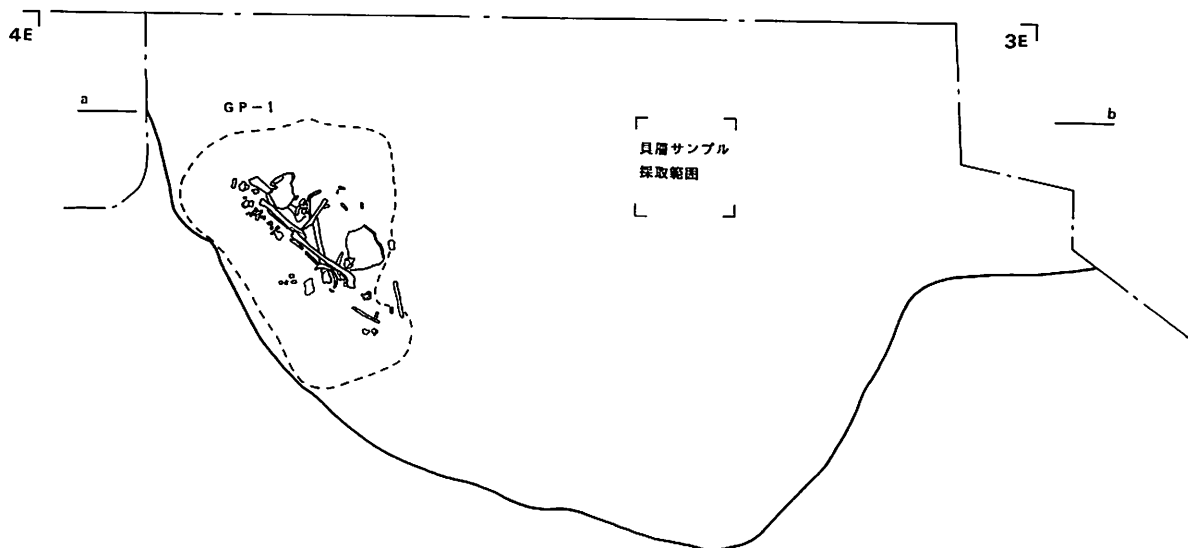
余市川に沿って護岸石垣が見られ高さ約0.6~1 m、長さ約60 m、幅約3~6 mほどであった。石垣は木杭で材を固定して20~50 cmの角礫および円礫安山岩を無造作に積んでいる。

10~11 Hグリットはもっとも幅があつく、陸地にむかって石垣がみられる。舟の係留などに関係するかもしれない。

この護岸工事の時期であるが、石垣の上部から木製の角胴(12 Gグリット)、下部から焼酎徳利、三平皿(印判を含む)が出土していることから明治時代以降であるといえる。

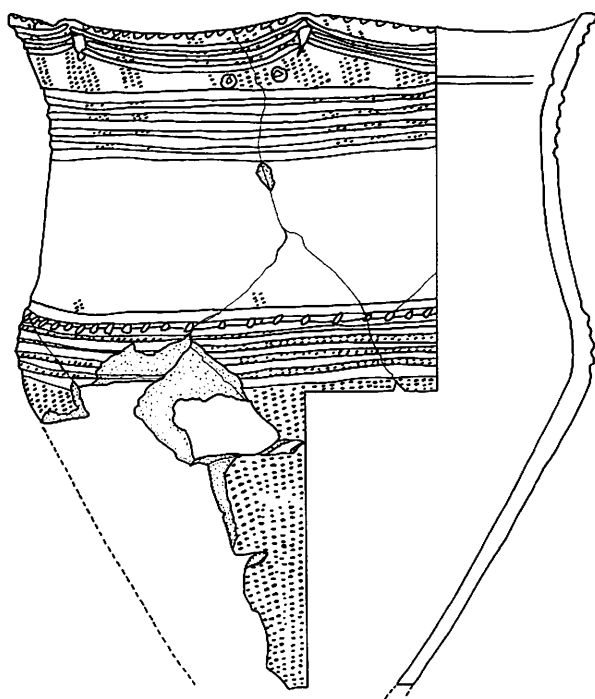
かつての作業場も護岸工事とともに埋め立てが行われ、かつての河川流域にあった石組炉も廃棄され、民家が建ち並ぶ風景へと一変したことが想像できる。

コンクリート護岸は昭和30年代につくられたものであり、この完成によって石垣の護岸の上に再び埋め立て土が覆い今日の姿になったといえる。

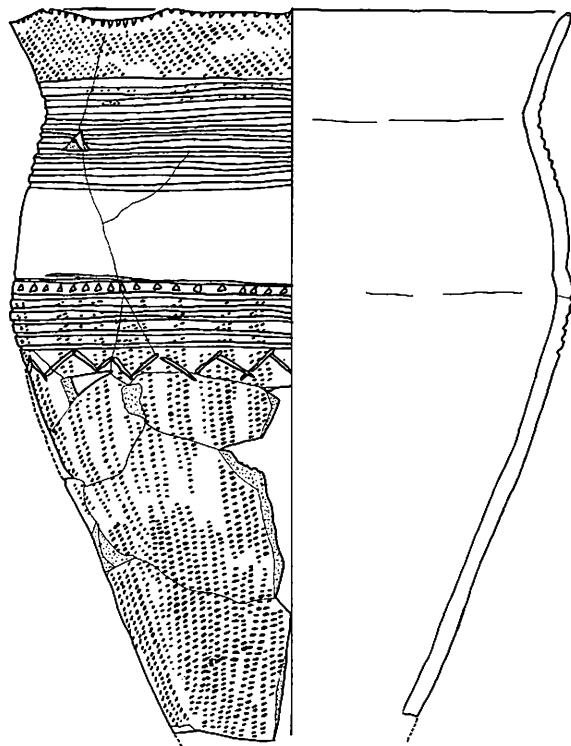


- 1. 褐色土 (混貝土層)
- 2. 貝層
- 3. 魚骨層
- 4. 黒色砂層
- 5. 黒褐色土層

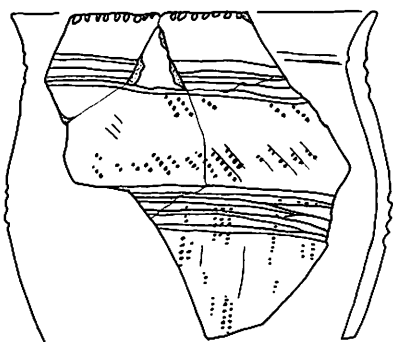
第6図 貝塚 (SM-1) と出土遺物



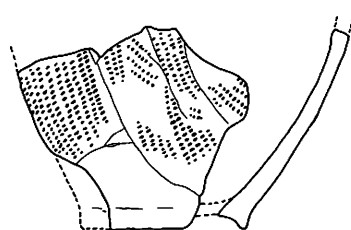
2



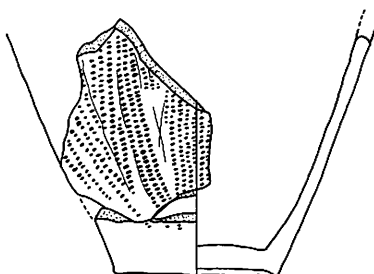
3



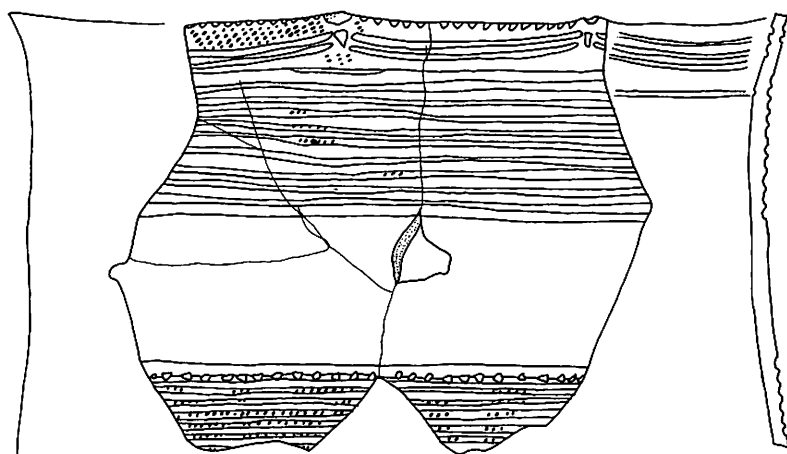
4



5

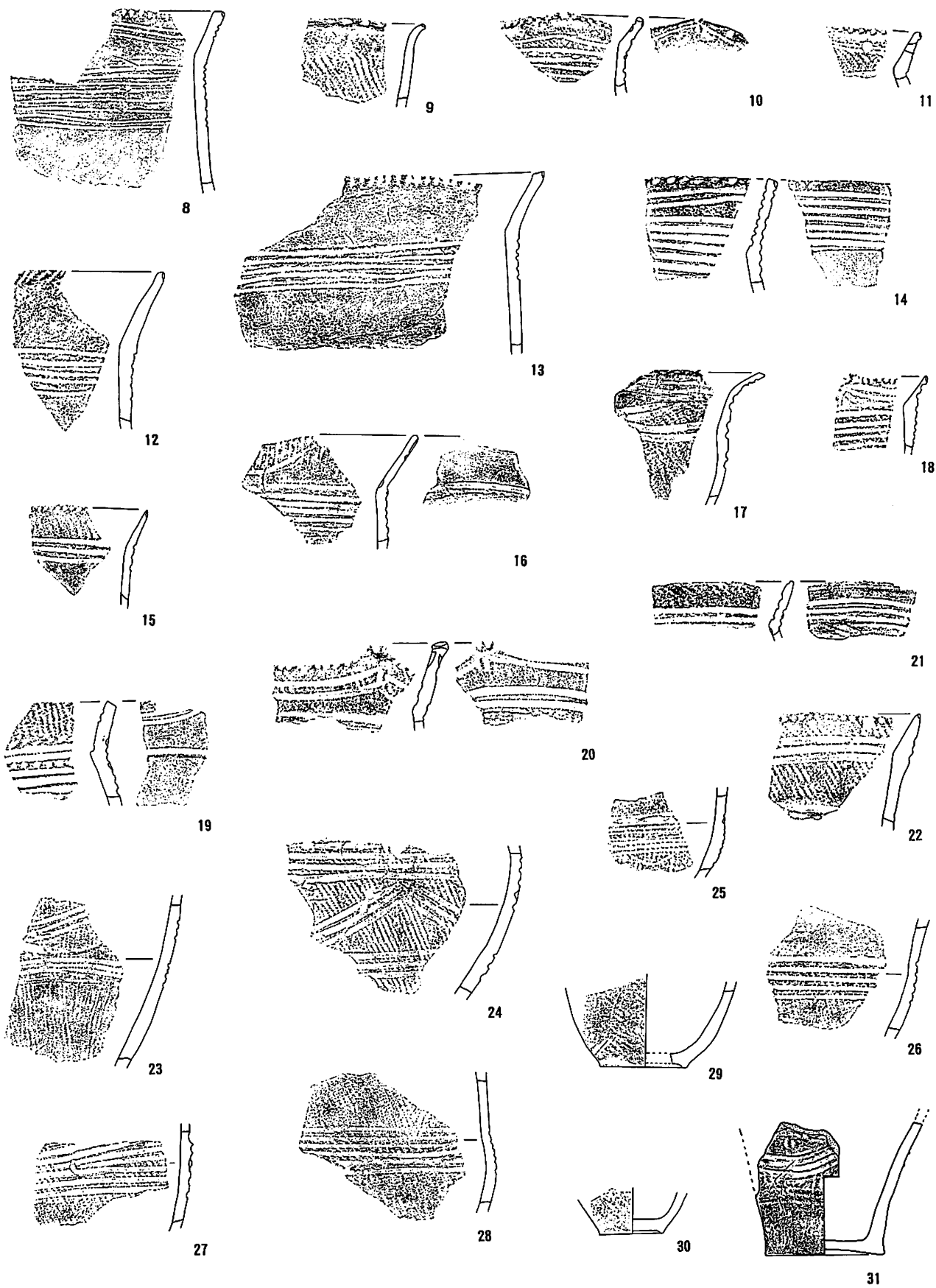


6

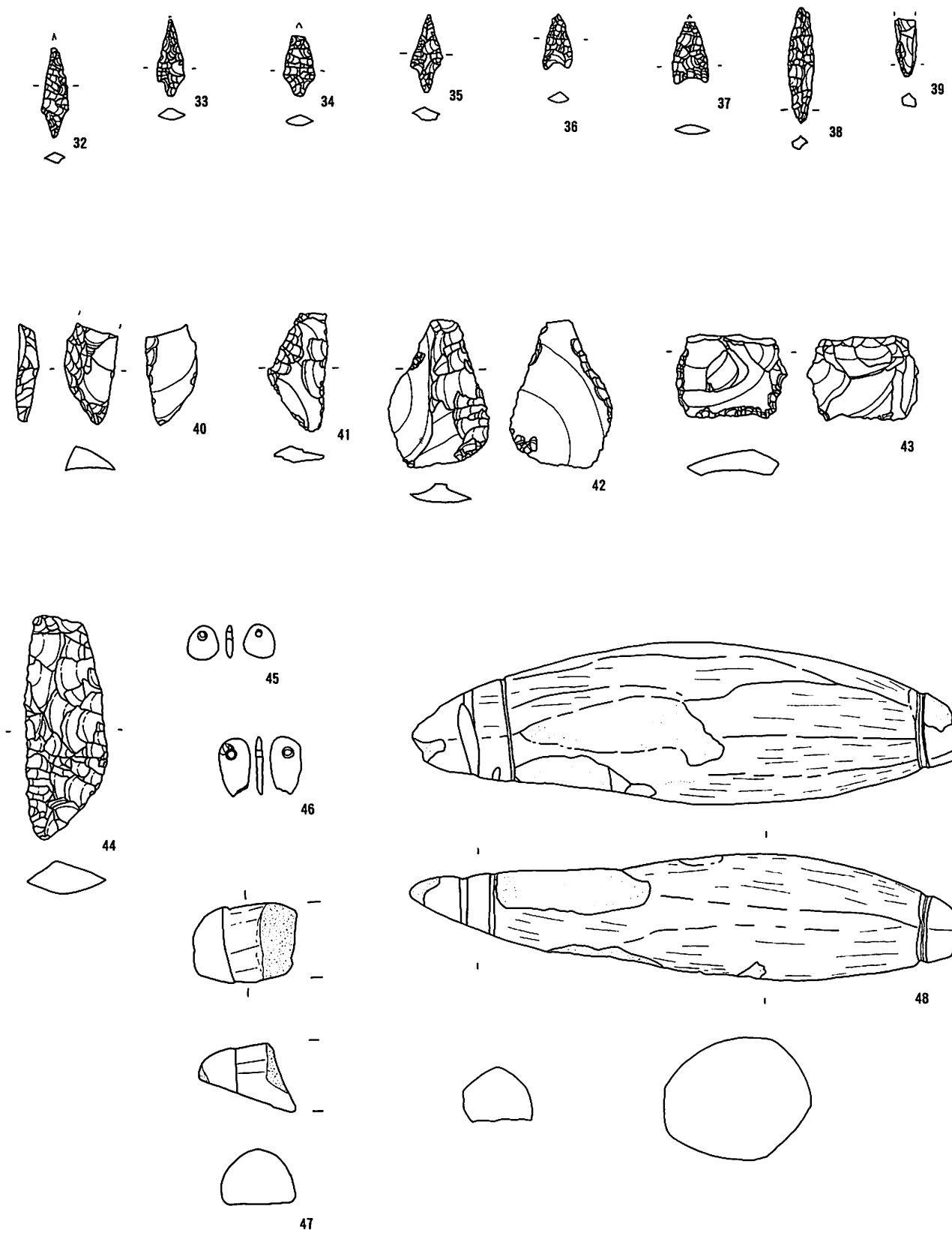


7

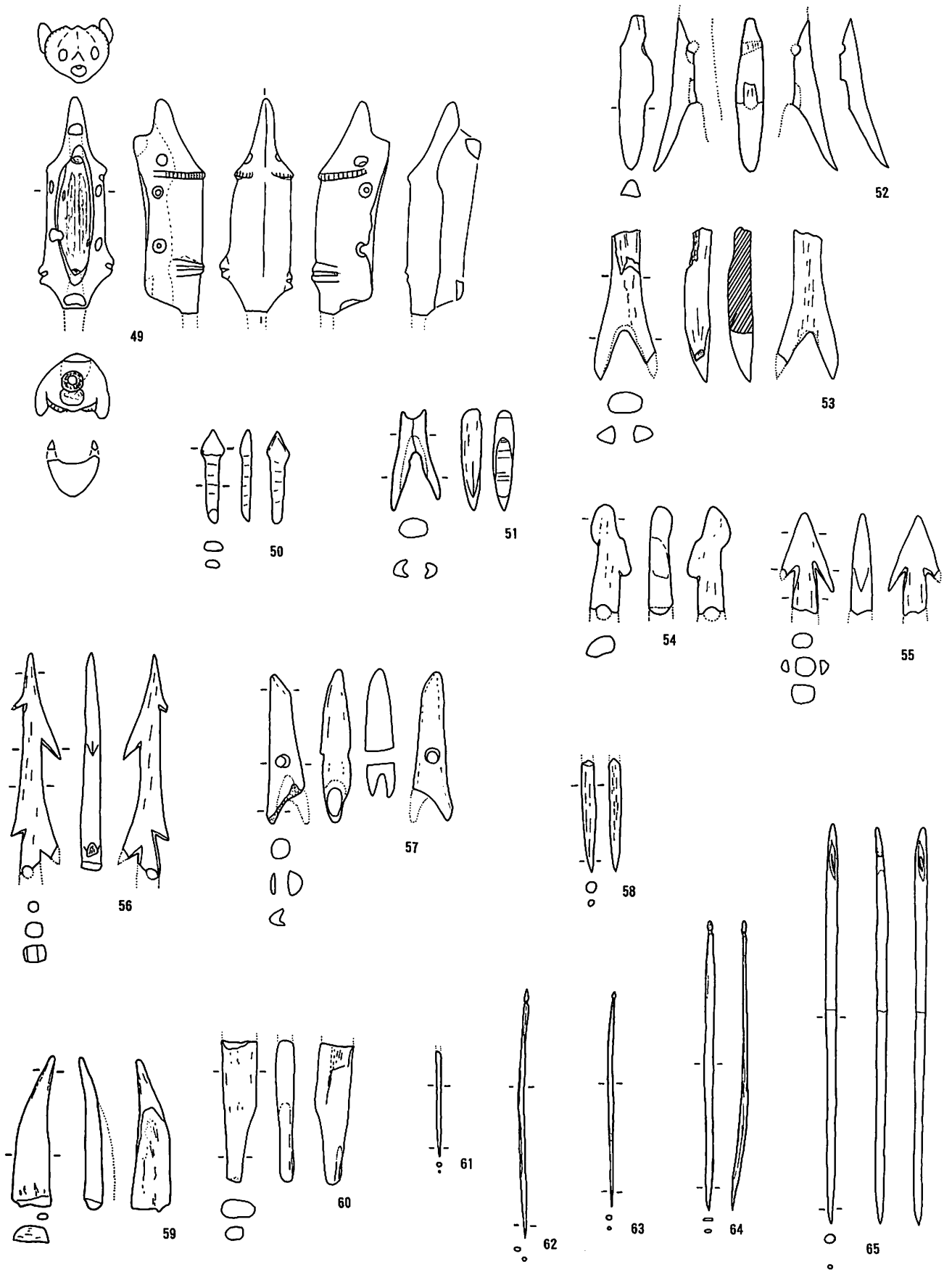
第7図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物



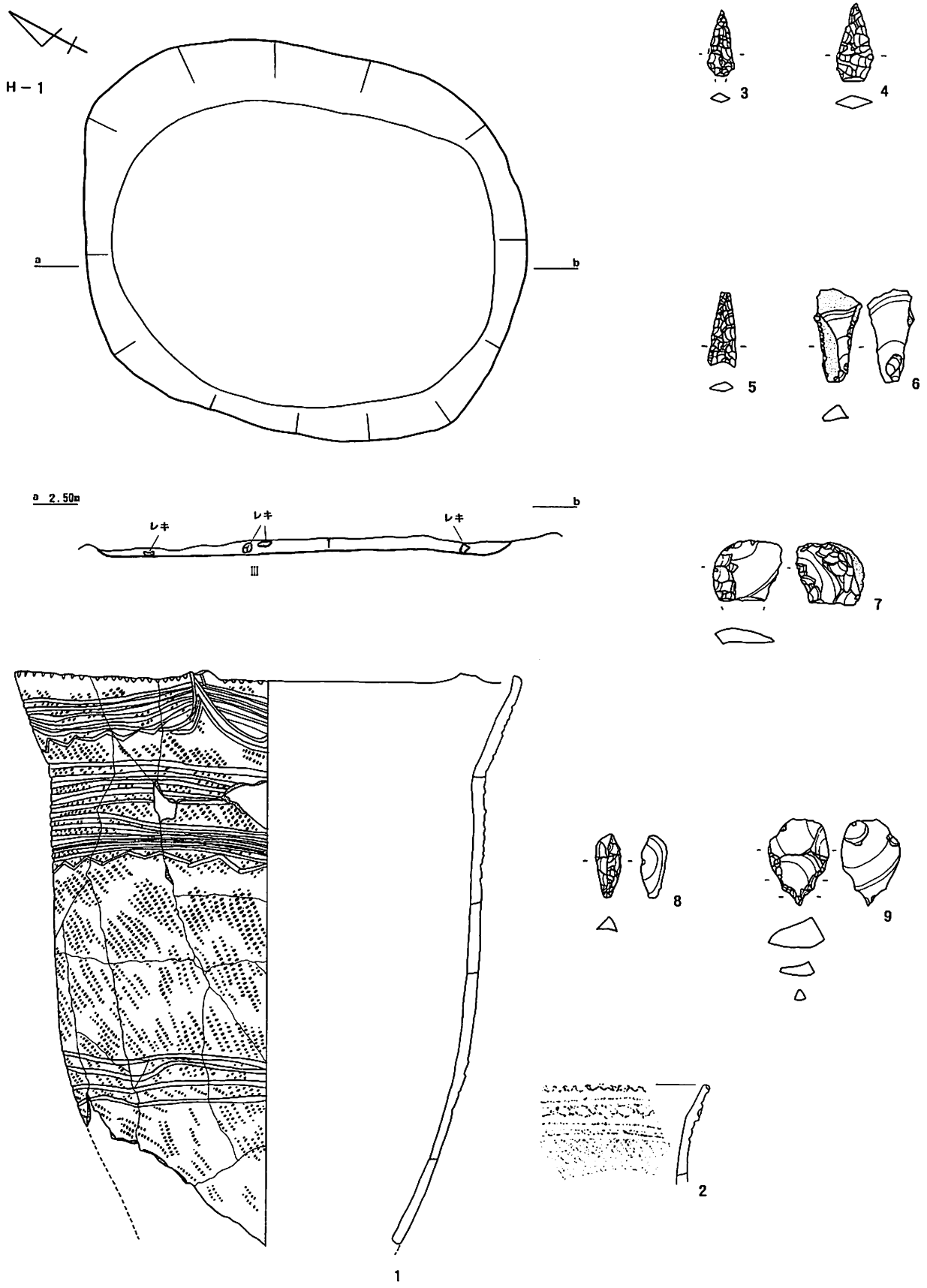
第8図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物



第9図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物

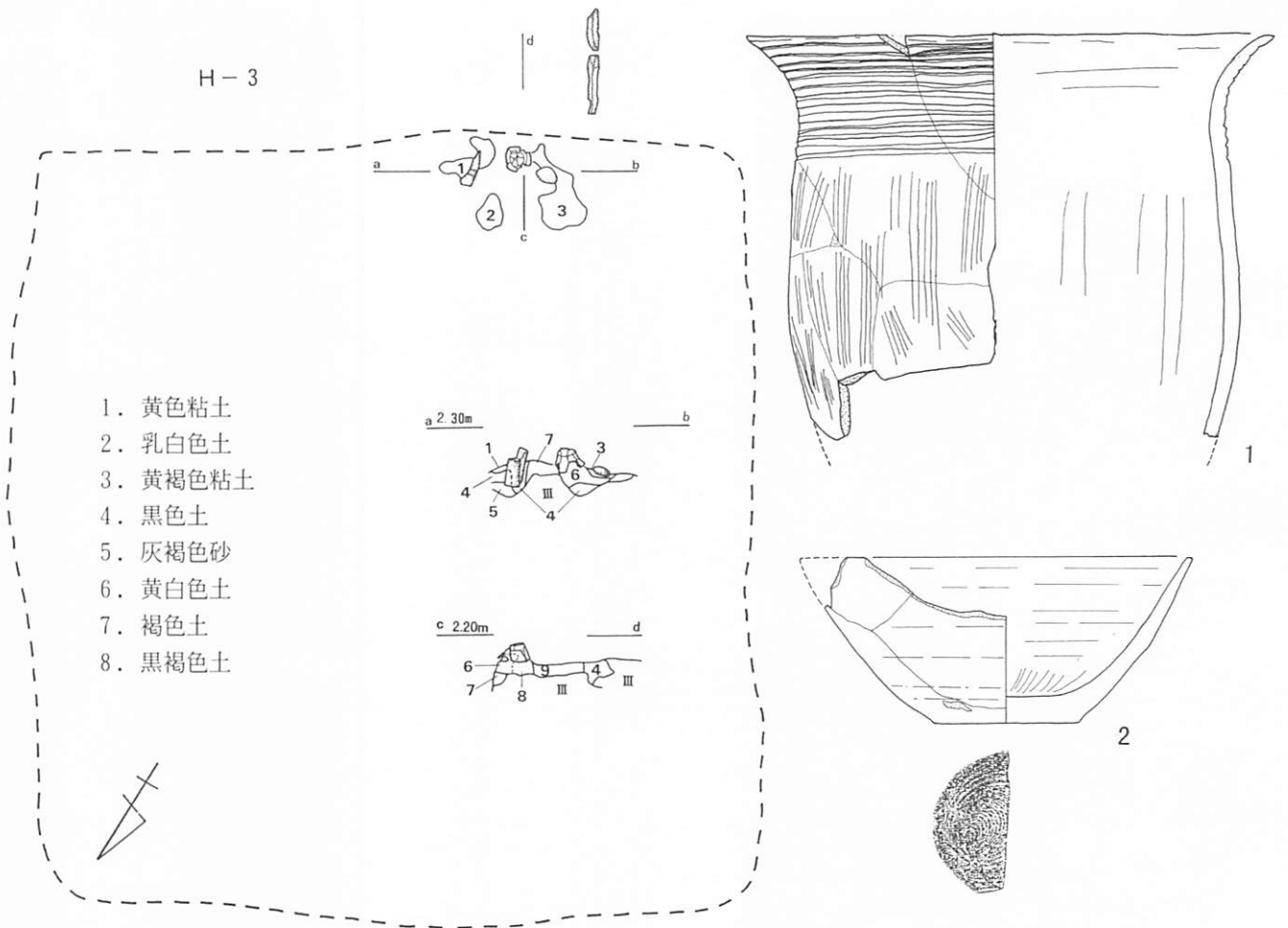


第10図 貝塚 (SM-1) 出土の遺物

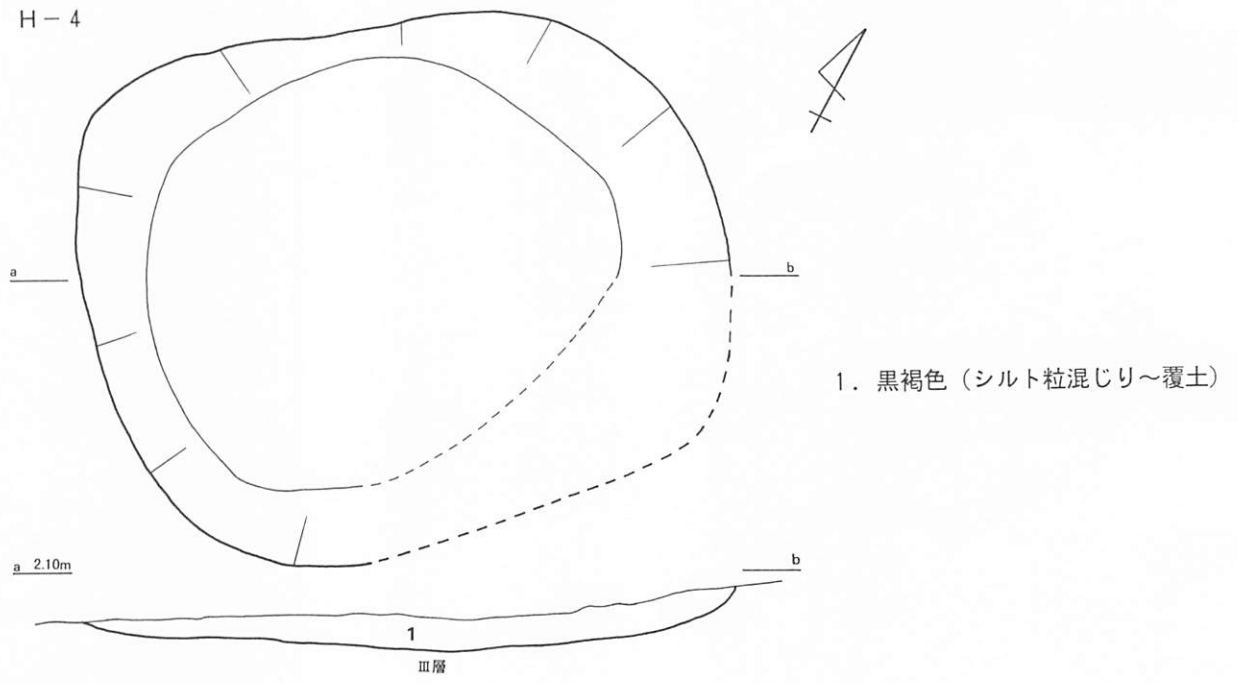


第11図 遺構 (H-1) 出土の遺物

H-3

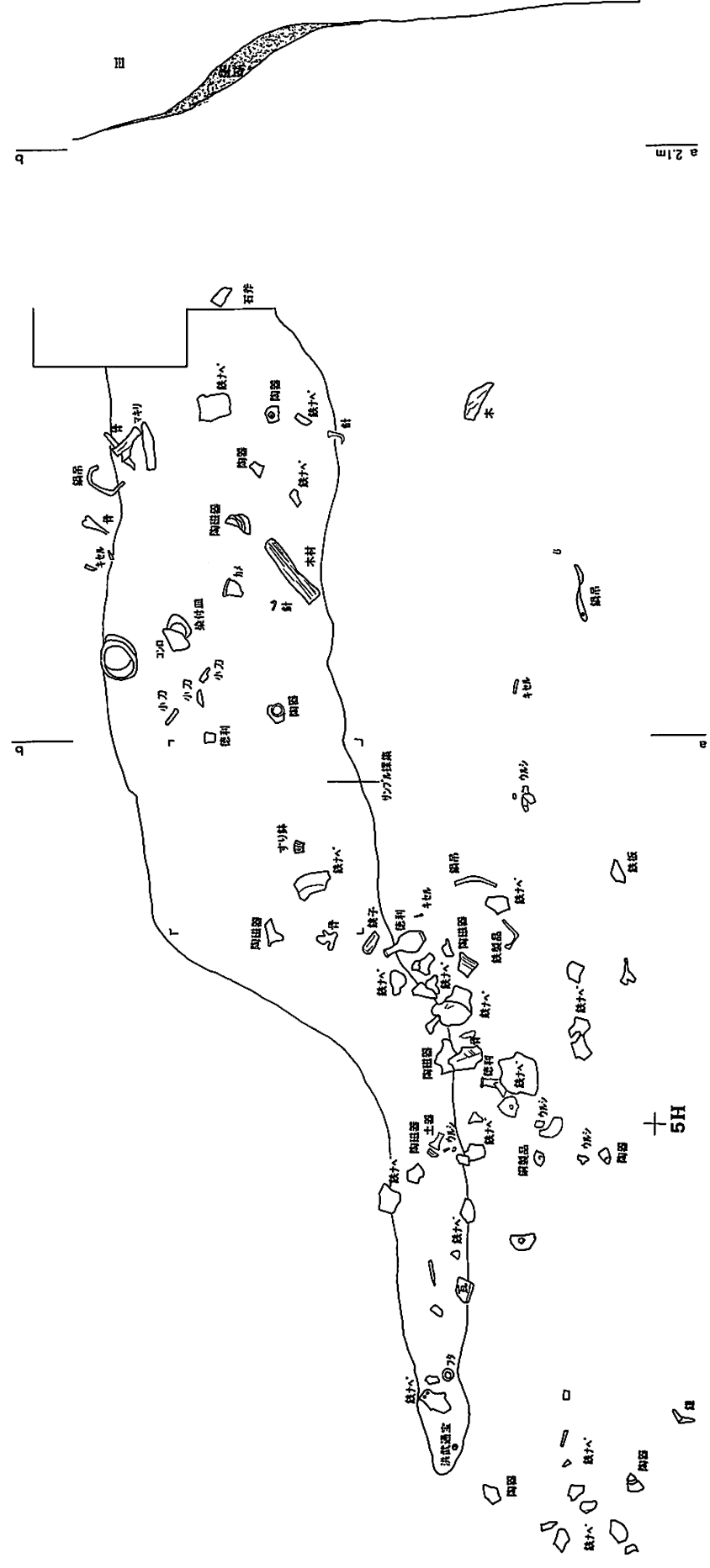
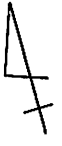


H-4



第12図 遺構 (H-3・4) 出土の遺物

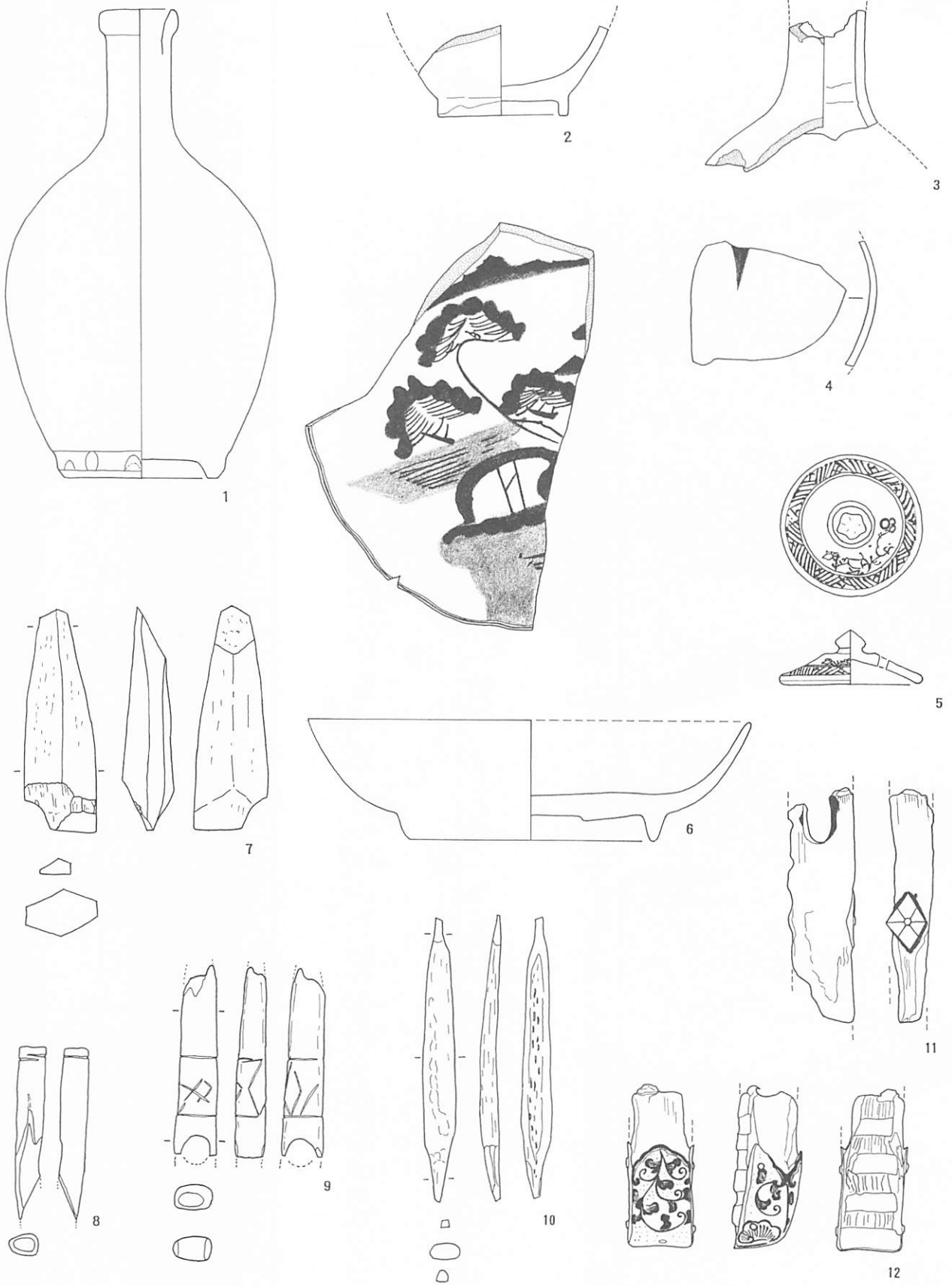
5G



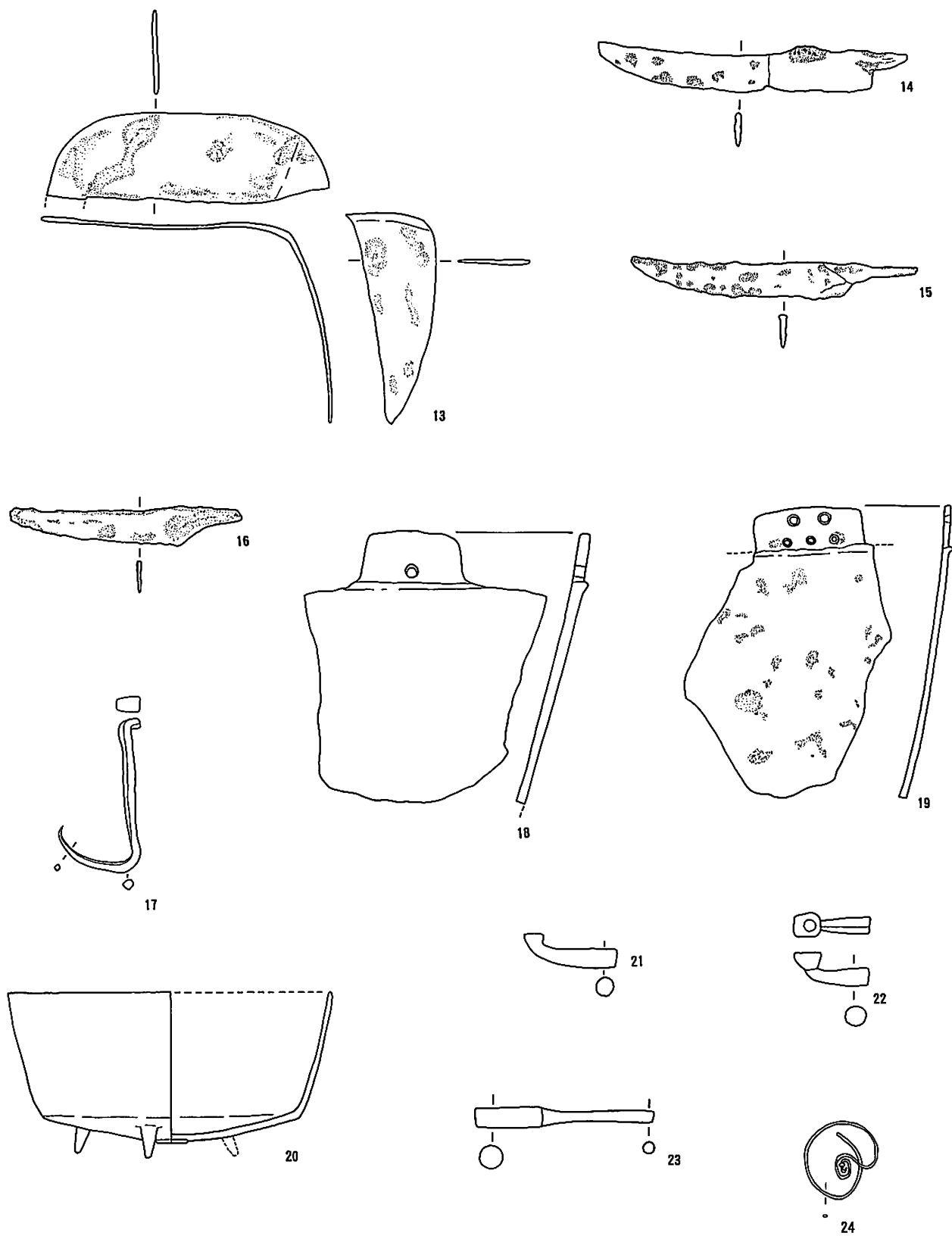
2.1m

5H

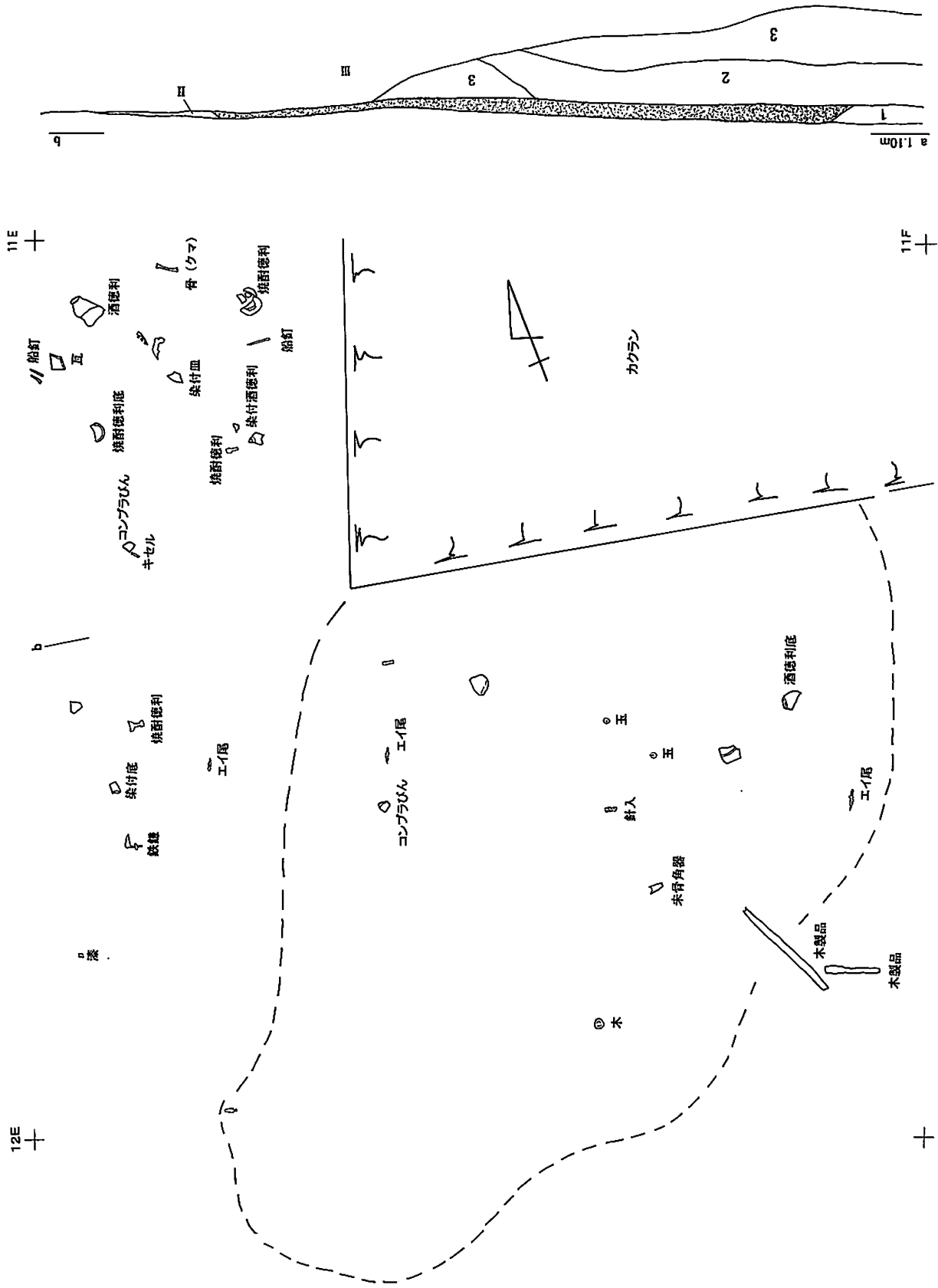
第13図 貝塚 (SM-4) の遺物状況



第14図 貝塚（SM-4）出土の遺物

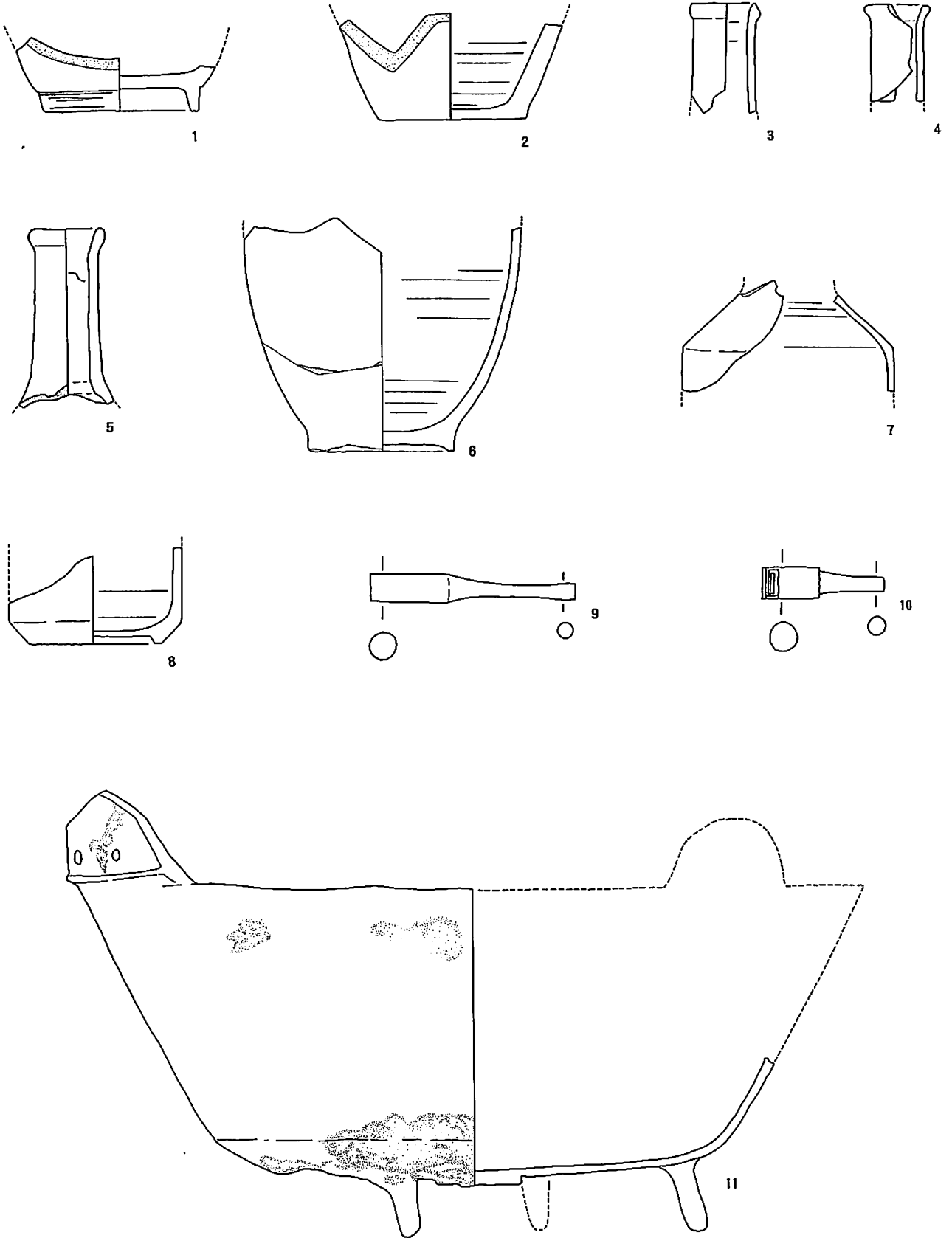


第15図 貝塚 (SM-4) 出土の遺物

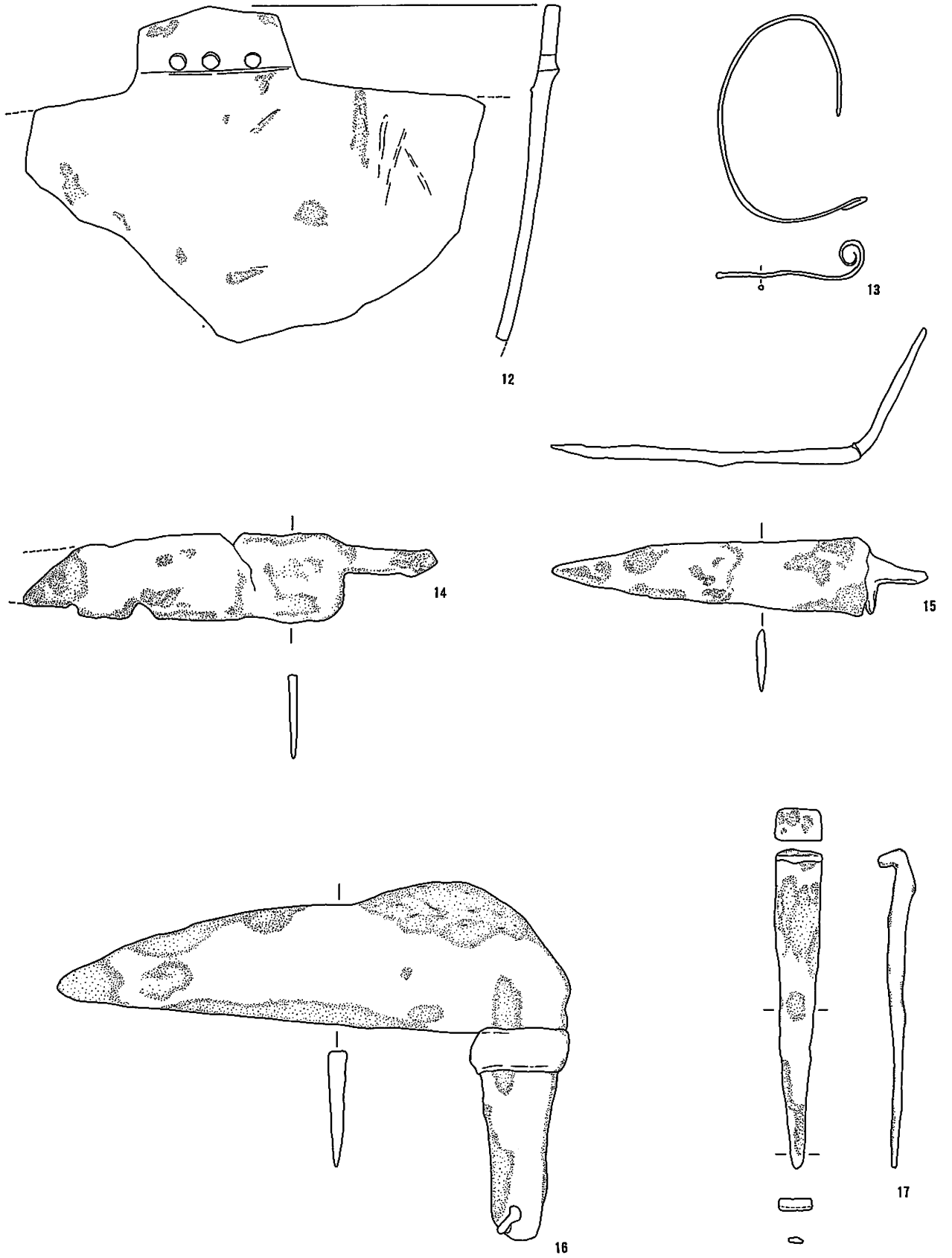


- 1. 黒色土
- 2. 暗褐色土
- 3. 黄褐色土 (ハミスを含む)

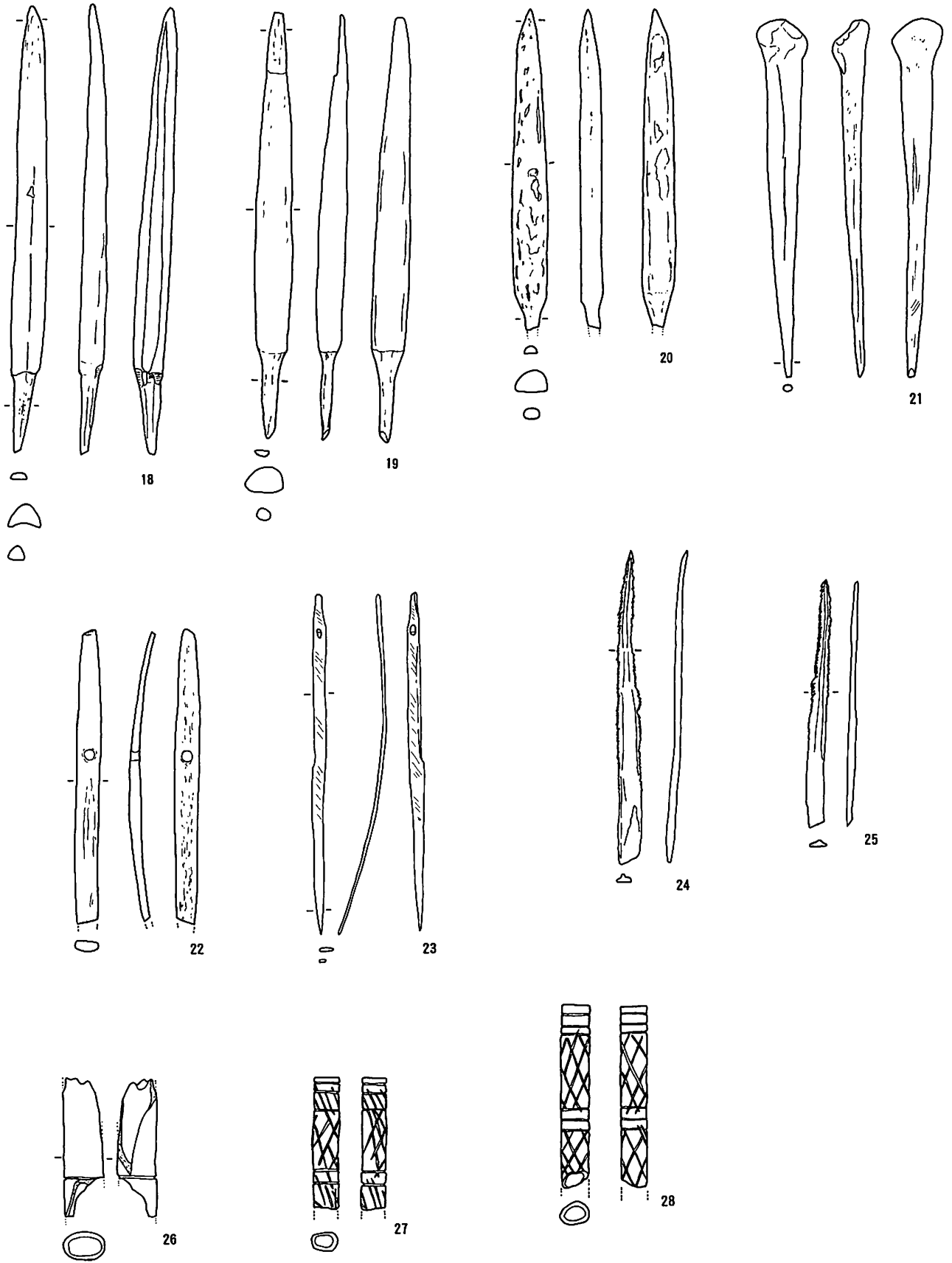
第16図 貝塚 (SM-5) の遺物状況



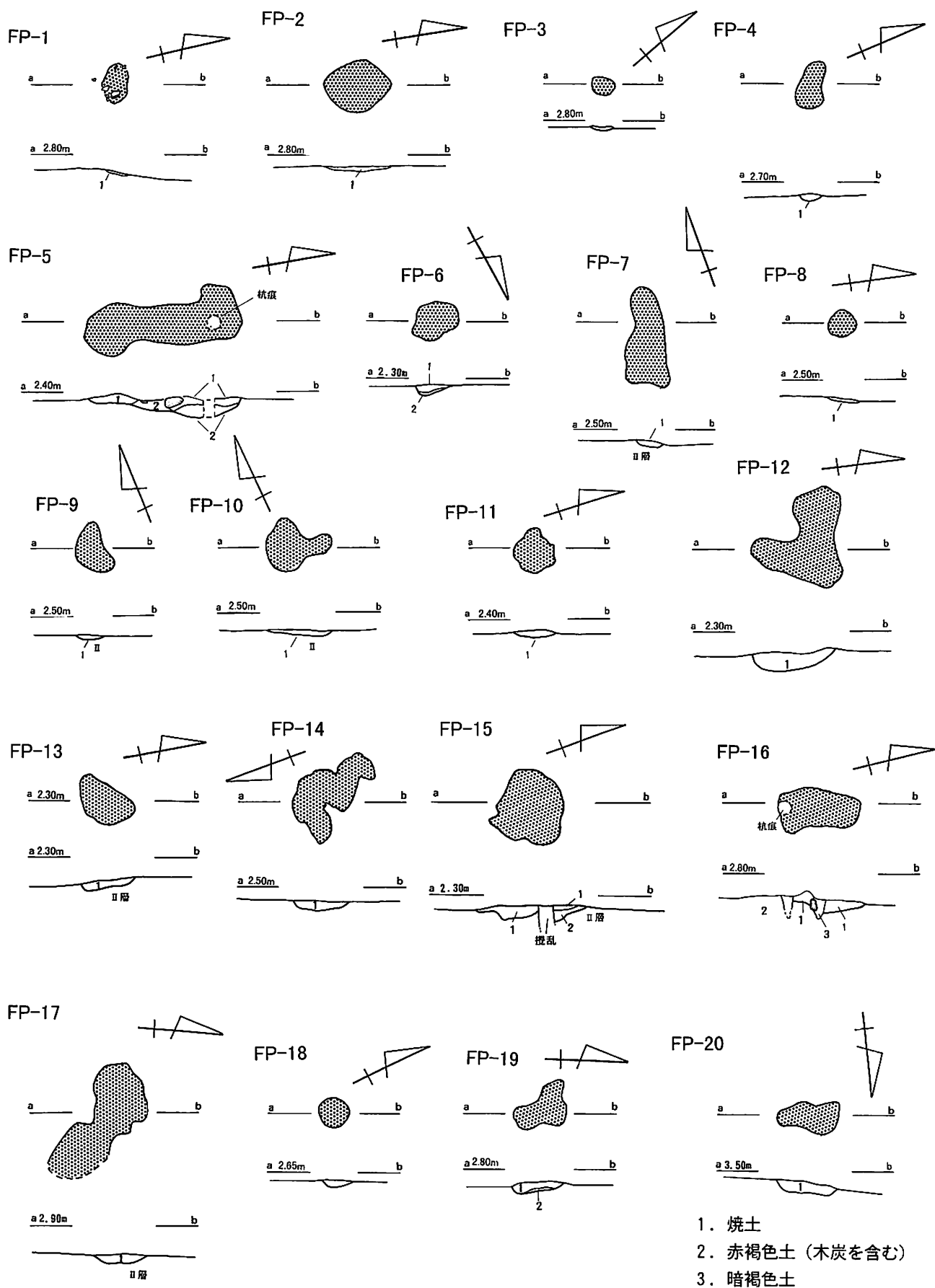
第17図 貝塚 (SM-5) 出土の遺物



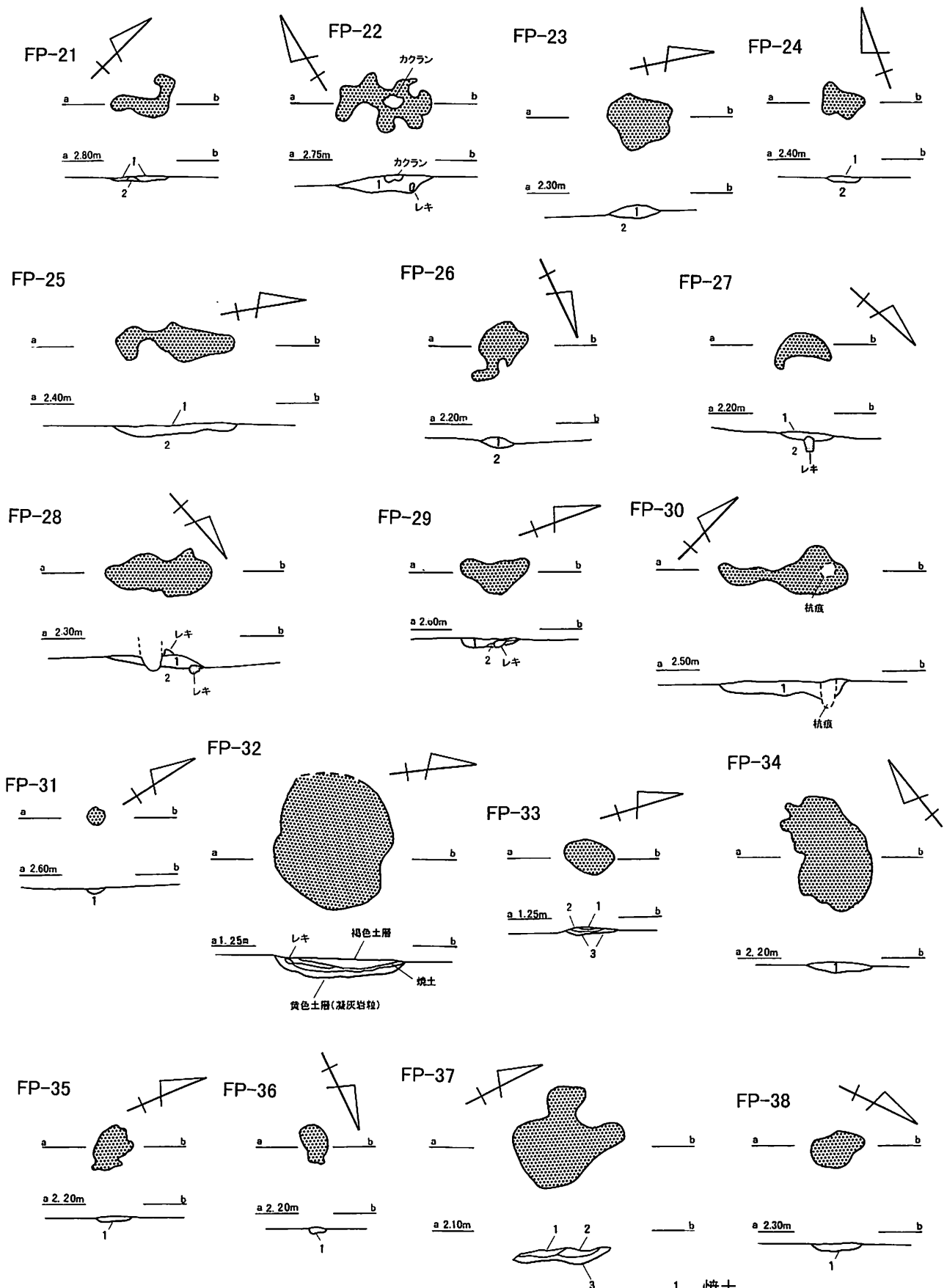
第18図 貝塚 (SM-5) 出土の遺物



第19図 貝塚 (SM-5) 出土の遺物

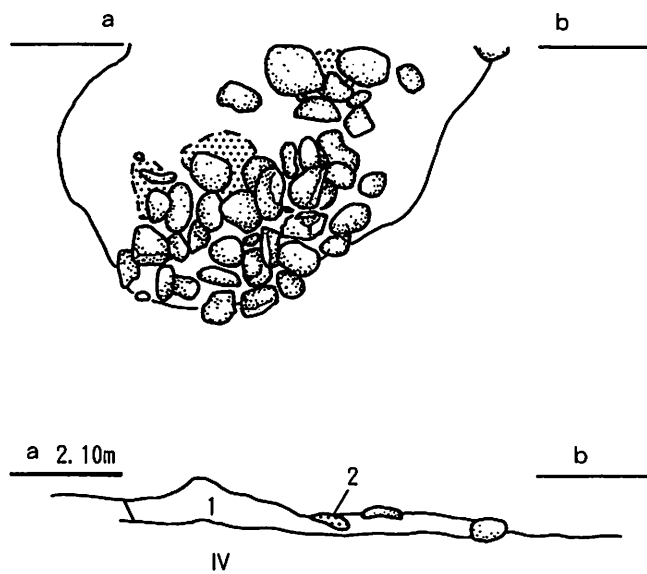
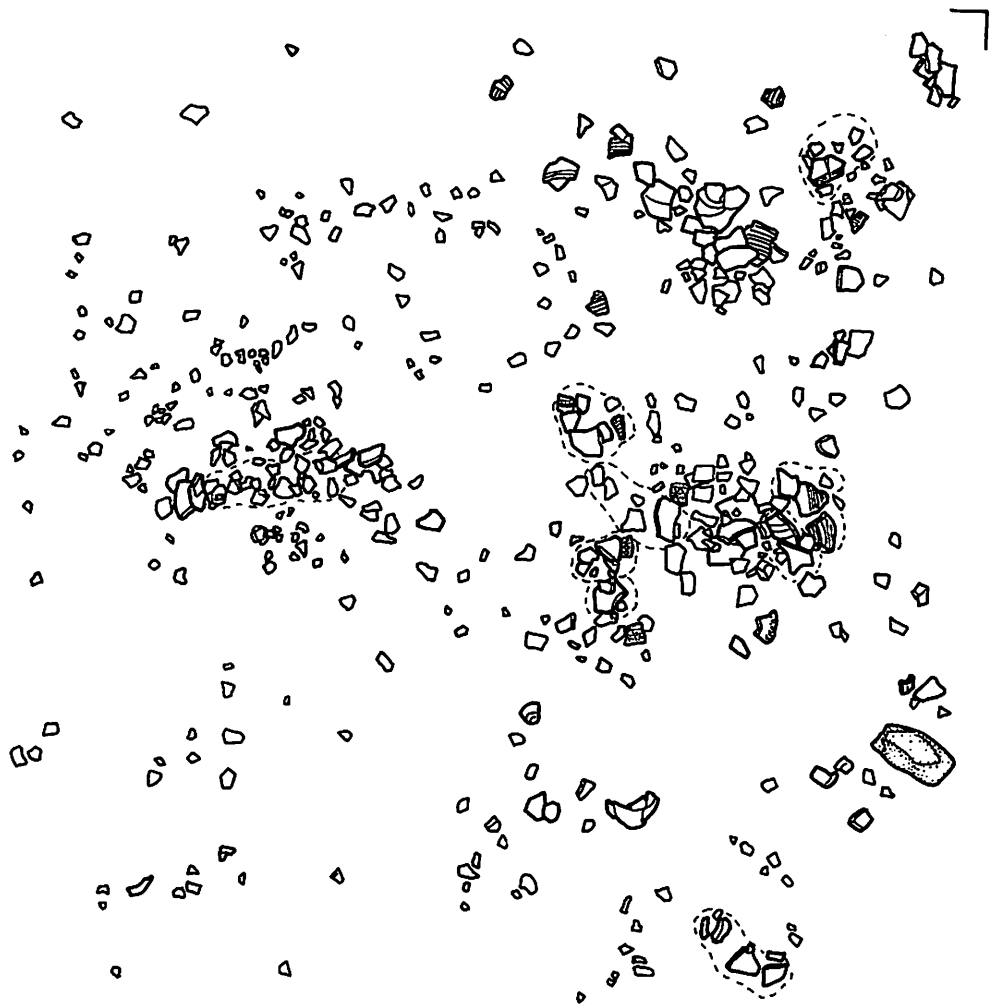


第20図 遺構平面および断面図 (FP-1~20)



- 1. 焼土
- 2. 赤褐色土 (木炭を微妙に含む)
- 3. 暗褐色土 (木炭を含む)

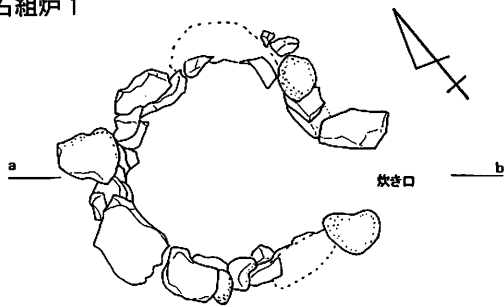
第21図 遺構平面および断面図 (FP-21~38)



1. 黒灰色土（炭化物粒混る、Ⅲ'層）
2. ベンガラ

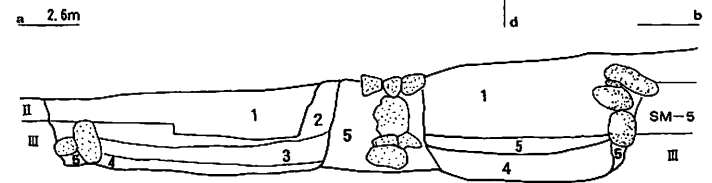
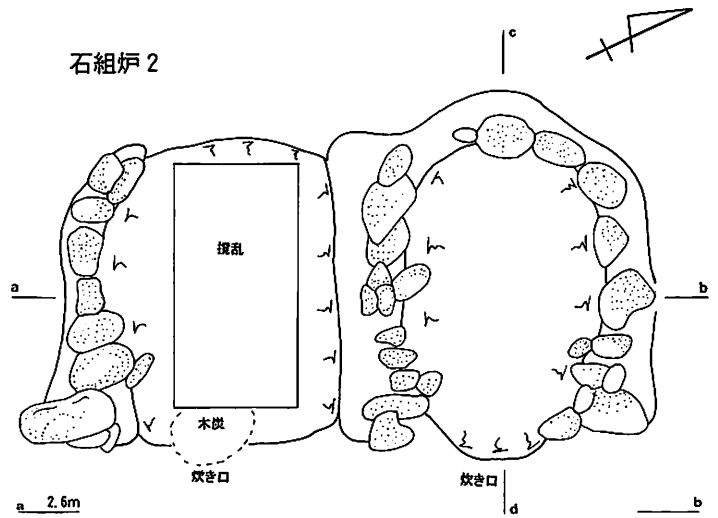
第22図 遺物の出土状況（4Fグリット・捺文土器群）と集石

石組炉 1



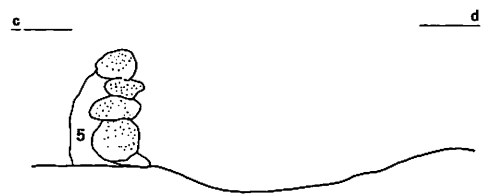
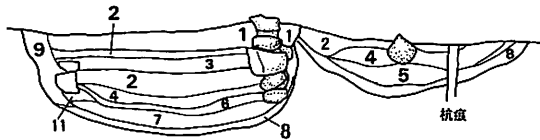
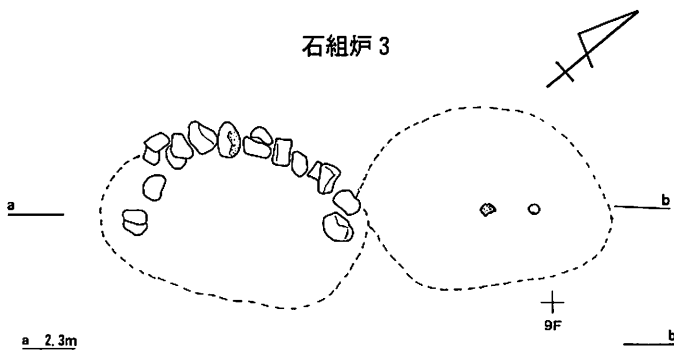
- 1 黒色土
- 2 黄色土 (粘土)
- 3 褐色砂

石組炉 2



- 1 黄色土 (埋立土)
- 2 灰色土 (粘性)
- 3 木炭層
- 4 灰層
- 5 黄色土 (粘土)

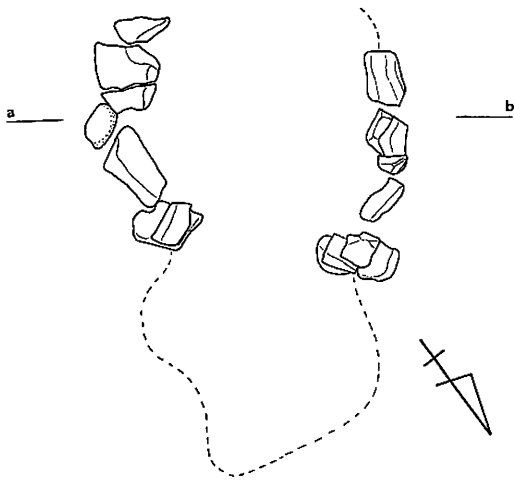
石組炉 3



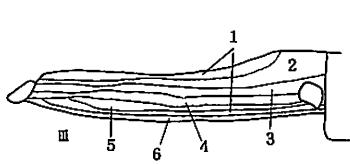
- 1 黒色土
- 2 黄褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 赤褐色土 (焼土)
- 5 灰色砂
- 6 炭層
- 7 黄白色砂
- 8 黒灰色土
- 9 黒灰色土
- 10 黄色粘土
- 11 褐色土

第23図 石組炉 (1・2・3) の平面および断面図

石組炉 4

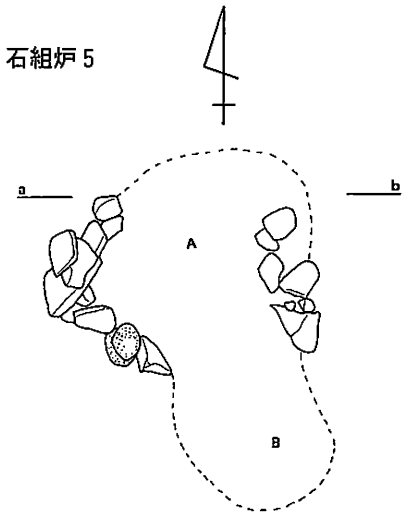


a 1.7m

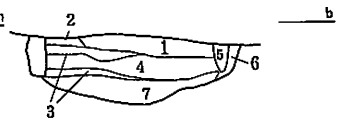


- 1. 焼土
- 2. 黄褐色土
- 3. 炭層
- 4. 黒褐色土
- 5. 青白色土
- 6. 黒色土

石組炉 5

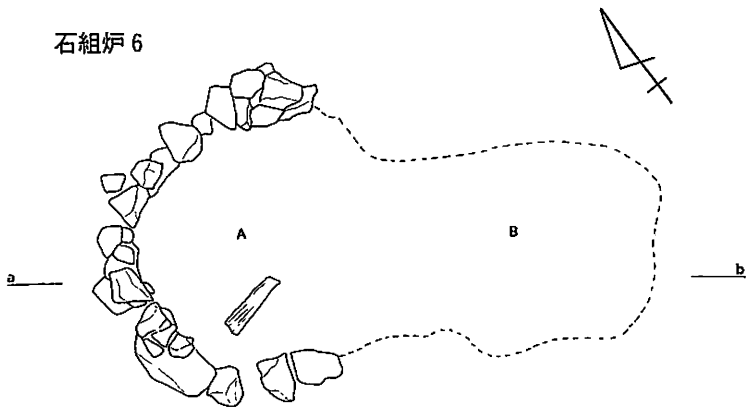


a 2.1m

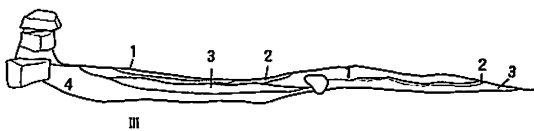


- 1. 焼土
- 2. 黄白色土
- 3. 褐色土
- 4. 黄褐色土
- 5. 木痕
- 6. 黄色粘土
- 7. 炭層

石組炉 6



a 1.1m



- 1. 黄褐色土
- 2. 炭層
- 3. 黄白色土
- 4. 褐色土

第24図 石組炉 (4・5・6) の平面および断面図

第三章 包含層出土の遺物

1998～1999年度の2年間に遺跡から出土した遺物は調査で246,737点となり、続縄文・擦文時代の遺物が大半を占めている。

(1) 遺物出土点数

平成10・11年度の総合計 246,737点

遺物名	平成10年度	平成11年度	合計
土器	177,086	8,160	185,246
石器	3,575	280	3,855
剥片・礫	34,400	3,114	37,514
陶磁器	12,575	5,180	17,755
金属器	1,552	71	1,623
骨角器	26	2	28
硬貨	77	19	96
装飾具	184	16	200
木製品	36	63	99
その他	245	76	321
計	229,756	16,981	246,737

出土遺物の状況としてI層からは陶磁器類、硬貨が出土、II・III層からは土器・石器が出土、泥炭層からは三平皿、焼酎徳利を中心として木製品（桶、蓋、紐、角胴、下駄、串）などが出土、埋立て土からは陶磁器類、硬貨、その他（おはじきなどのガラス製品）などが出土している。

泥炭層では川の高低にかかわらず常に木製品がよい条件で保存されており、多量の木製品や材が見られることからかつての舟着場と作業場が考えられる。

北海道においては考古学資料としての範囲として開拓使以前としているがこの地は近世から昭和時代戦前まではニシン漁が盛んであり、独自の日本海文化を形成しており、文献や博物館資料とともに具体的作業場と生活を知る上で重要と考えられるため、若干の近代資料も対象として調査をした。

攪乱層及び包含層出土の遺物についての個々の観察は別表とし、概要について説明を加えることとする。

(1) 土 器 (第25～36図・写真図版7～9)

縄文時代の土器から近世・近代の陶磁器類まで出土しており、次により分類する。

- 第Ⅰ群土器** 縄文時代中期後半の土器群
- A 円筒上層式に属すると思われるもの (No25～28)
Ⅲ層の下部からのもので町内ではあまり出土例がない土器である。
 - B 北筒式土器に属すると思われるもの (No29～46・48～51)
Ⅲ層の下部からのもので、黒川砂丘では登川右岸遺跡でこの時期の単純遺跡が調査されている。
- 第Ⅱ群土器** 縄文時代後期前半の土器群
- A 余市式に属すると思われるもの (No47・55～57・59)
町内では標準遺跡の大谷地貝塚があり、作りが粗雑で口縁部に粘土紐の張付けをもつ筒形に特徴がある。
 - B ニセコ式、手稲砂山式に属すると思われるもの (No52～54)
余市式土器に後続するもので、ややくびれをもつ深鉢土器で粘土紐の張付と太い沈線が施されている。
- 第Ⅲ群土器** 縄文時代晩期後半の土器
- 対岸の大川遺跡ではこの時期の土器が多量に出土しているがこの地では非常に少ない。
- A 亀ヶ岡式土器の影響を受けていると思われるもの (No60)
 - B タンネットウL、ヌサマイ式に属すると思われるもの (No61)
- 第Ⅳ群土器** 続縄文時代の土器群
- A 突瘤文と縄線文を有するもの (No58)
 - B 恵山式 (乾編年Ⅱ～Ⅳ式) に属すると思われるもの
発掘区 (E-5～2グリット) において多量に出土しており、貝塚、住居跡が発見されている。(No1～9・No62～91)
 - C 後北式 (A～D式) に属すると思われるもの (No92～135)
 - D 弥生系土器に属すると思われるもの (No136～138)
 - E 北大式に属すると思われるもの (No10・139～157)
- 第Ⅴ群土器** 擦文時代の土器群
- A 擦文式 (石附編年Ⅰ～Ⅴ式) に属すると思われるもの
発掘区において多量に出土しており、住居跡の周辺 (F4グリット・第22図) にまとまって出土しており、初期の擦文土器が主体となっている。(No11～24・158～168・183)
 - B 土師器の坏 (No169～182・184・185)
 - C 須恵器 (No186～192)
大形甕の破片と思われる。No191, 192は壺で外面は灰色であるが胎土が赤色である。このような特色は青森県の五所川原産と類似するように思える。

第Ⅵ群土器 近世の陶磁器（第46・47図 No1～9）

18世紀後半から19世紀にかけての酒徳利、皿、碗などの染付で胎土は薄い灰色を呈している。伊万里焼と思われる。

川岸にこの時期の貝塚が発見されており、幕末に海外輸出向けの酒や醤油を入れた容器であるコンプラ瓶なども出土している。

第Ⅶ群土器 近代の陶磁器（第45・48・49図 No10～22）

多量の出土をしているが、特徴をしめすもののみとどめた。

19世紀後半以降のもので焼酎徳利、三平皿、東北諸窯の焼き物（相馬焼No13）などの陶磁器類を一括して取り扱った。

発色の良いコバルトによる染付が多く、印判手による小皿もわずかにみられる。

貝塚からは焼酎徳利が多く出土しており、大量に消費されていたことがわかる。

埋め立て土からは白磁のまま福原衛生歯石鹼と印刷した蓋がある。この容器は化粧品メーカーの資生堂が明治21年に練り歯磨きとして売出したヒット商品であり、北海道も例外ではなかったと言える（第45図 No111）。

（2）石 器（第38～45図）

発掘区においては石器ともに剥片の集中が多くみられることから、この地において石器の製作をしていた可能性がある。

石器の場合特徴のある形態以外の時代の判別は難しいが土器の編年との対応からは続縄文時代に属するものが大半ではないかと思われる。

・石 鏃（No1～41）

5 cm未満のもので両面加工である。石材は黒曜石、頁岩である。

有茎石鏃、無茎石鏃（基部のややえぐりのあるもの）、柳葉形などがある。

鋭角な二等辺三角形の有茎石鏃は（No22・26）などは恵山式土器に伴うものと思われる。

・石 槍（No42～45）

5 cm以上のもので両面加工である。石材は黒曜石、頁岩である。

・スクレイパー（No46～71・76～80）

両面加工、片面加工のものがあり、石材は黒曜石、頁岩である。

つまみ付きのものは縄文時代のⅠ群土器に伴う可能性がある。

ナイフ形を呈するものは（No47. 48. 54. 56. 65）続縄文時代にみられるものである。

また黒曜石の自然面を残す円形のもの（ラウンドスクレイパー・No77～79）は第Ⅳ群の北大式に伴うものと考えられる。

・石 錐（No72～75）

細身のもので厚みがあり、先端がとがっているものである。小形のため柄をつけて

使用していたことも考えられる。

・石 斧 (No81～91)

打製、磨製のものがあるが、刃部は研ぎ出している。製作は手頃な石材の周縁を打ち欠いたあとに研磨されている。

・魚形石器 (No92～95)

棒状で端を斜めに加工し頭部と尾部に沈線を巡らしている。Ⅲ層の貝塚 (SM-1) から出土しているおり、第Ⅳ群Bの恵山式に伴うものである。この石器の用途については漁具と考えられている。

・環状石斧 (No109)

円形を呈し、周縁はにぶい刃部を作り出している。

・たたき石・凹石 (No98～102)

くぼみをもちたたき石として両面を使用している。石質は砂岩である。

・すり石 (No96・97・101)

ゆるやかにくぼみをもつもので多面的に擦り面をもっているものもある。石質はきめの細かい砂岩である。

・茶 臼 (No103)

Ⅱ層から出土したもので、下台の一部が残っている。茶臼であるが穀物の製粉にも使用しているかもしれない。

・玉・環 (No104～108)

垂飾と思われ、自然石に小さい穿孔をするもの (No104.105) と、環となっているものがある。

(3) 土製品 (No110)

擦文時代に伴う紡錘車 (No110) である。

(4) 木製品 (第50～54図)

泥炭層から出土したもので大形の樽、桶などは写真記録とし、小形のもののみを遺物として取り上げた。

・浮子、アバ (No 1～5)

主にたて網に使用したと思われるもので、所有をしめすための墨書や焼印による屋号が見られる。

・蓋、栓 (No 6～11)

樽、桶の蓋と栓である。焼印がおされているが判読が難しい。酒、水、魚などをいれていたものであろう。

・ヘラ (No12～18)

煮物をかき混ぜるためのものと、鉄鍋などについた焦げなどをおとすために使用されたものなどがある。

・木 串 (No16)

先を細くしたものである。

・下 駄 (No19～24)

鼻緒の穿孔は焼かれており、足のつくりは一本木のもの、差し替えの物がある。足のつくりだしは鑿で行っており、先の丸みを呈しているものは女性のもと思われる（No20～22）。なお、No23・24は一对ものである。

・角 胴（写真図版15 写真6・7）

12Gグリットの護岸石垣に逆さまに捨てられていたもので、半分のみが残存である。角胴は魚粕をつくるときに使用するものであり、後に鉄製の丸胴に改良されていく。

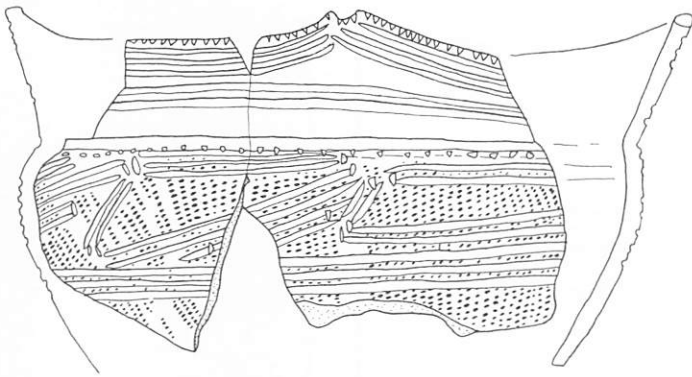
角胴の杵木はほぞを切って組み合わさっており、たての細木は角釘で固定されている。大正時代頃のものであろうか。

・用途不明のもの（No13～15・17）

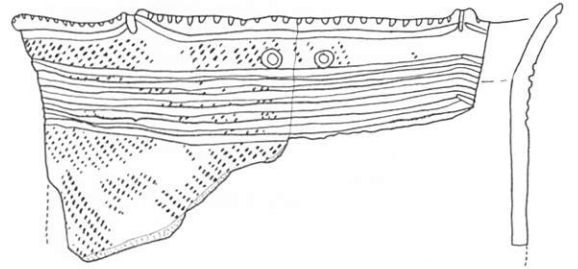
No13は穿孔が4ヶ所みられ中央に屋号が刻み込まれている。

No14・15は薄く先が尖る小形のもので穿孔のあるものとなないものがある。

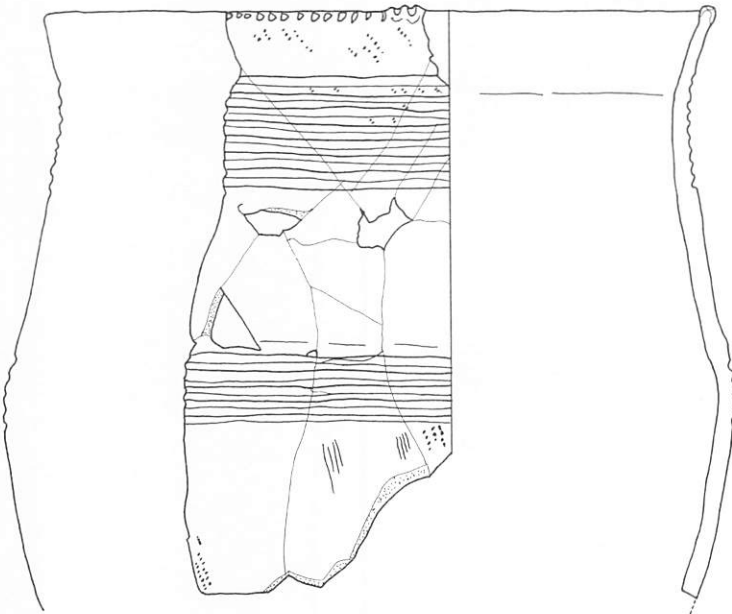
No17は中央が半円状の窪みがあり、両端が直角に切り込まれていることから他の材と組合わされていたものと思われる。



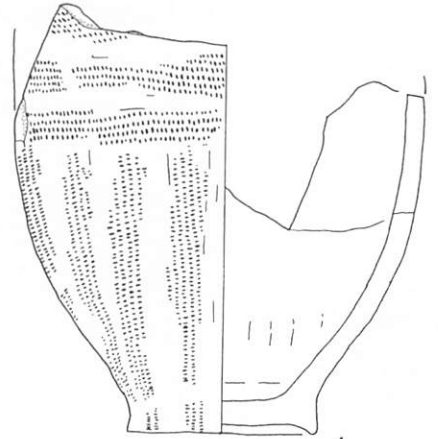
1



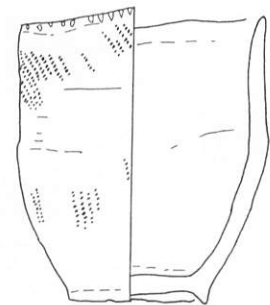
2



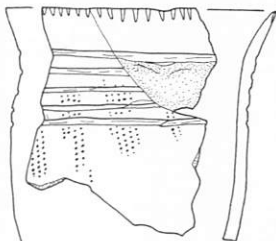
3



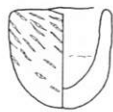
4



5



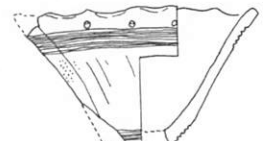
6



7

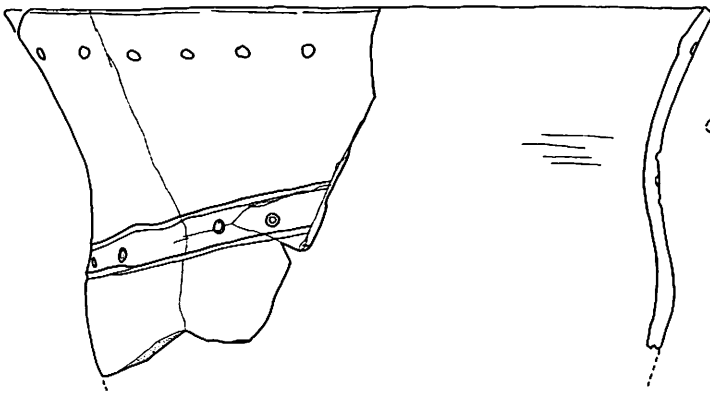


8

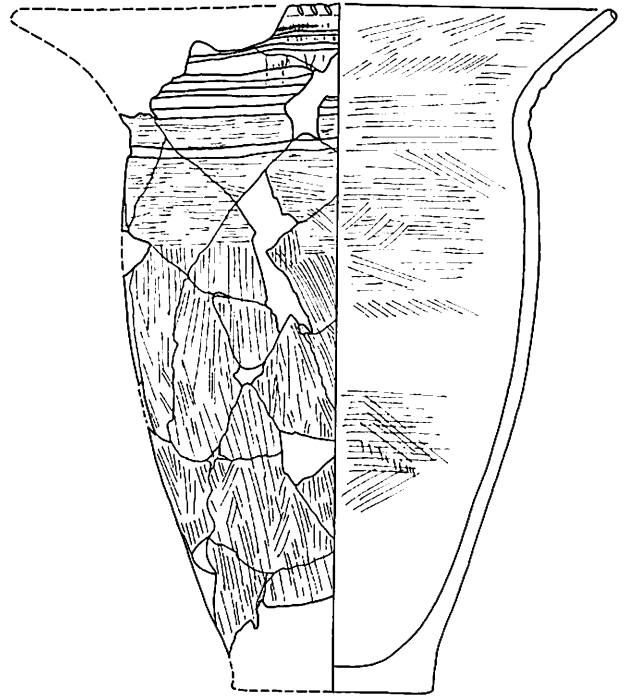


9

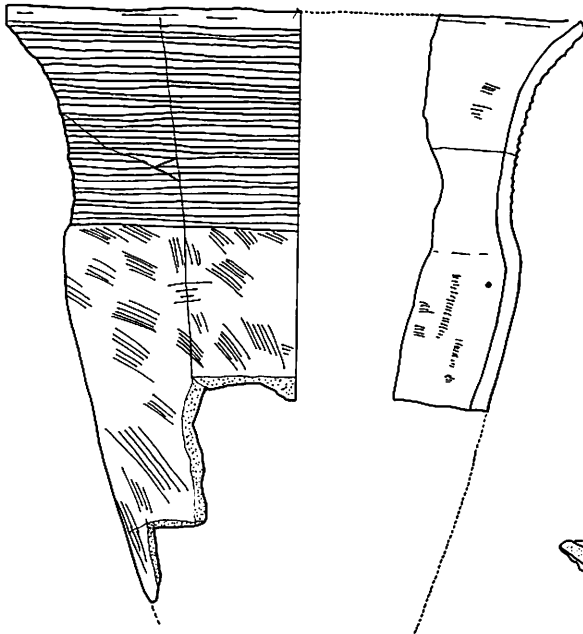
第25図 包含層出土の遺物(1)



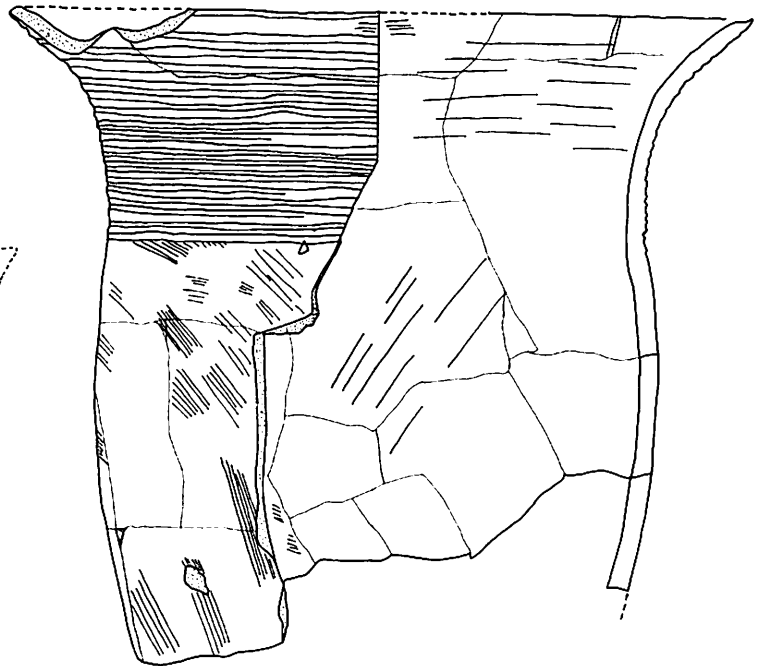
10



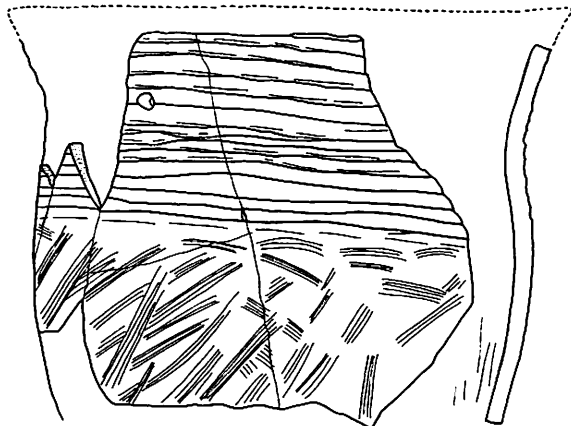
11



12

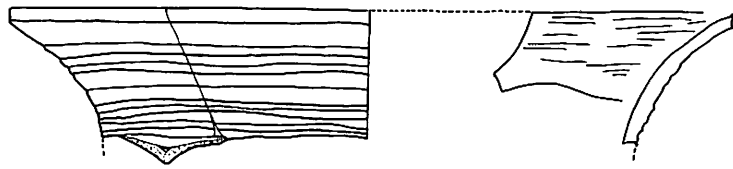


14

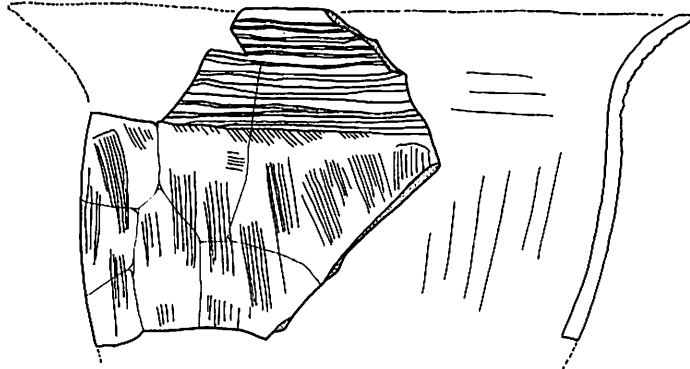


13

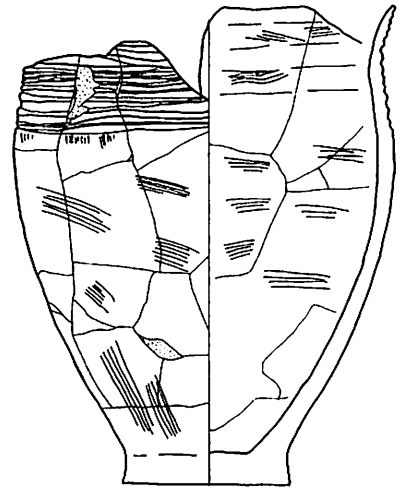
第26図 包含層出土の遺物(2)



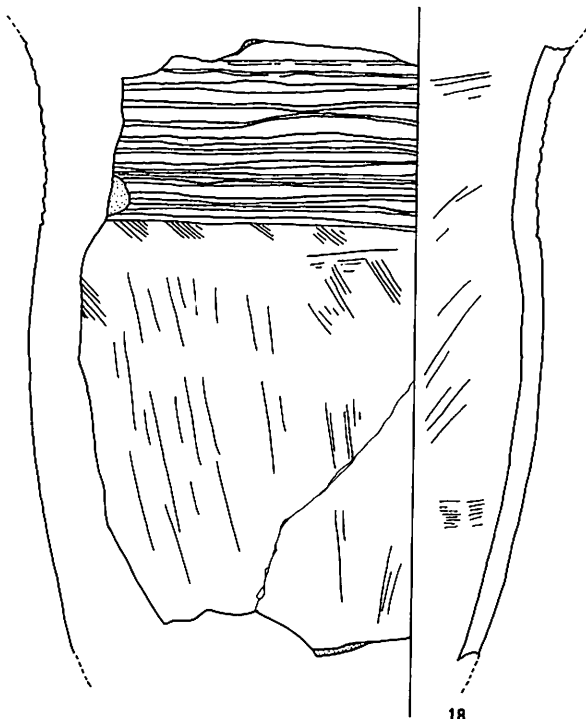
15



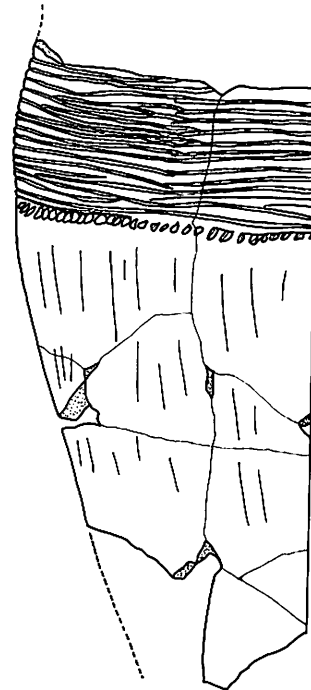
17



16

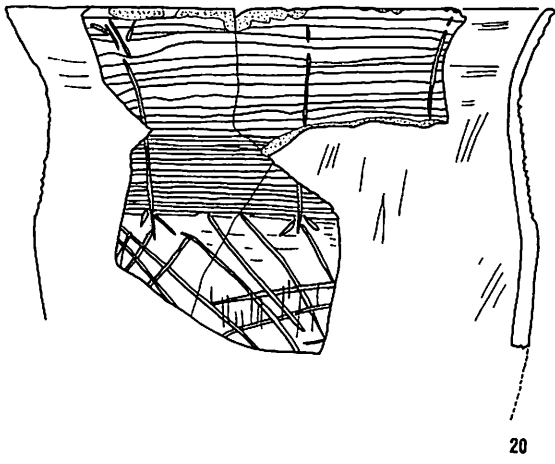


18

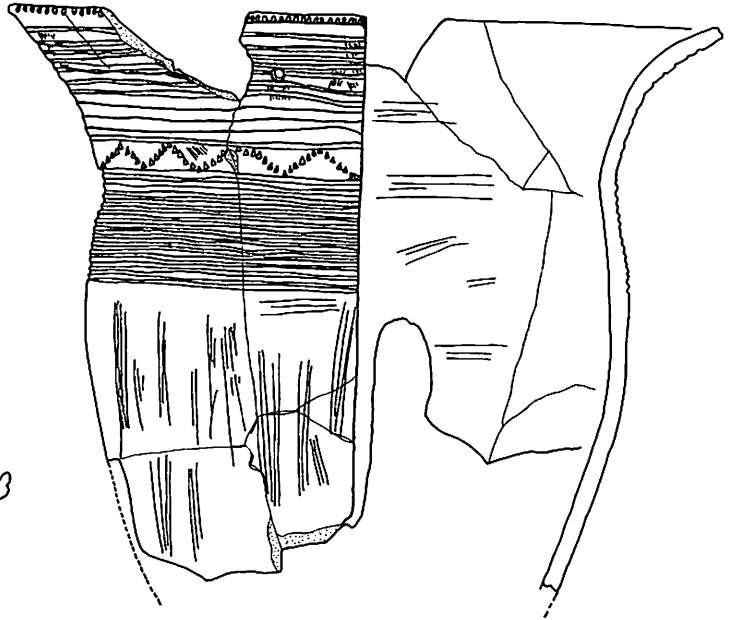


19

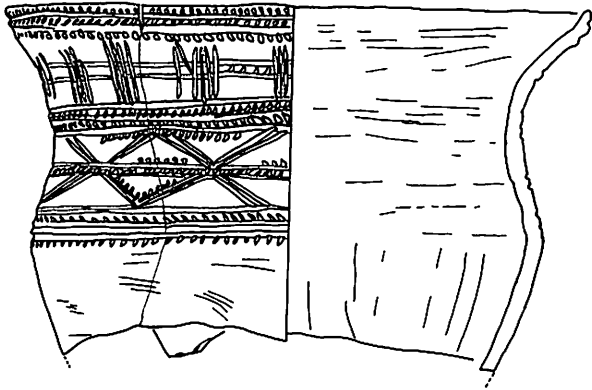
第27図 包含層出土の遺物(3)



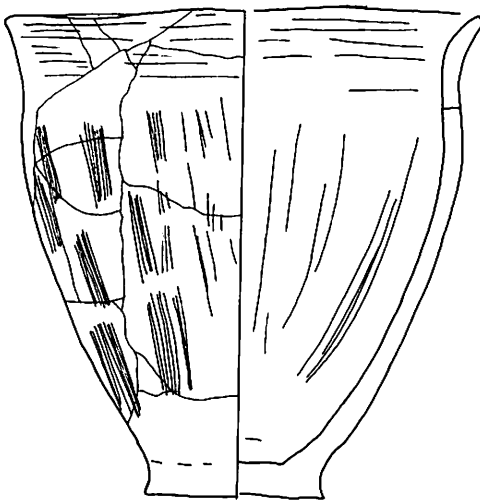
20



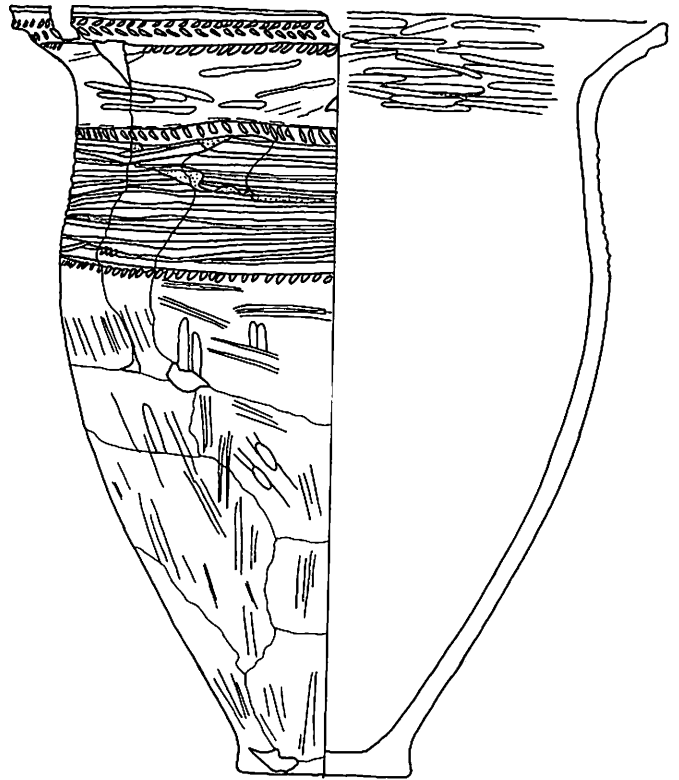
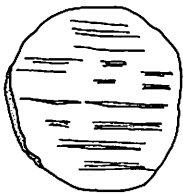
21



22



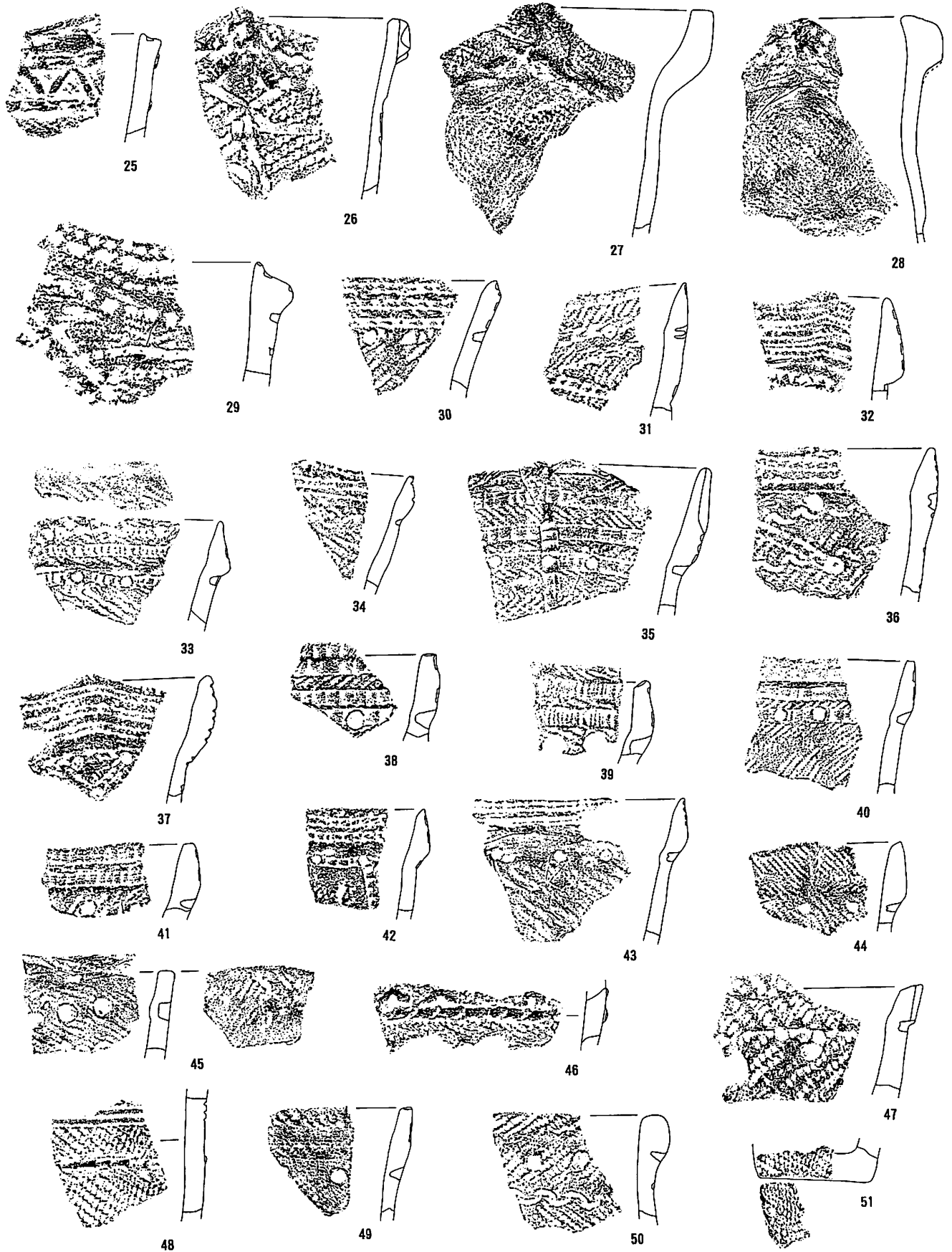
23



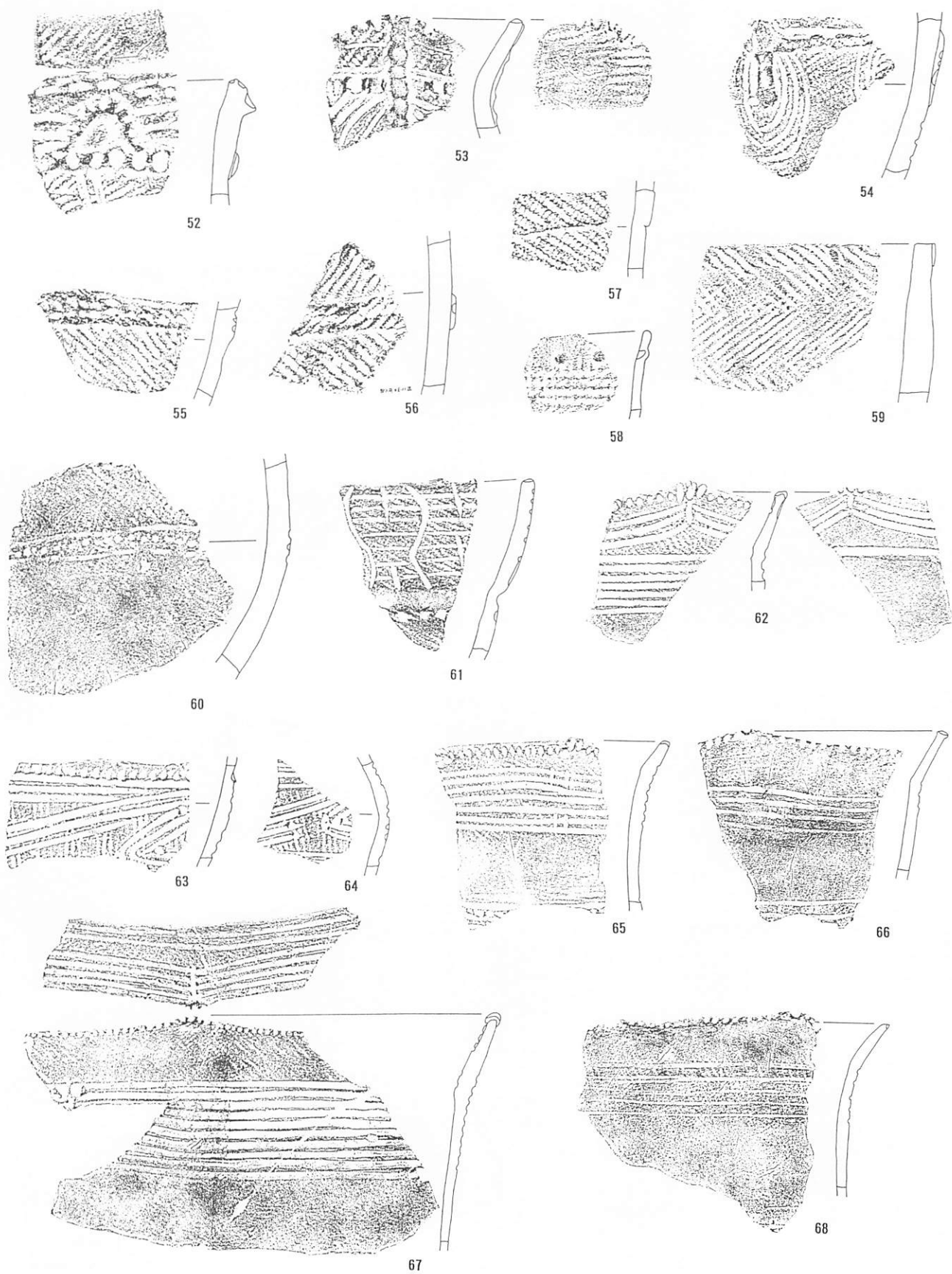
24



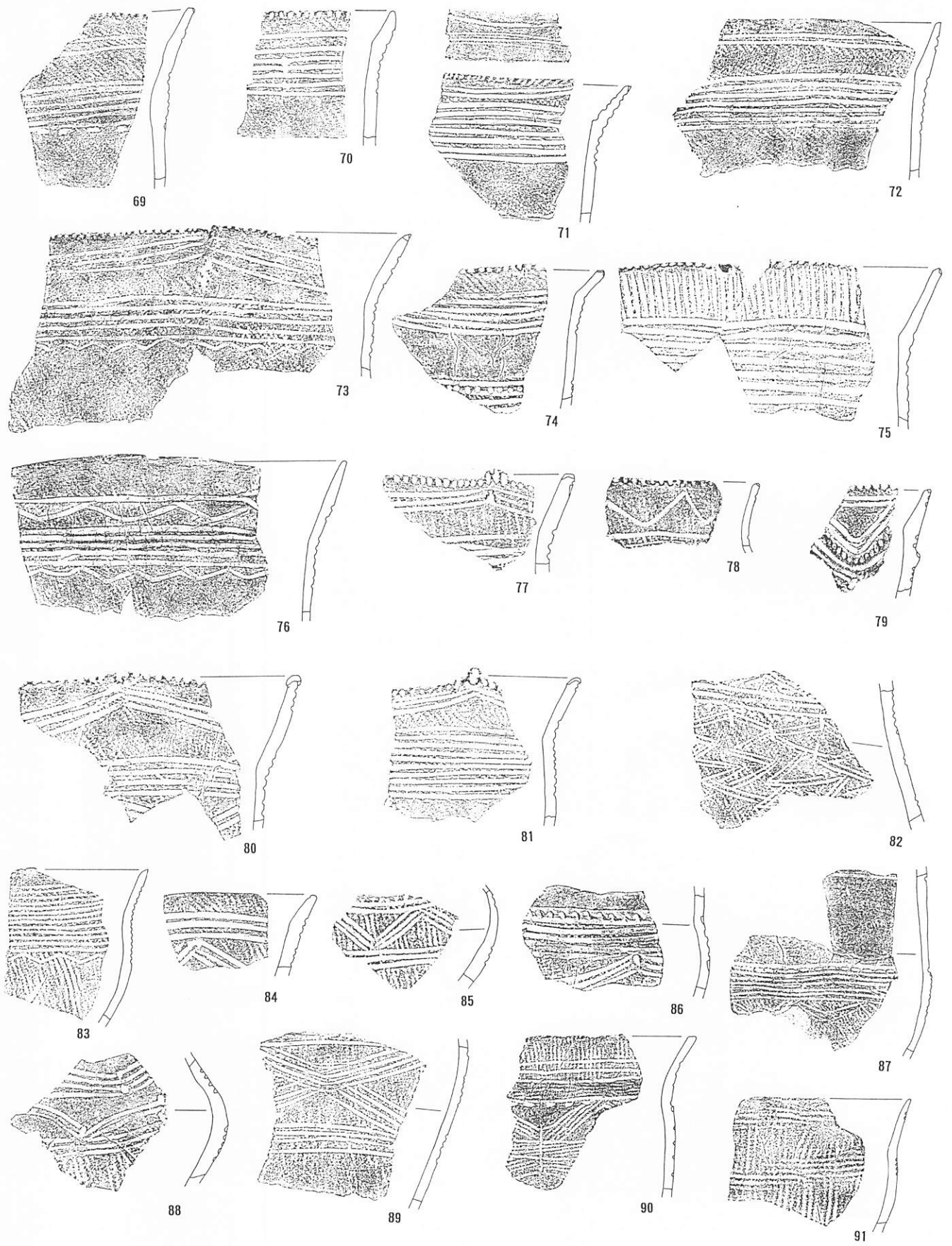
第28図 包含層出土の遺物(4)



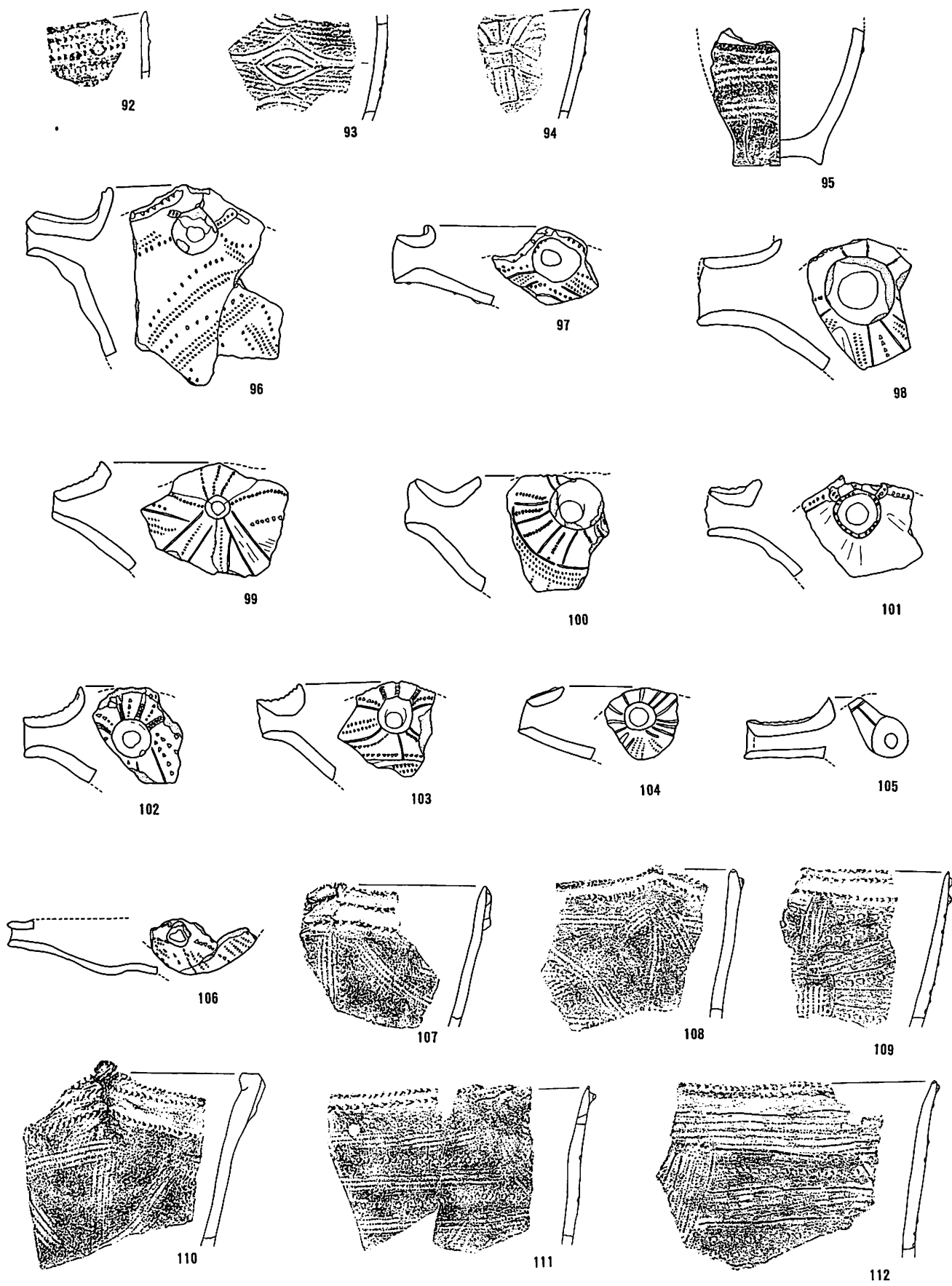
第29図 包含層出土の遺物(5)



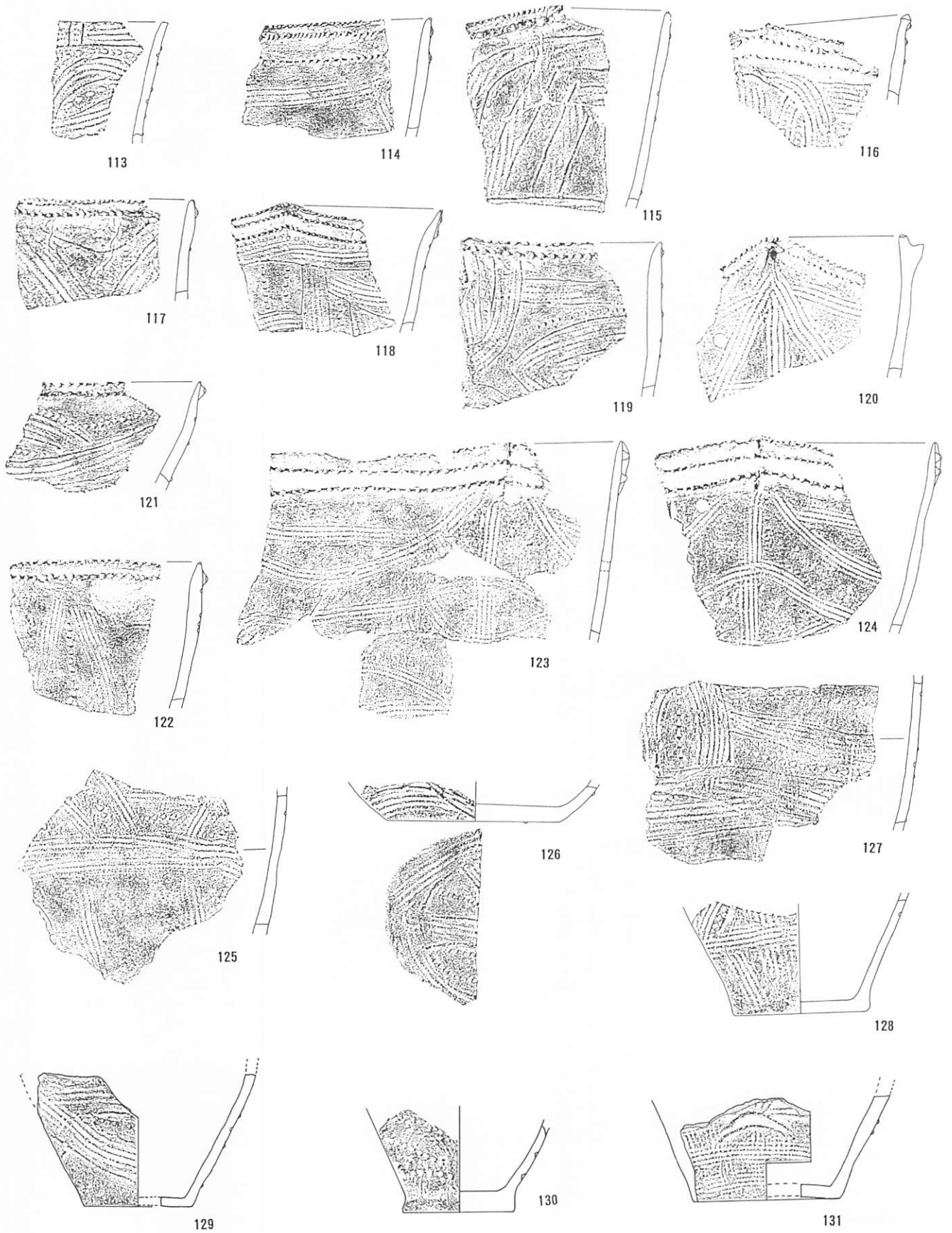
第30図 包含層出土の遺物(6)



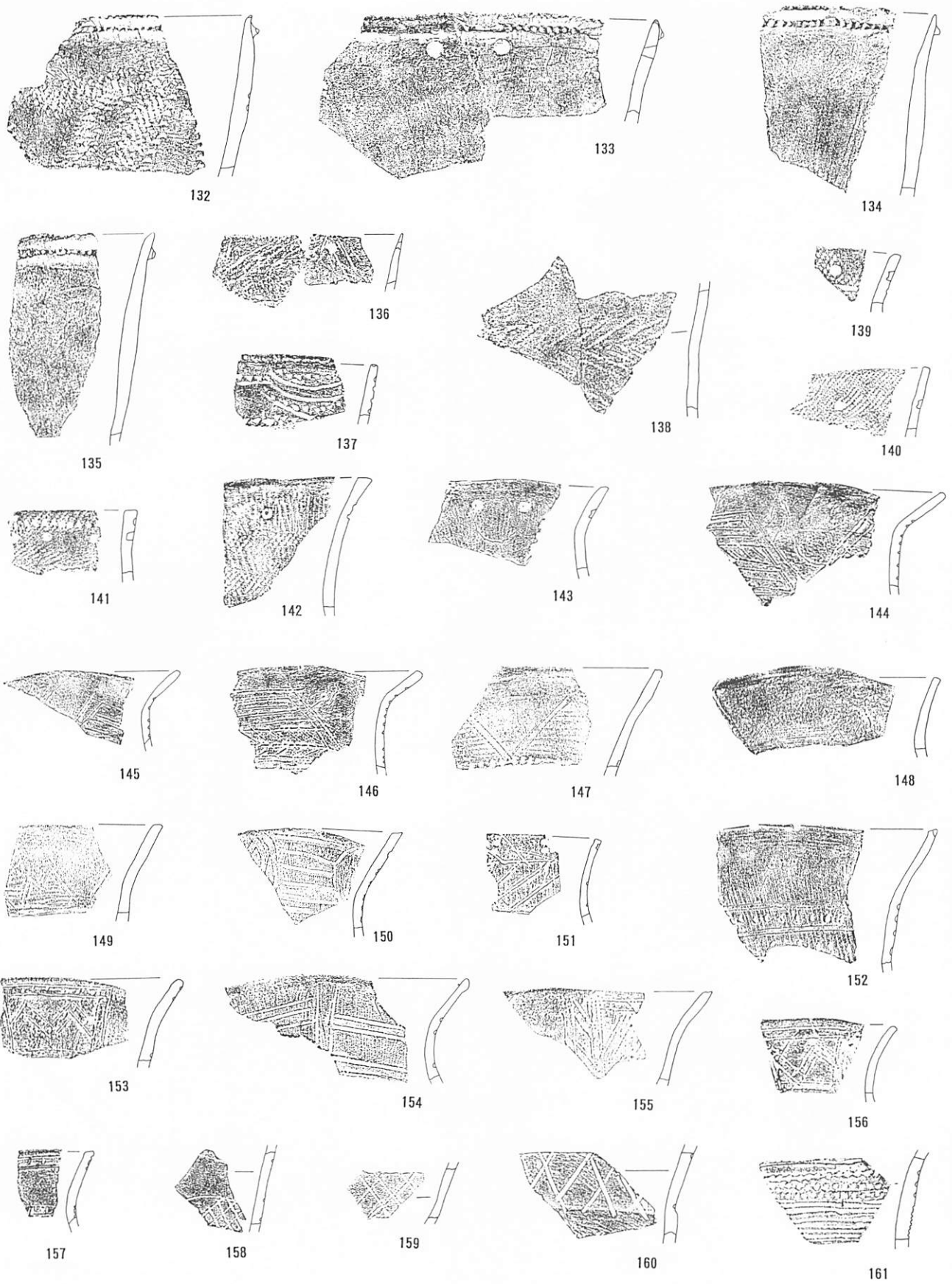
第31図 包含層出土の遺物(7)



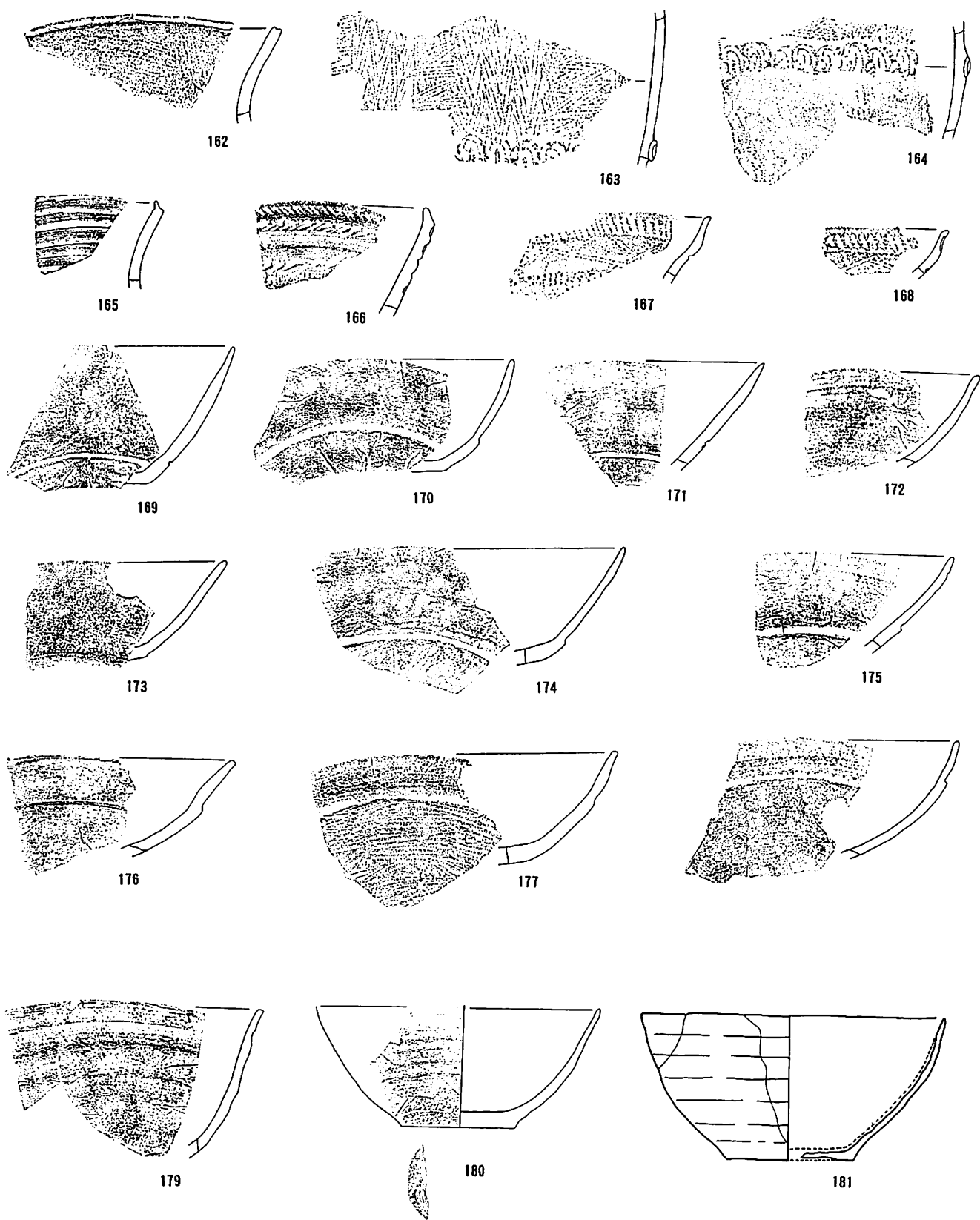
第32図 包含層出土の遺物(8)



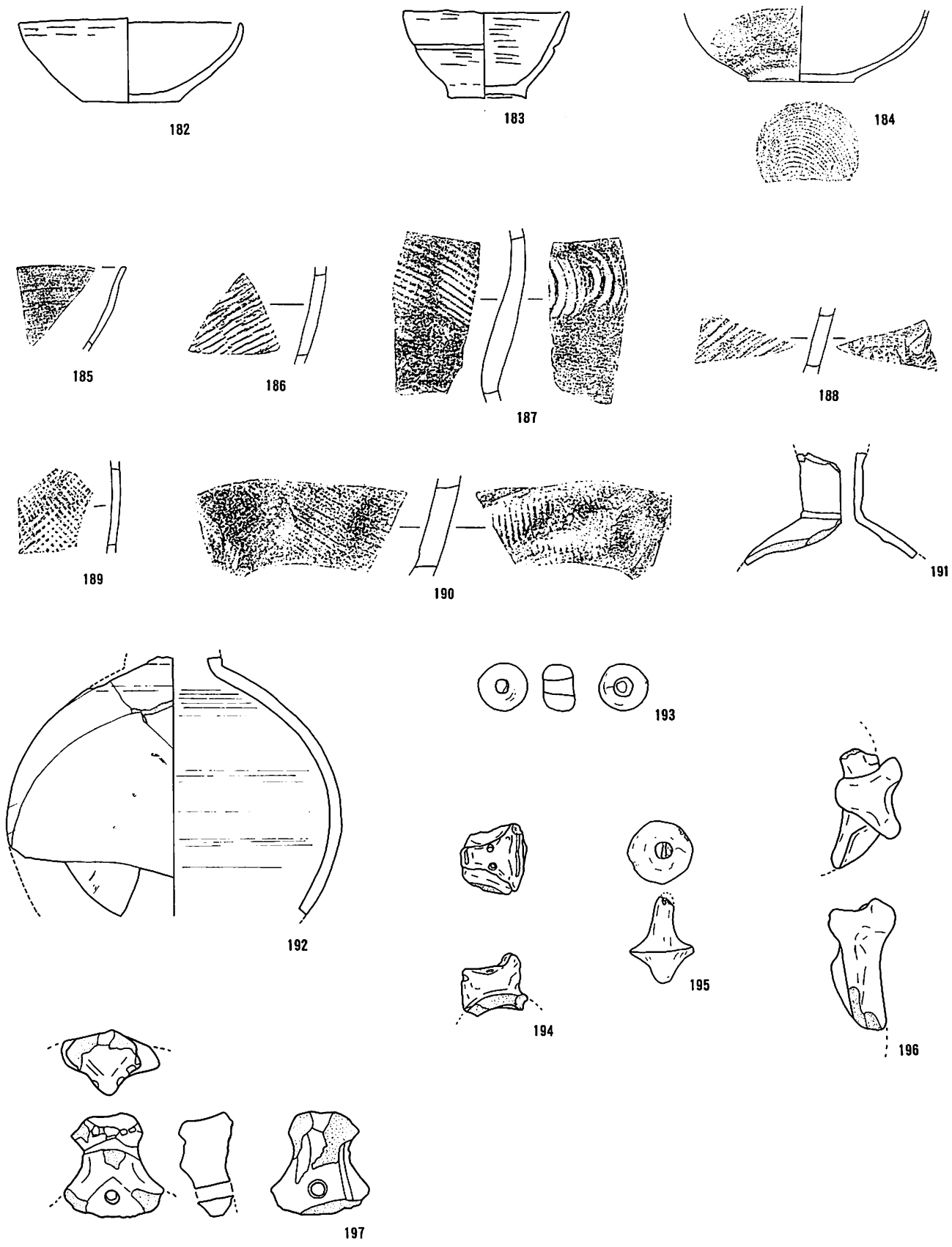
第33図 包含層出土の遺物(9)



第34図 包含層出土の遺物(10)



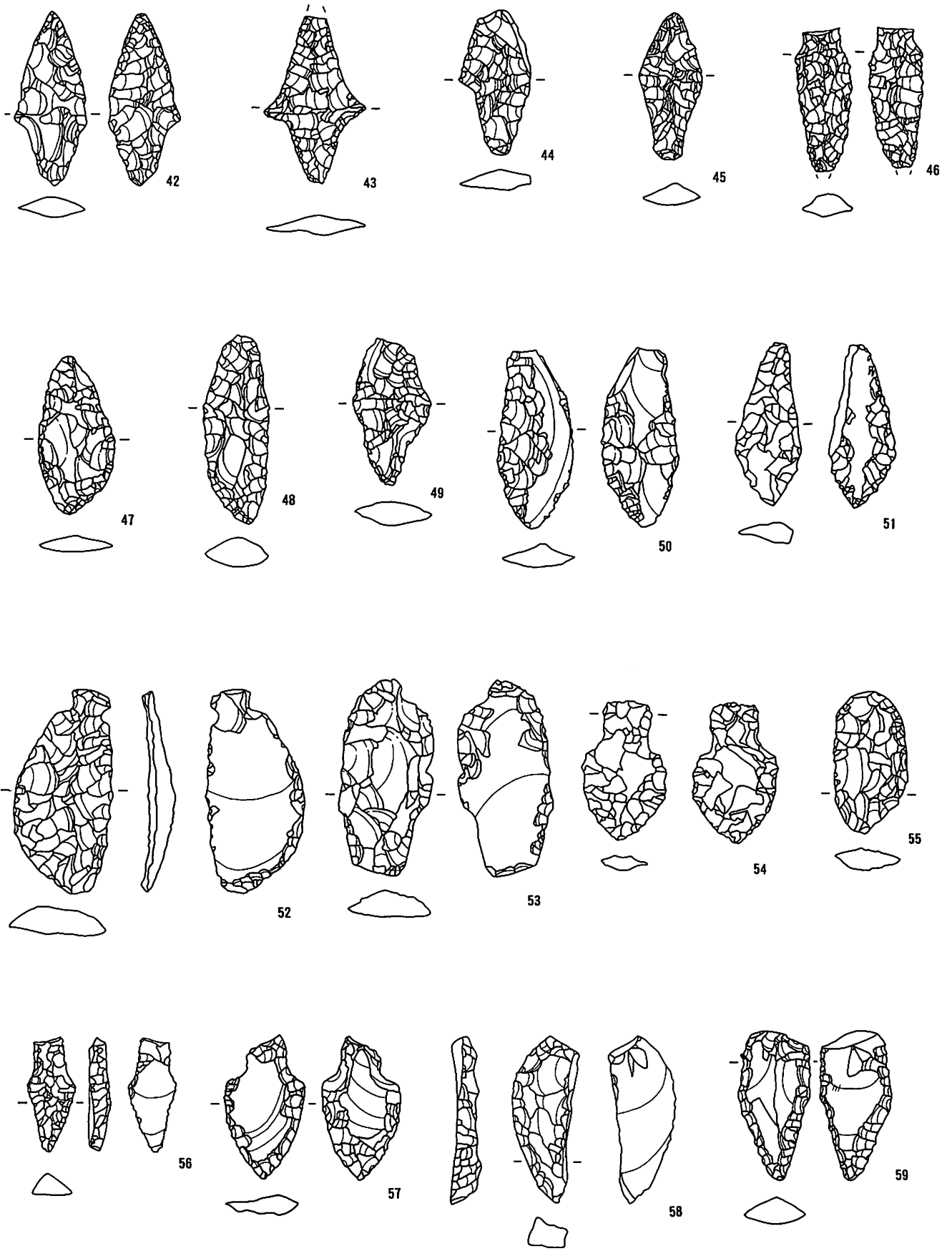
第35図 包含層出土の遺物(II)



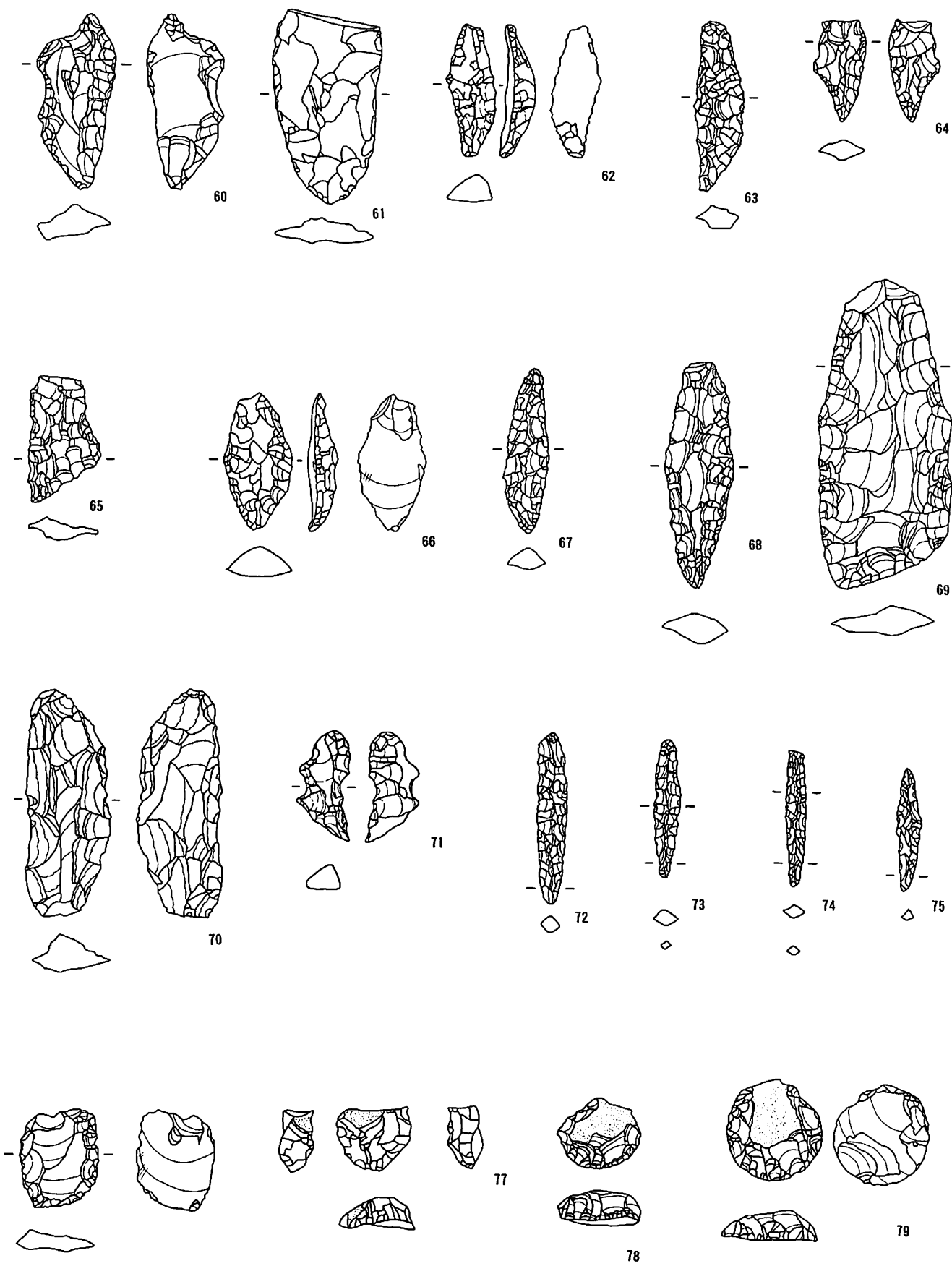
第36図 包含層出土の遺物(12)



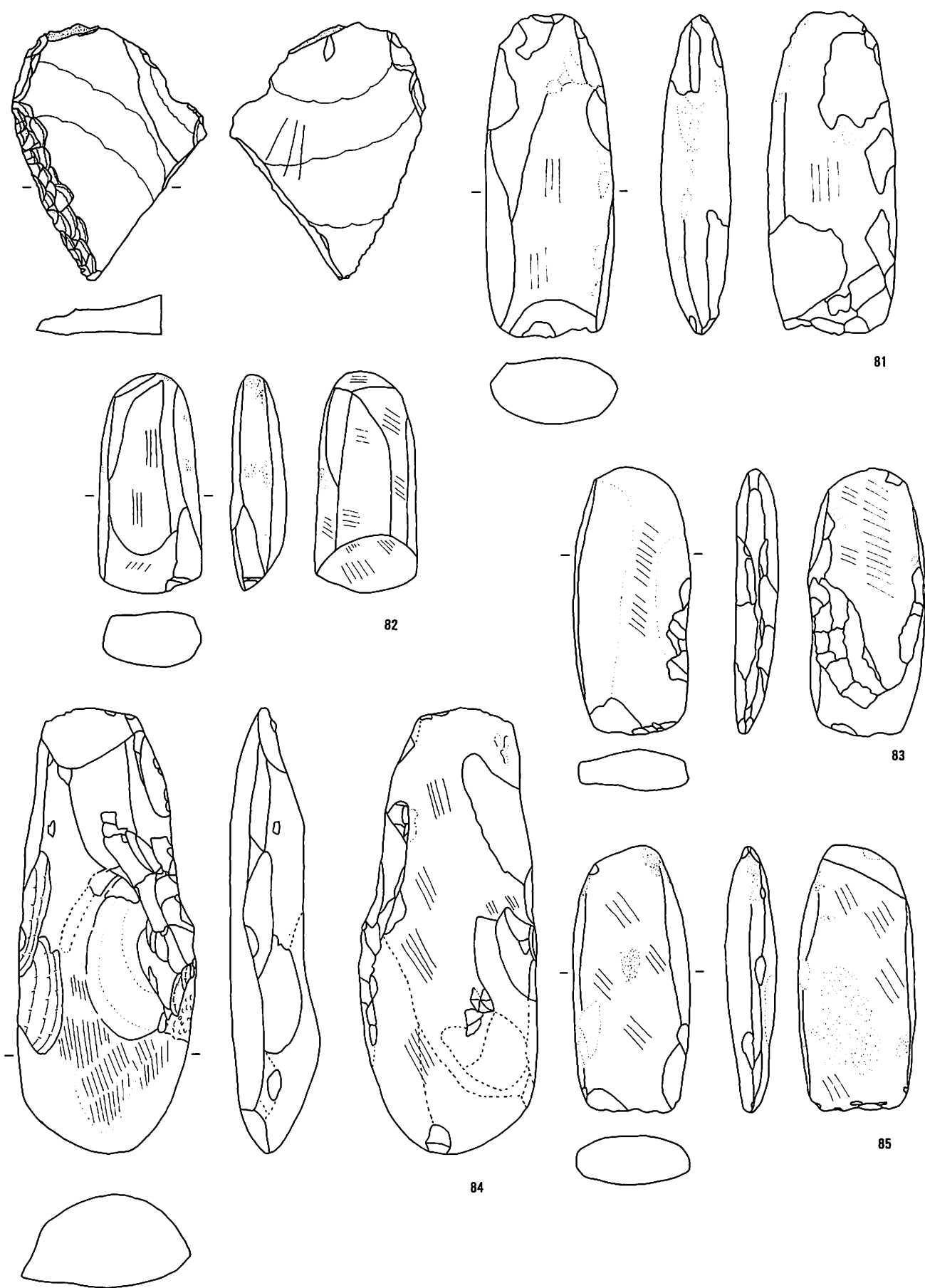
第37図 包含層出土の遺物(13)



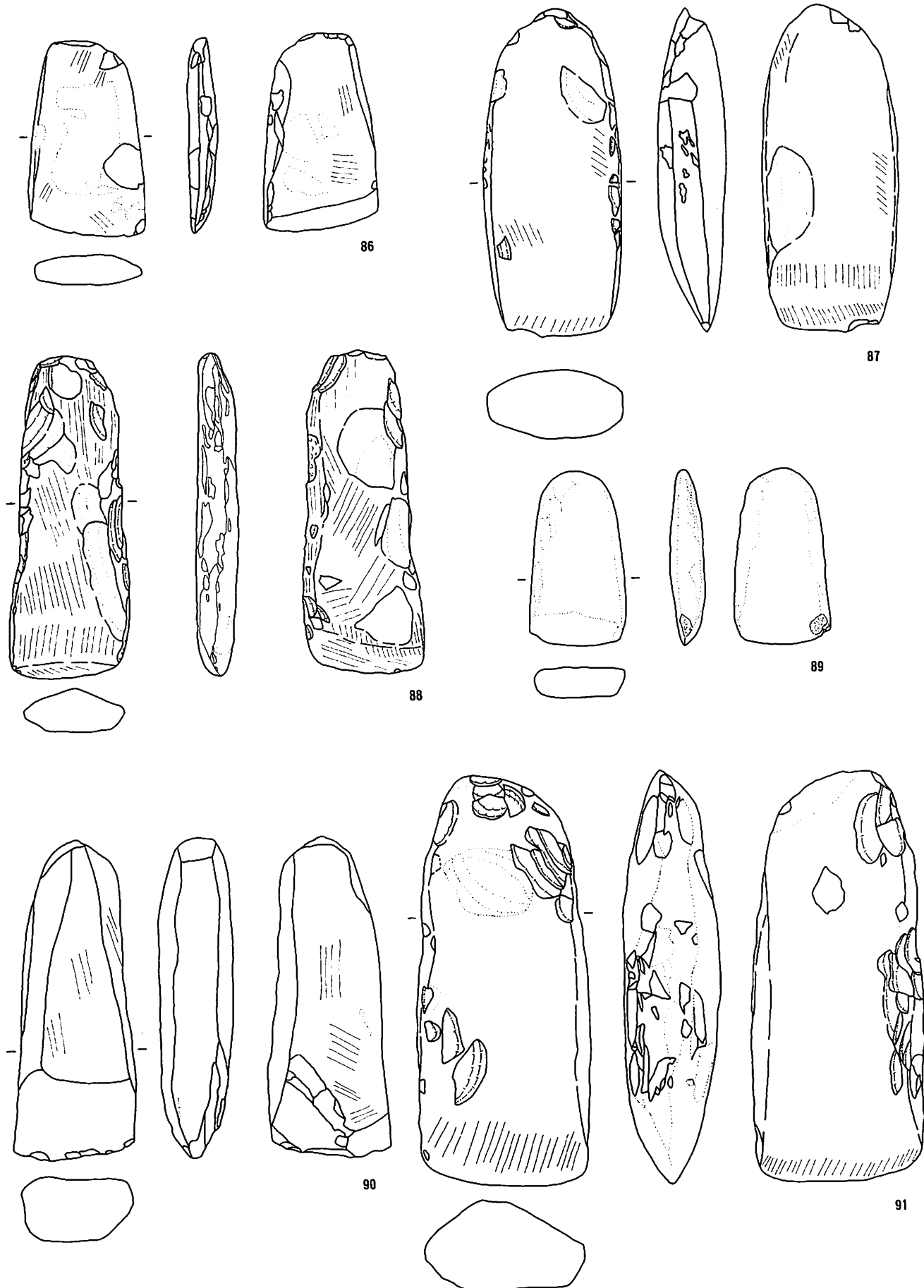
第38図 包含層出土の遺物(14)



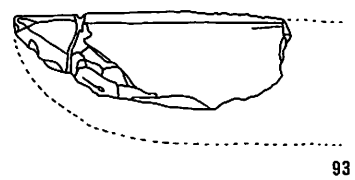
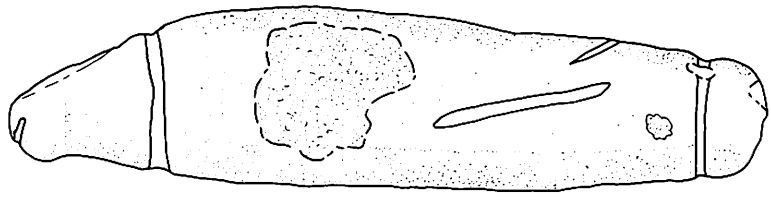
第39図 包含層出土の遺物(15)



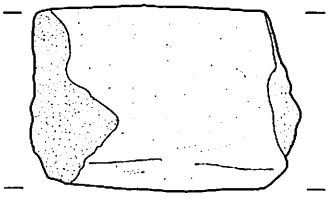
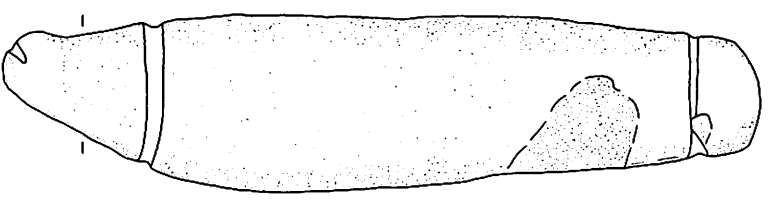
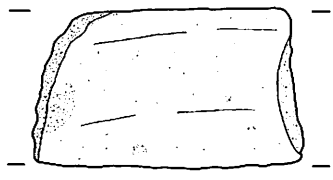
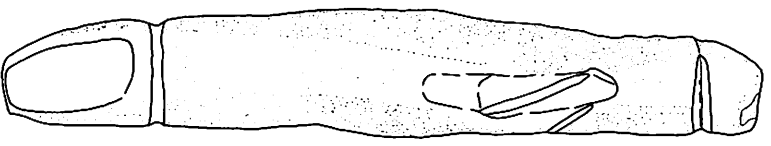
第40図 包含層出土の遺物(16)



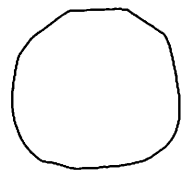
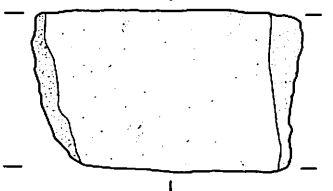
第41図 包含層出土の遺物(7)



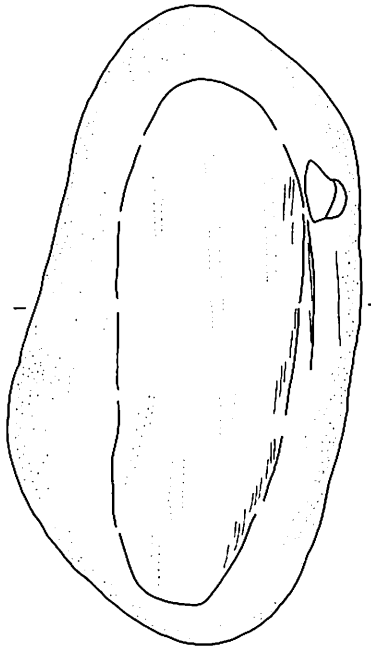
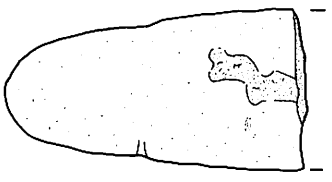
93



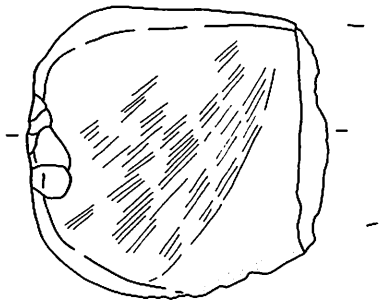
92



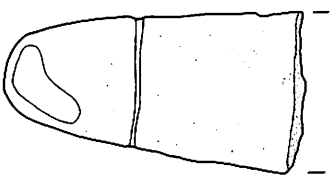
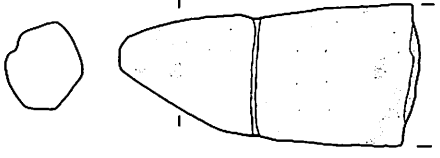
94



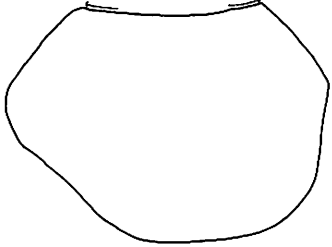
96



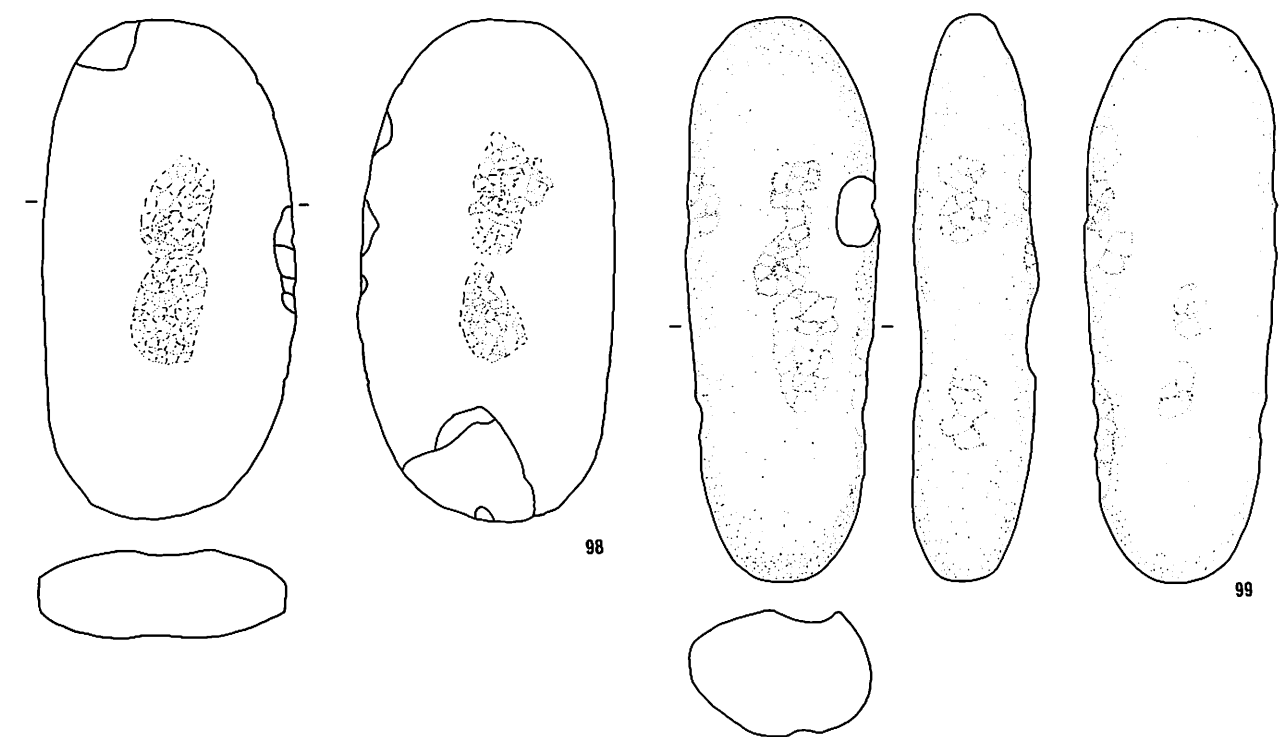
97



95

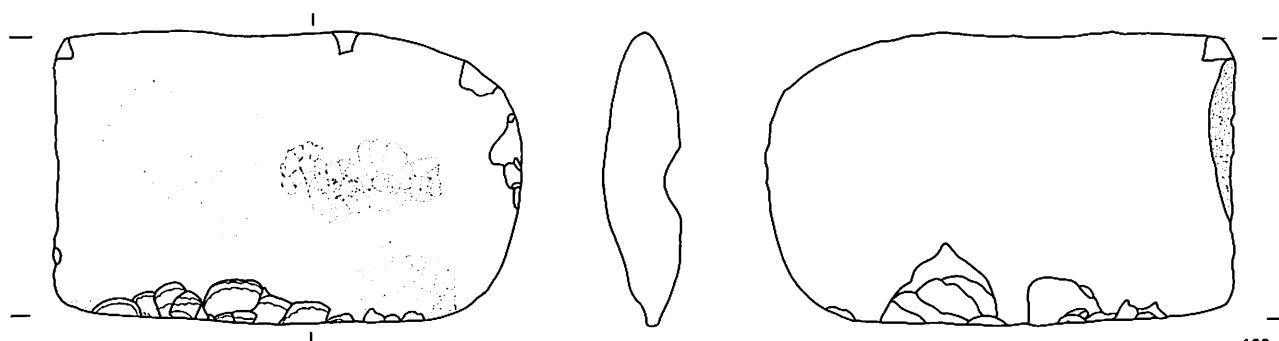


第42図 包含層出土の遺物(18)

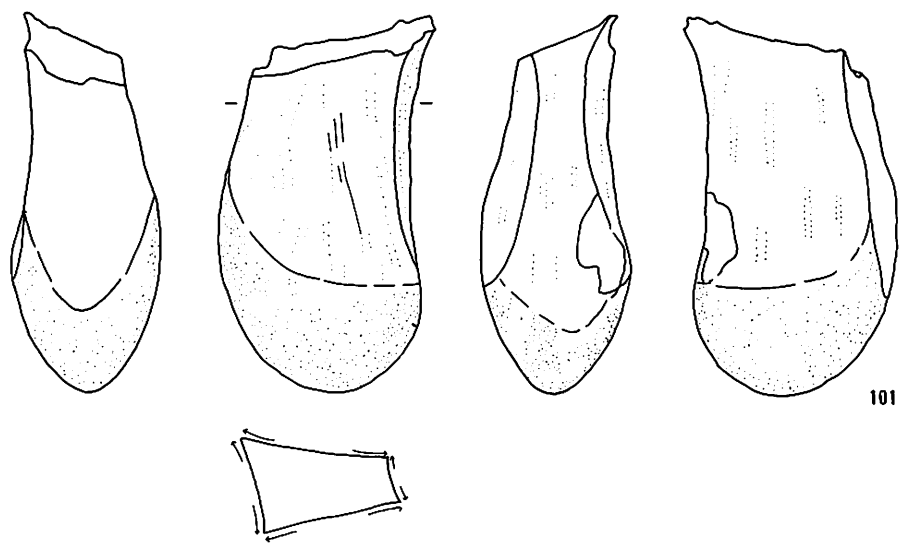


98

99

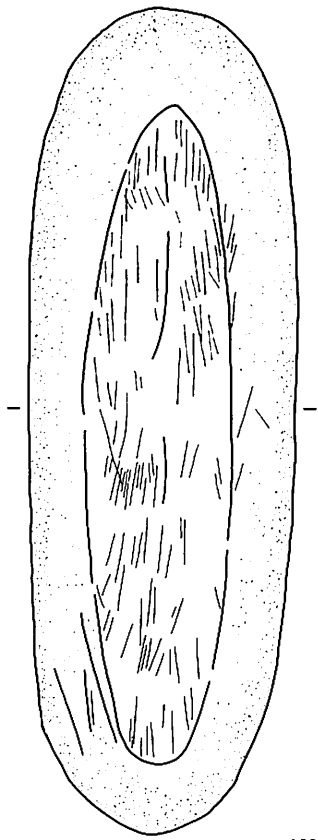


100

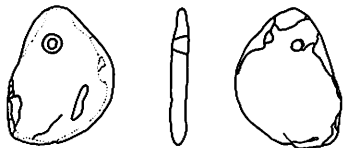
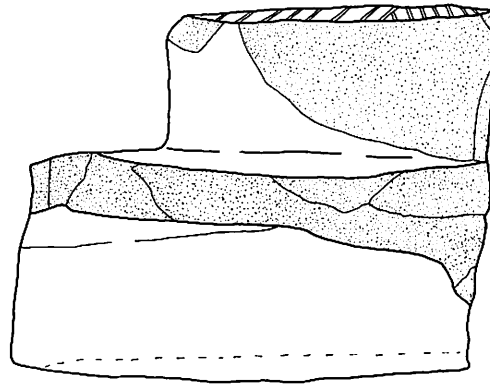
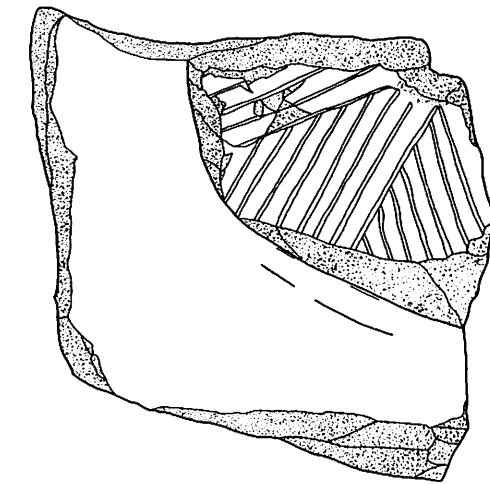
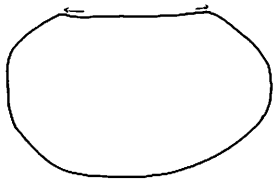


101

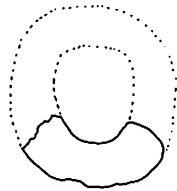
第43図 包含層出土の遺物(19)



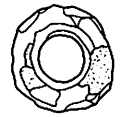
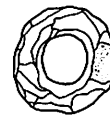
102



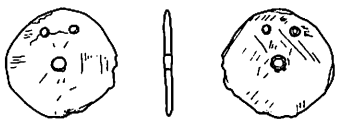
104



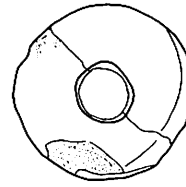
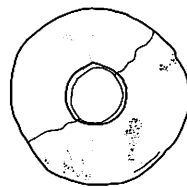
106



107

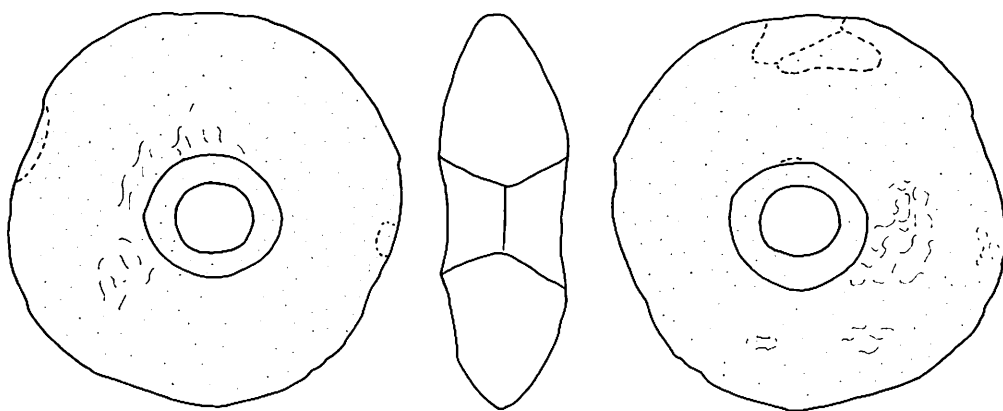


105

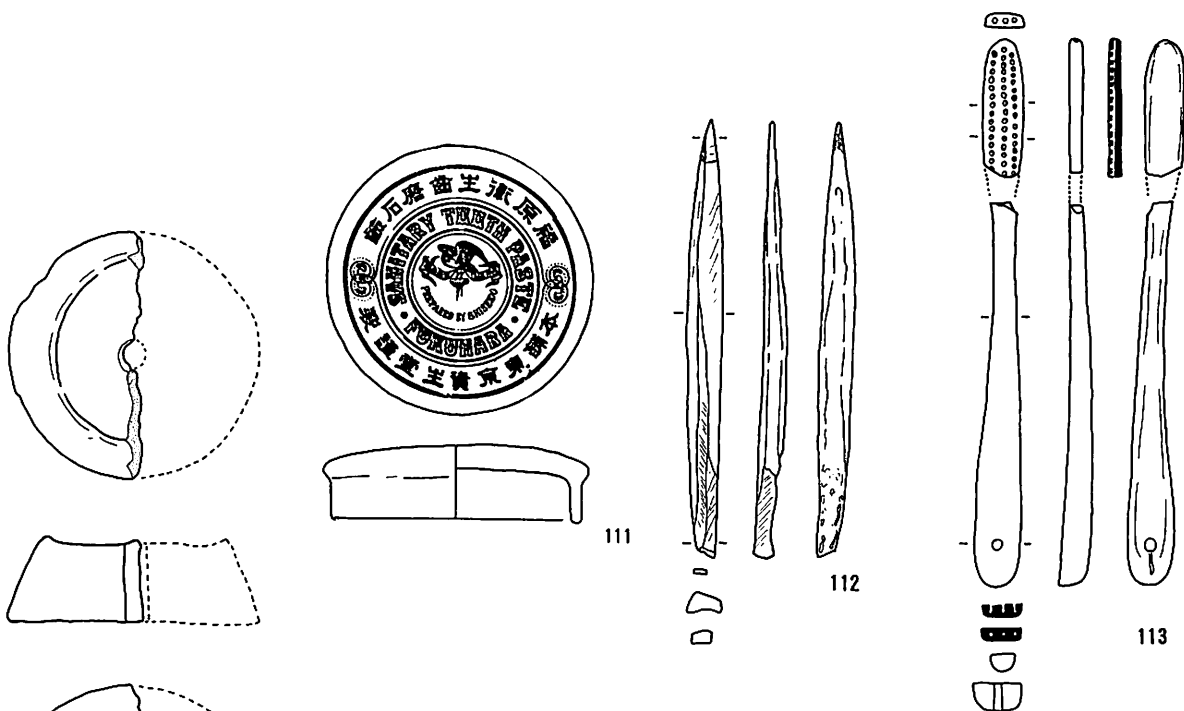


108

第44図 包含層出土の遺物(20)



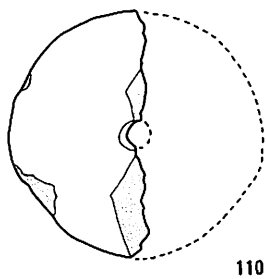
109



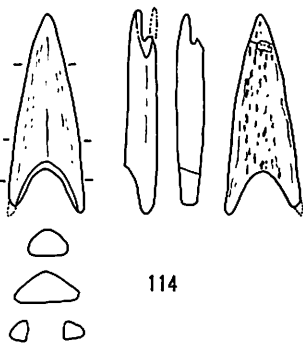
111

112

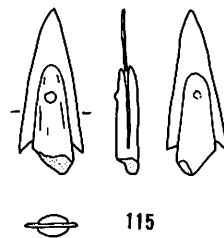
113



110

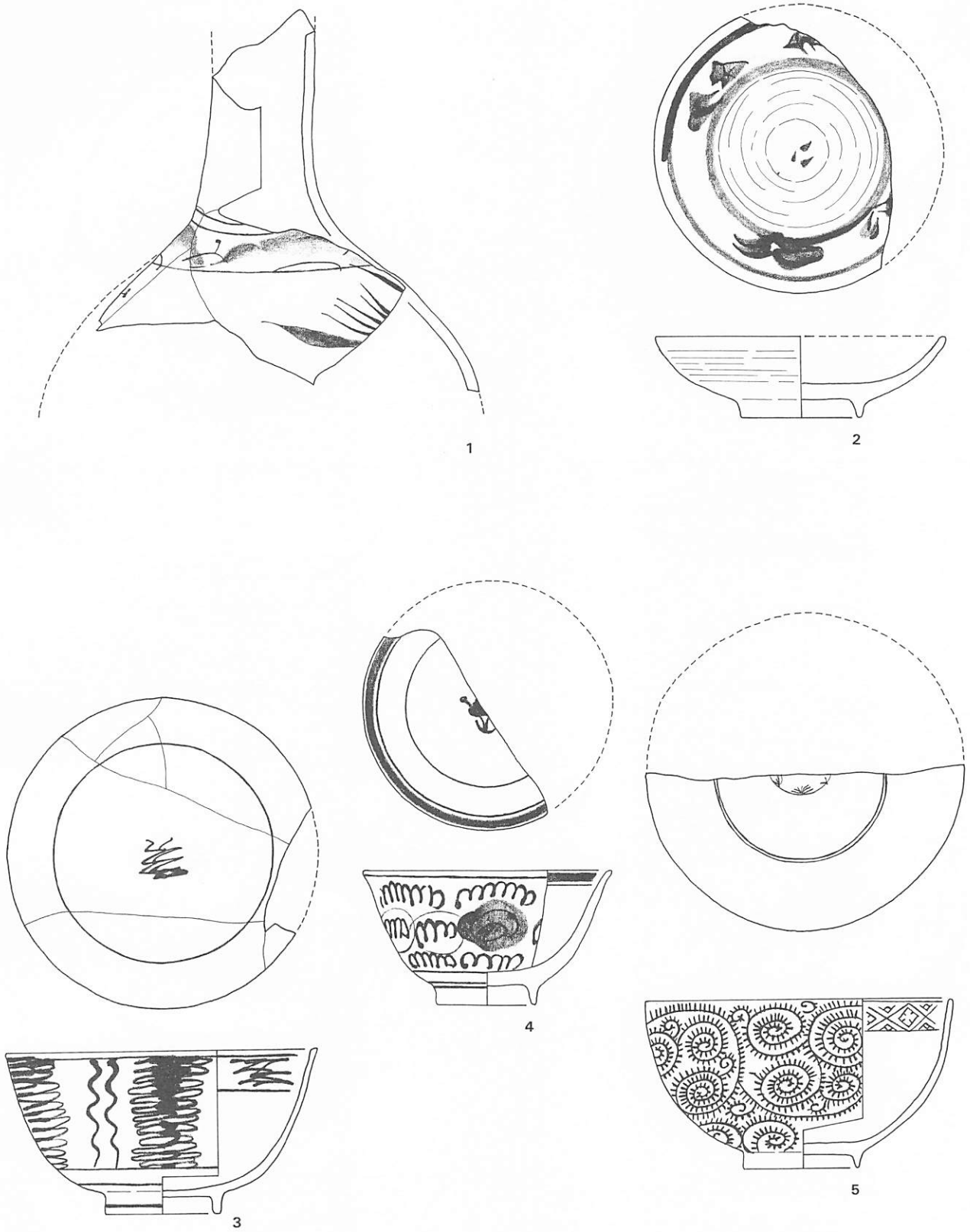


114

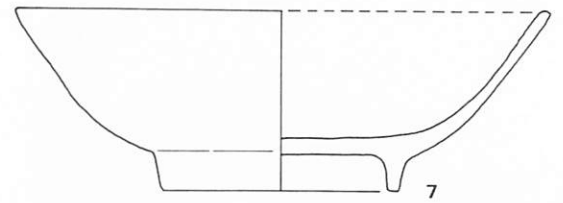
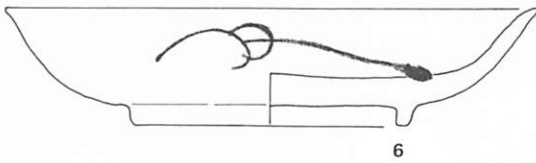
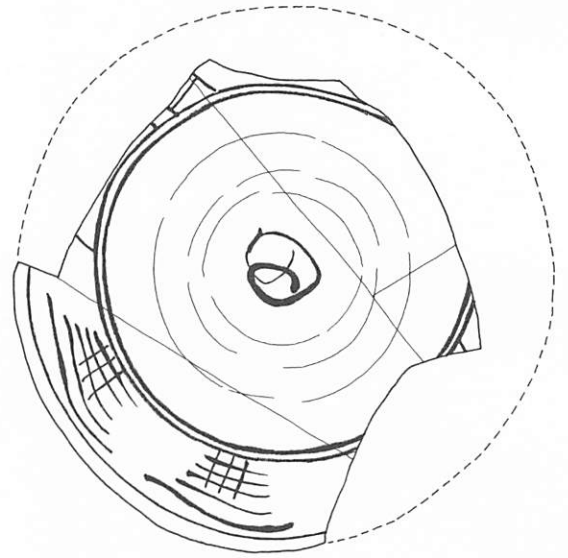


115

第45図 包含層出土の遺物(2)

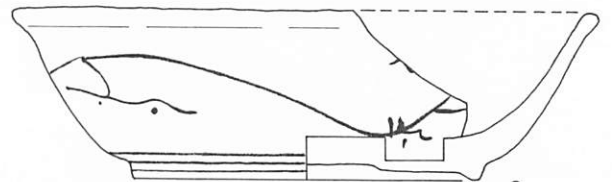
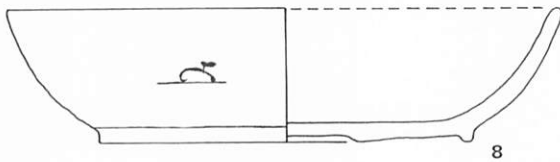


第46図 包含層出土の遺物(2)



6

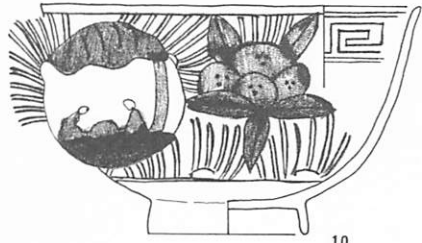
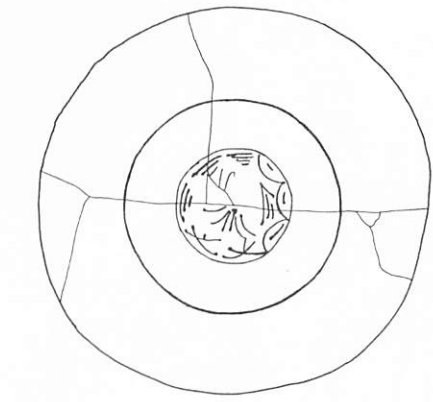
7



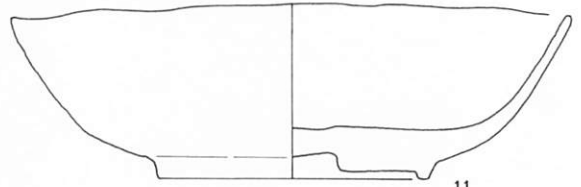
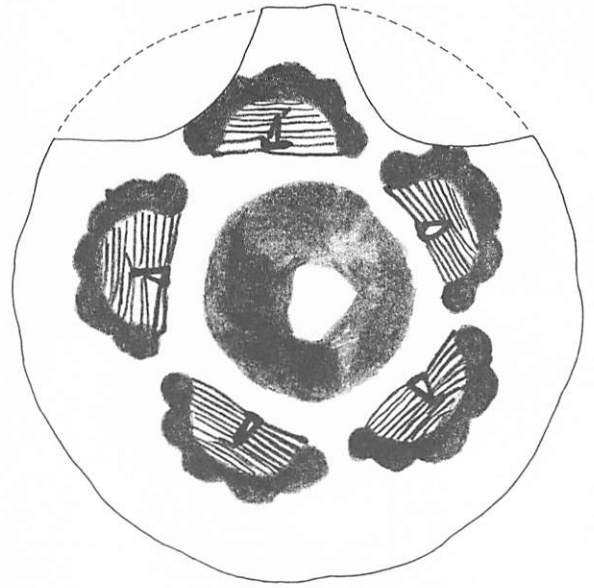
8

9

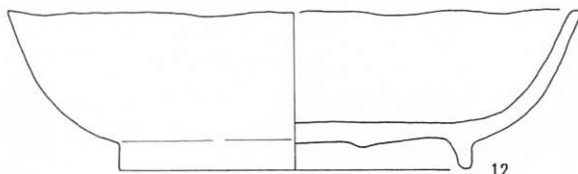
第47図 包含層出土の遺物(23)



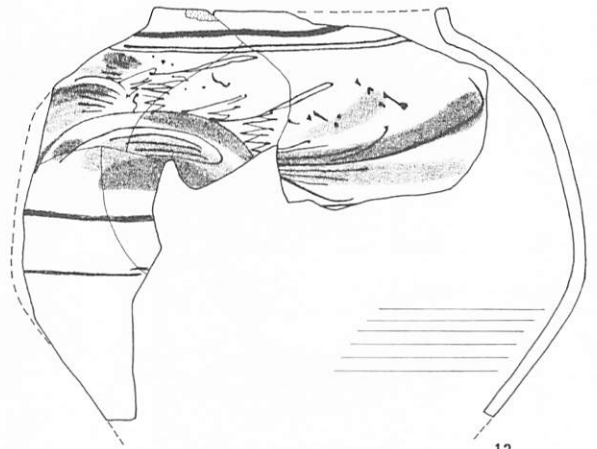
10



11

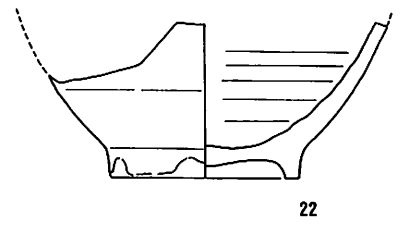
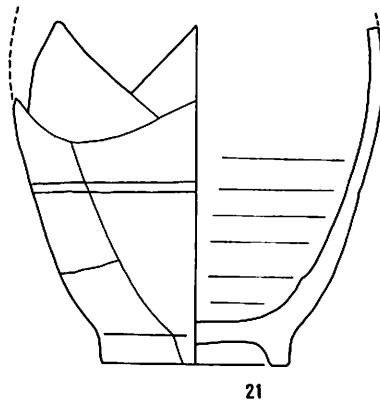
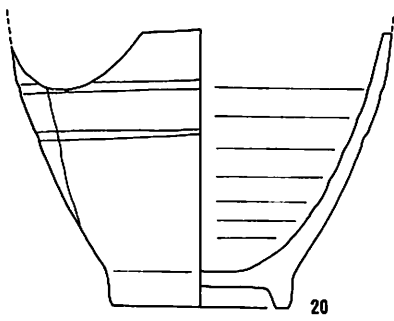
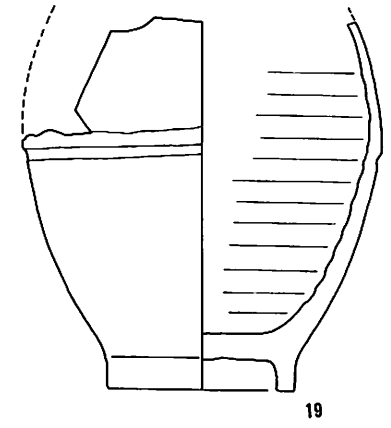
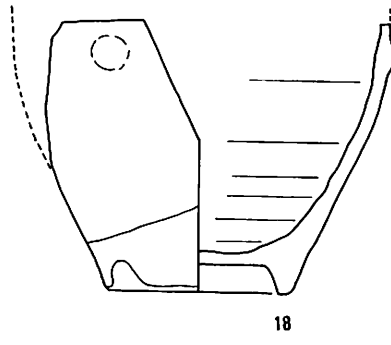
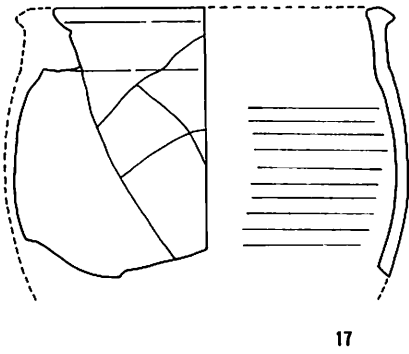
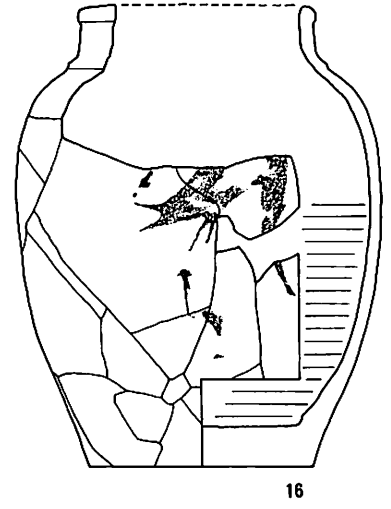
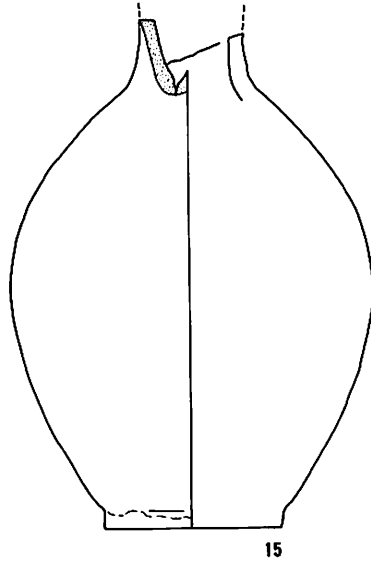
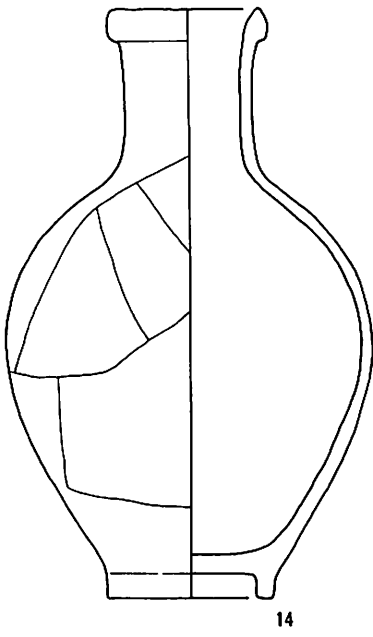


12

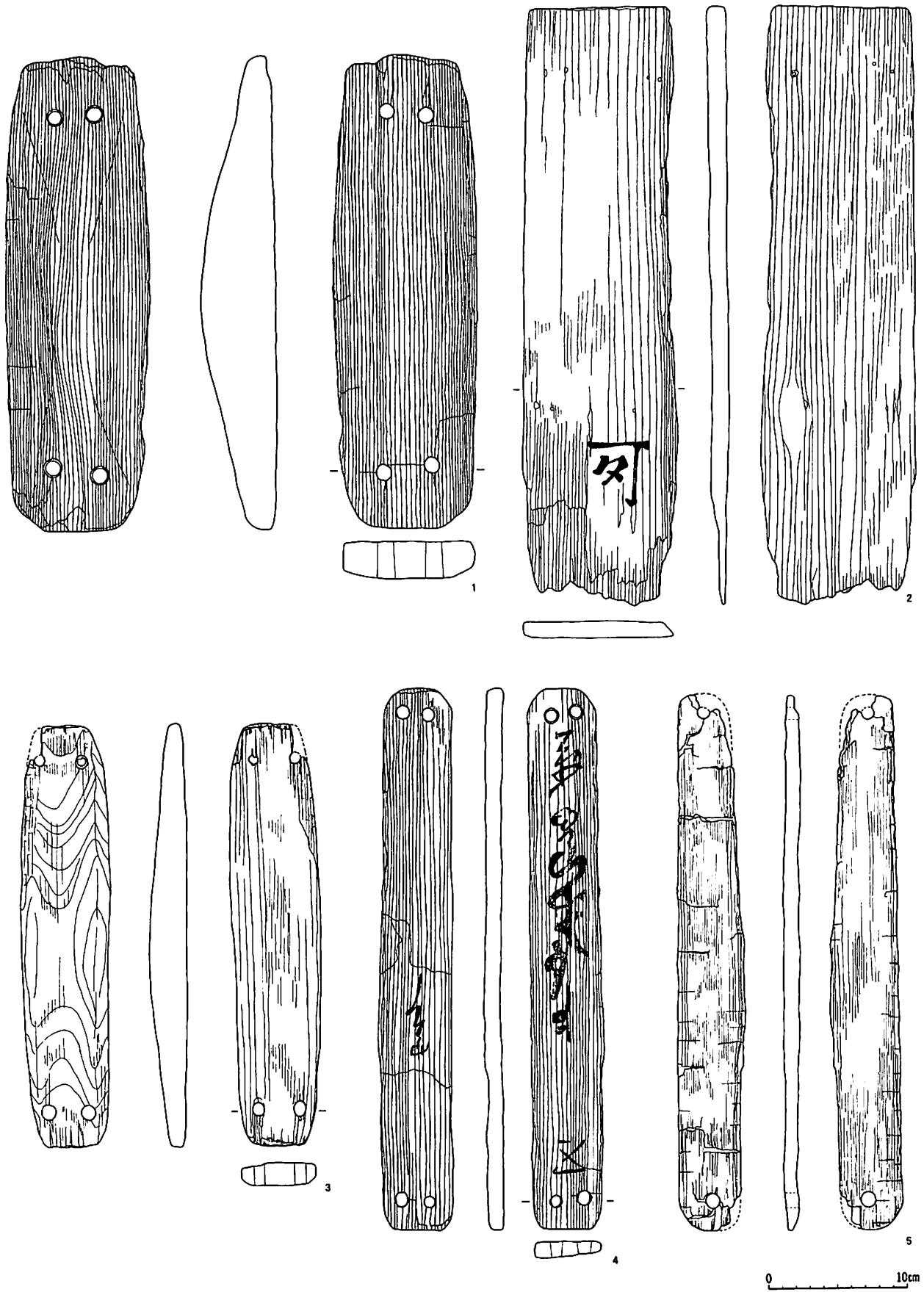


13

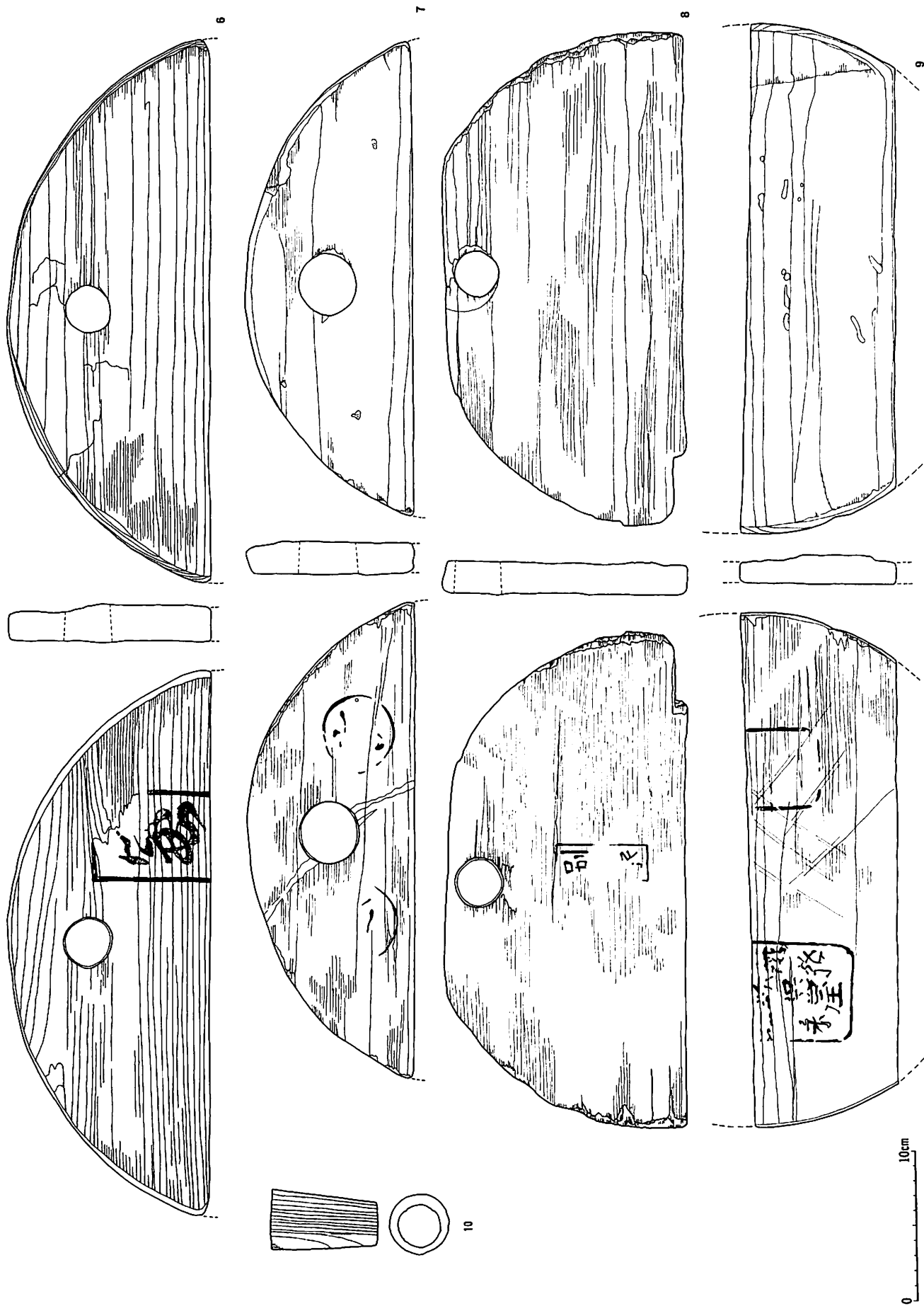
第48図 包含層出土の遺物(24)



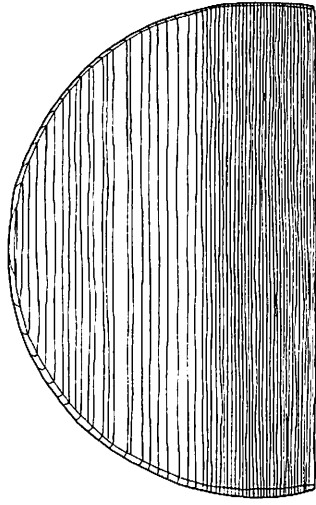
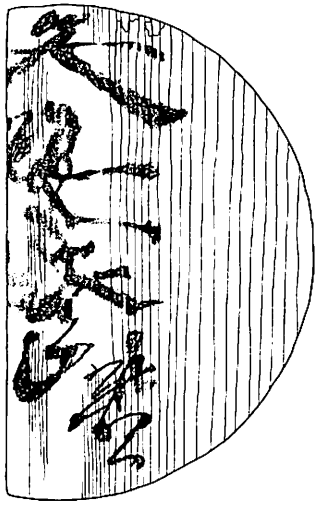
第49図 包含層出土の遺物(5)



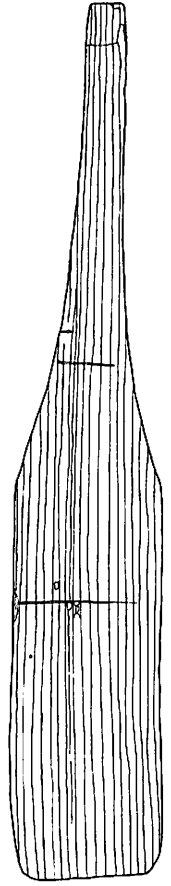
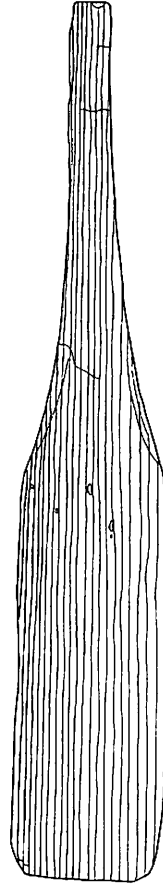
第50図 包含層出土の木製品(1)



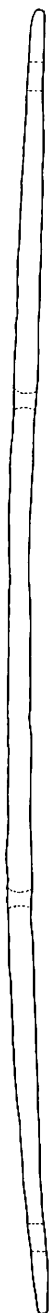
第51図 包含層出土の木製品(2)



11



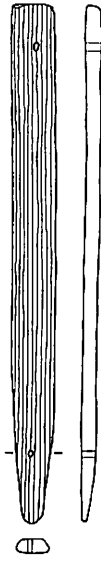
12



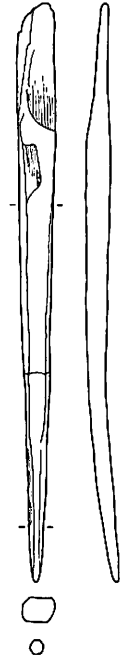
13



14



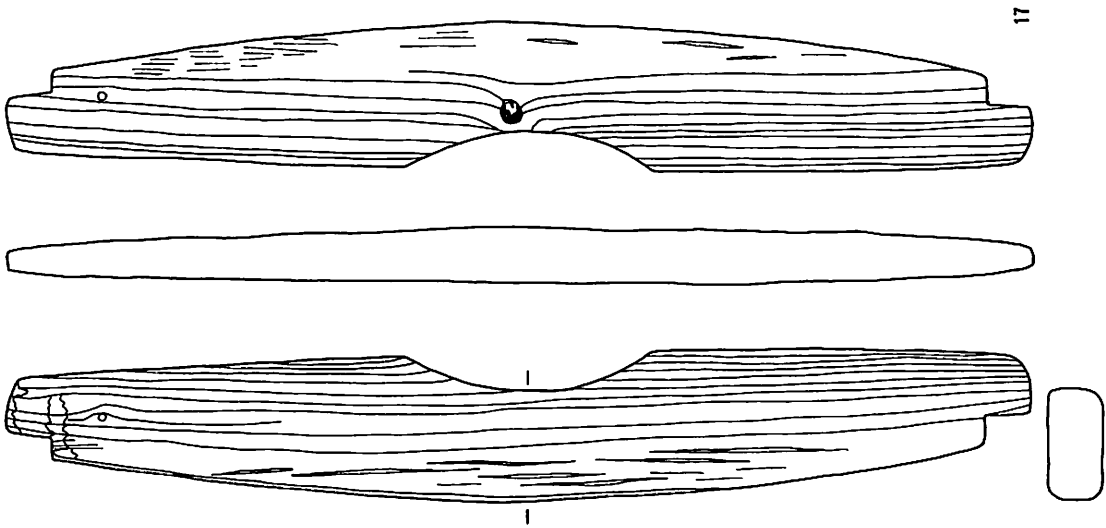
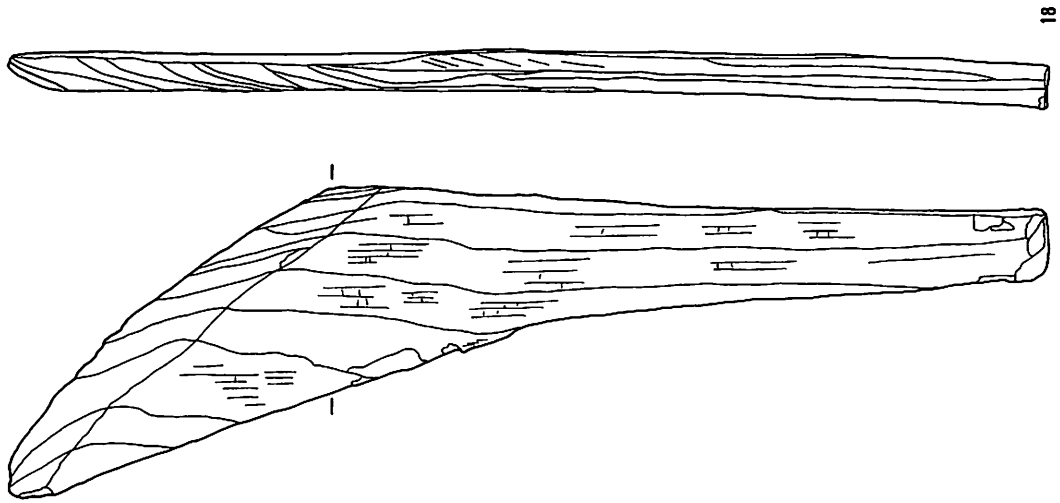
15



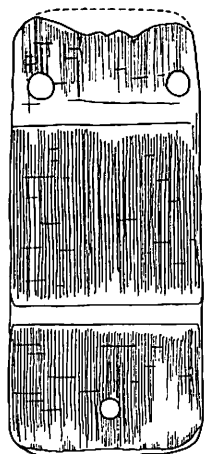
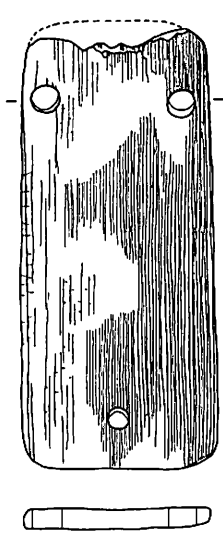
16

0 10cm

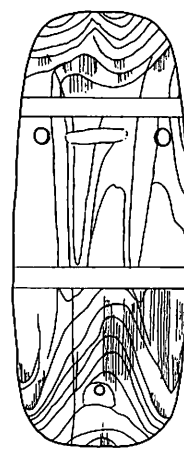
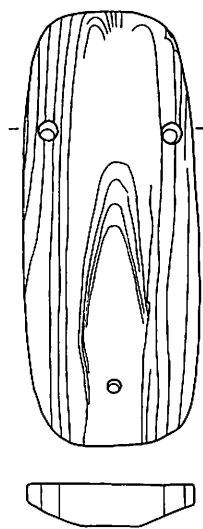
第52図 包含層出土の木製品(3)



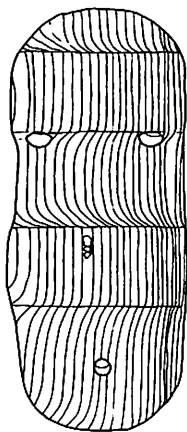
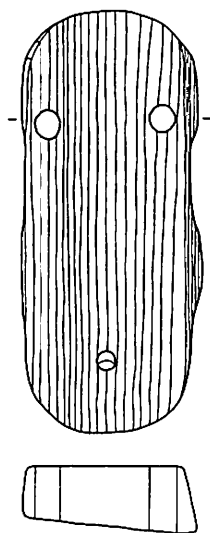
第53図 包含層出土の木製品(4)



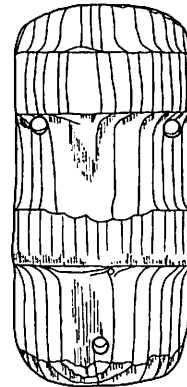
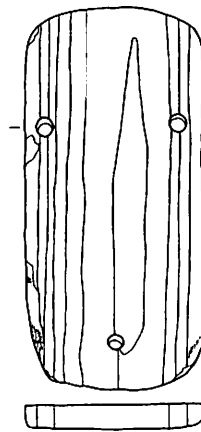
19



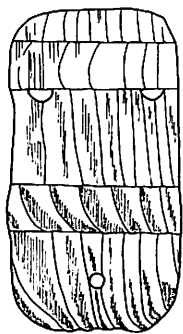
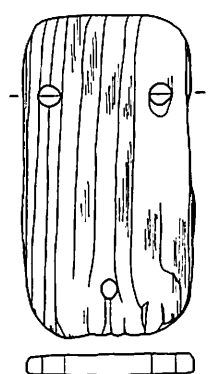
20



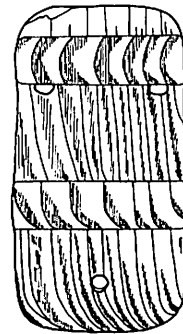
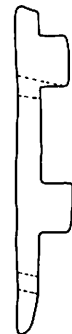
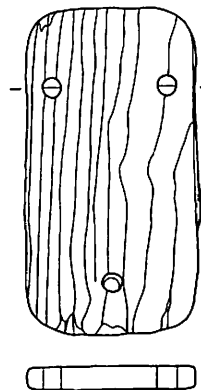
21



22



23



24



第54図 包含層出土の木製品(5)

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値				分類	備考
6-1	SM-1 3E-17 ②①一括	貝層	口径16.0cm	器高(18.3)cm		IV B		
7-2	SM-1-②④	"	口径22.4cm	器高 25.5cm		"		
3	SM-1 ②④④ 3E-03	"	口径21.6cm	器高(23.0)cm		"		
4	SM-1-④	"	口径14.0cm	器高 12.3cm	胴径14.9cm	"		
5	SM-1-④	"		器高 (6.5)cm		"		
6	SM-1-③	"		器高 6.2cm		"		
7	SM-1 3E-14	"	口径36.0cm	器高 76.5cm		"		
8-8	SM-1 3E-13	"	口縁部			"		
9	" 3E-11	"	"			"		
10	" 3E-12	"	"			"		
11	" 3E-07	"	"			"		
12	" 3E-17	"	"			"		
13	SM-1-② 一括	"	"			"		
14	SM-1-⑤	"	"			"		
15	SM-1 3E-55	"	"			"	(50cm×50cm)グリット	
16	" 3E-22	"	"			"		
17	" 3E-17	"	"			"		
18	" 3E-12	"	"			"		
19	" 3E-24	"	"			"		
20	" 3E-24	"	"			"		
21	" 3E-22	"	"			"		
22	" 3E-02	"	"			"		
23	" 3E-71	"	胴部			"	(50cm×50cm)グリット	
24	" 3E-73 3E-08	"	"			"		
25	" 3E-02	"	"			"		
26	" 3E-02	"	"			"		
27	" 3E-23	"	"			"		
28	" 3E-23	"	"			"		
29	" 3E-64	"	底部			"	(50cm×50cm)グリット	
30	" 3E-12	"	"			"		
31	" 3E-43	II	底径(6.2)cm 器高(6.8)cm			IV C	(50cm×50cm)グリット	
9-32	" 3E-82	貝層	長さ (3.1)cm	幅 1.0cm	厚さ 0.32cm	重さ 0.8 g	石鏃	"
33	" 3E-22	"	" (2.7)cm	" 1.0cm	" 0.38cm	" 0.7 g	"	
34	" 3E-53	"	" (2.2)cm	" 1.1cm	" 0.31cm	" 0.6 g	"	(50cm×50cm)グリット
35	" 3E-12	"	" 2.8cm	" 1.1cm	" 0.43cm	" 0.9 g	"	
36	" 3E-22	"	" 2.0cm	" 1.1cm	" 0.32cm	" 0.6 g	"	
37	" 3E-21	"	" (2.2)cm	" 1.3cm	" 0.23cm	" 0.7 g	"	
38	" 3E-12	"	" 4.1cm	" 0.9cm	" 0.59cm	" 21 g	石鏃	
39	" 3E-35	"	" (2.1)cm	" 0.7cm	" 0.63cm	" 1.2 g	"	(50cm×50cm)グリット
40	" 3E-12	"	" (3.5)cm	" 1.8cm	" 0.86cm	" 5.2 g	スライパ-	
41	" 3E-12	"	" 4.1cm	" 2.1cm	" 0.52cm	" 4.1 g	"	
42	" 3E-36	"	" 5.1cm	" 3.5cm	" 0.66cm	" 10.8 g	"	(50cm×50cm)グリット
43	" 3E-74	"	" 2.9cm	" 3.8cm	" 0.74cm	" 9.8 g	"	"
44	" 3E-49	"	" 7.8cm	" 2.9cm	" 1.03cm	" 22.9 g	"	

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値				分類	備考	
			長さ	幅	厚さ	重さ			
9-45	SM-1 3E-73	(50×50)	長さ 1.2cm	幅 1.1cm	厚さ 0.22cm	重さ 0.5g	装飾具		
46	" 3E-52	(50×50)	" 1.9cm	" 1.1cm	" 0.18cm	" 0.6g	装飾具		
47	" 3E-07	II	" (3.6)cm	" 2.7cm	" 1.91cm	" 13.0g	魚形石器		
48	" 2E-①		" 19.1cm	" 4.3cm	" 4.2cm	" 430.0g	"		
10-49	SM-1 3E-12	II	" 75mm	" 19.6mm	" 19.8mm	" 193g	骨角器	クジラ・骨・動物形	
50	" 3E-63	(50×50)	" 33mm	" 4.8mm	" 3.2mm	" 0.9g	釣針	組合式・鹿角	
51	" 3E-32	(50×50)	" 33mm	" 9.2mm	" 6.8mm	" 1.4g	銚頭	鹿角	
52	" 2E-08	II	" (55)mm		" 9.1mm	" 3.4g	"	海獣骨?	
53	" 3E-21		" 27mm	幅 7mm	" 5.5mm	" 0.1g	"	鹿角	
54	" 3E-82	(50×50)	" 38mm	" 10mm	" 8.8mm	" 2.8g	"	"	
55	" 3E-54	(50×50)	" 35mm	" 7.9mm	" 7.6mm	" 2.3g	"	"	
56	" 3E-35	(50×50)	" 76mm	" 8mm	" 6mm	" 5.7g	"	"	
57	" 3E-11	III	" 53mm	" 10.7mm	" 9.8mm	" 3.3g	"	"	
58	" 3E-14		" 38mm	" 4.6mm	" 4.3mm	" 0.7g	針	"	
59	" 3E-34	(50×50)	" 53mm	" 11.8mm	" 5.8mm	" 4.2g	突刺具?	"	
60	" 3E-54-b	(50×50)	" 49mm	" 12mm	" 6.1mm	" 4.0g	中柄	"	
61	" 3E-24		" 37mm	" 1.1mm		" 0.1g	針	鳥骨	
62	" 3E-72-b	(50×50)	" 88.6mm	" 1.8mm		" 0.4g	"	"	
63	" 3E-72-a	(50×50)	" 76mm	" 2mm		" 0.4g	"	"	
64	" 3E-72	(50×50)	" 125mm	" 3mm		" 0.8g	"	"	
65	" 3E-41	(50×50)	" 140mm	" 3.5mm		" 2.8g	"	陸獣骨	
11-1	H-1-㉔ 一括		口径 26.2cm		器高(29.3)cm		IV B		
2	H-1 5E-03	覆土	口縁部					"	
3	H-1 5E		長さ 2.2cm	幅 0.9cm	厚さ 0.31cm	重さ 0.5g	石鏃		
4	H-1-㉔		" 2.7cm	" 1.3cm	" 0.39cm	" 1.3g	"		
5	H-1 5E-㉔		" 2.5cm	" 1.0cm	" 0.31cm	" 0.7g	"		
6	H-1-㉔		" 3.2cm	" 1.6cm	" 0.5cm	" 2.1g	スライバ-		
7	H-1 5E-02	覆土	" (2.1)cm	" 2.3cm	" 0.61cm	" 3.0g	"		
8	" 5E-07		" 2.2cm	" 0.9cm	" 0.46cm	" 0.7g	"		
9	" 5E		" 2.9cm	" 2.0cm	" 1.01cm	" 4.4g	石鏃		
12-1	H-3	覆土	口径 21.4cm				VA		
2	H-3	"		底径 (5.8)cm	器高 6.7cm		VB		
14-1	SM-4 4G-㉔		口径 4.0cm	底径 8.0cm	器高 2.47cm	胴径 14.2cm	VII	焼酎徳利	
2	SM-4 4G-㉔			底径 6.9cm	器高 (4.6)cm		"	"	
3	SM-4-㉔				(8.6)cm		"	"	
4	SM-4 5G-㉔						"	三平皿	
5	SM-4 5G-②		口径 5.0cm		器高 1.9cm		"?	蓋	
6	SM-4 4G-㉔			底径 8.6cm	器高 4.1cm		"	酒徳利	
7	" 4G-㉔		長さ 77mm	幅 24.7mm	厚さ 17mm	重さ 23.3g	行未成品	クジラ骨	
8	" 4G		" 60mm	" 9.5mm	" 8mm	" 2.9g	針入	トリ骨	
9	" 4G		" 66mm	" 14mm	" 8.2mm	" (6.8)g	銚頭?	シカ骨	
10	" 4G		" 98mm	" 10.5mm	" 5.5mm	" 6.1g	中柄	シカ骨	
11	" 4G-94			" 2.4cm			シントコ	行器 脚部 金具付	
12	"			" 2.4cm			シントコ	" "	

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計 測 値				分 類	備 考
15-13	SM-4 5H-㉗		長さ 22.3cm				鉄 鎌	
14	" 4G-㉘, ㉙		" 15.0cm	刃長 13.3cm			小 刀	
15	" 4G	サノハ部分	" 14.9cm	" 14.9cm			"	
16	" 4G-91		" 11.5cm	" 11.5cm			"	
17	" 4G-14						鉄カギ	
18	" 5G-45		口径(25.0)cm	器高(14.5)cm			鉄鍋	釣耳式 1孔
19	" 5G-75			(15.5)cm			"	" 5孔
20	" 4G-102		口径 17.0cm	9.2cm	器厚 2.4mm		"	三脚有
21	" 4G-09		長さ 4.93cm				キセル	
22	" 4G-89		" 3.74cm				キセル	
23	" 4G-82		" 9.27cm				キセル	
24	" 4G-2		径 4.04cm	重さ 2.4g			ニカリ	耳飾り・ガラス玉付
17-1	SM-5 11F-15			底径 8.1cm	器高(4.0)cm		VI	
2	" 11E-10			" 8.0cm	" (5.0)cm		"	
3	SM-5-3		口径 4.1cm		" (5.8)cm		"	
4	SM-5-4		" 3.4cm		" (5.1)cm		"	
5	SM-5-14		" 4.0cm		" (9.4)cm		"	
6	SM-5 11F-1			底径 7.7cm	" (12.2)cm	胴径 14.3cm	"	
7	SM-5-9						VI~VII	コンブラ瓶
8	SM-5-4			底径 6.9cm		胴径 8.8cm	"	"
9	SM-5 12E-05		長さ 7.2cm				キセル	吹口
10	SM-5 11F-22		4.3cm				キセル	"
11	SM-5 10F-52		口径(28.0)cm	底径 19.0cm	器高 15.6cm		鉄鍋	吊耳式 2孔
18-12	" 11F-05		" (24.5)cm		" (11.5)cm		"	" 3孔
13	" 10F-21						ニカリ	耳飾り
14	SM-5 11F		長さ 14.2cm	刃長 10.0cm			小 刀	
15	SM-5 11E-05		" 11.0cm				"	
16	SM-5 11F-㉚		" 17.5cm	刃長 4.1cm			鉄鎌	
17	SM-5 12F-05		" 8.0cm	7.6cm			舟釘	
19-18	" 9F-㉛		" 157mm	幅 10.5mm	厚さ 9.6mm	重さ 14.4g	中柄	シカ中手or中足骨
19	" 10G-22		" 150mm	" 12.2mm	" 9mm	" 14.7g	中柄	クジラ骨
20	" 11F	U	" 111.2mm	" 11.5mm	" 7.4mm	" 8.4g	中柄	"
21	" 11F-20	V	" 124mm	" 11mm	" 6.5mm	" 9.6g	刺突具	ウマ側指
22	" 11F-01	V	" 111.5mm	" 7.6mm	" 4.5mm	" 3.0g	?	鹿骨
23	" 10F-㉜		" 117mm	" 4.5mm	" 1mm	" 1.4g	針	鳥骨
24	" 11F-㉝		" 108mm	" 5mm	" 2mm	" 2.1g	エイ尾	エイ類尾棘
25	" 11F-㉞		" 85mm	" 5.5mm	" 2mm	" 1.1g	エイ尾	"
26	" 11F 点とり		" 48.5mm	" 13.5mm	" 9.8mm	" 3.5g		鳥骨
27	" 11F-18		" 46mm	" 9.1mm	" 8.5mm	" 2.5g	針入	" 彫刻有
28	" 9F-㉟		" 77mm	" 9.5mm	" 7.0mm	" (4.2)g	針入	" "
25-1	2E-22	II	口径 26.0cm		器高(14.0)cm		IV B	波状工字文
2	3E-02	II	" 21.4cm		" (9.8)cm		"	
3	3E-21	II	" 26.0cm		" (22.5)cm		"	
4	2E-08 一括	II	" 15.8cm	底径 7.5cm	" (16.5)cm		"	

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計 測 値				分 類	備 考	
25-5	5E-③ 一括		口径 9.6cm	底径 5.5cm	器高 11.5cm	胴径 9.8cm	IV B		
6	4E-19	II	" 8.8cm						
7	2E-25	II	" 4.2cm		器高 (3.9)cm		IV B		
8	10G	U		底径 2.9cm	" (5.6)cm	胴径 6.1cm	"		
9	3E-07	III	口径 (9.6)cm	" (2.6)cm	" 5.2cm		"	浅鉢	
26-10	1F-① 一括		" 26.8cm		" (14.5)cm		IV E	突瘤文有	
11	3E-04	II	" (23.5)cm	底径 7.8cm	" 26.6cm	胴径 16.2cm	V A	横走沈線	
12	4F-⑦ 一括		" 22.6cm		" 23.0cm		"	"	
13	3F-6 一括				" (15.2)cm	胴径 18.8cm	"	"	
14	2E-08	II	口径 29.0cm		" (25.0)cm		"	"	
27-15	2E-⑧		" 28.0cm				"	"	
16	5E-2 一括			底径 6.5cm	器高(18.5)cm	胴径 14.7cm	"	"	
17	4F-1 一括		口径 26.4cm			" 20.6cm	"	"	
18	3F-1 一括					" 20.0cm	"	"	
19	4E-10 一括				器高(23.1)cm	" 23.0cm	"	"	
28-20	3E-14	II	口径 21.6cm		" (13.5)cm		"		
21	3F-⑧一括, 02 2E-04, 09, ⑨	II	" 28.2cm				"		
22	2F-16	II	" 22.8cm		器高(22.0)cm		"		
23	2F-⑫ 一括		" 28.6cm	底径 7.0cm	" (15.0)cm	胴径 17.1cm	"	底部に笹痕	
24	3G-06 一括		" 25.5cm	" 6.8cm	" 19.0cm	" 21.3cm	"	"	
29-25	5E-21	III			" 29.3cm		I A		
26	5E-21	III	口縁部					"	
27	4E-01	II	"					"	
28	4E-16	II	"					"	
29	3E-01	III	"					I B	
30	3F-17	III	"					"	
31	2E-04	II	"					"	
32	3E-09	II	"					"	
33	21-12	II	"					"	
34	3E-25	III	"					"	
35	3E-02	III	"					"	
36	4E-16	II	"					"	
37	2E-15	II	"					"	
38	4E-17	III	"					"	
39	3E-17	III	"					"	
40	2E-13	III	"					"	
41	4E-11	III	"					"	
42	4E-19	III	"					"	
43	2E-23	III	"					"	
44	4E-01	II	"					"	
45	2E-18	III	"					"	
46	5E-21	III	胴部					"	
47	4F	II	口縁部					II A	
48	4E-16	III	胴部					I B	

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値	分類	備考
29-49	2F-25	Ⅱ	口縁部	I B	
50	4E-16	Ⅲ	"	"	
51	2F-14	Ⅱ	底部	"	
30-52	3E-24	Ⅲ	口縁部	Ⅱ B	
53	4E-16	"	"	"	
54	3E-12	"	胴部	"	
55	3E-24	"	"	Ⅱ A	
56	4E-11	"	"	"	
57	2E-18	Ⅱ	"	Ⅱ A	
58	3E-10	Ⅱ	口縁部	Ⅳ A	
59	2E-22	Ⅲ	"	Ⅱ A	
60	2E-09	Ⅱ	胴部	Ⅲ A	
61	3F-23	Ⅲ	口縁部	Ⅲ B	
62	4E-04	Ⅱ	"	Ⅳ B	
63	3E-13	Ⅲ	胴部	"	
64	3E-17	Ⅲ	"	"	
65	2E-10	Ⅱ	口縁部	"	
66	3E-03	"	"	"	
67	4E-01	"	"	"	
68	3E-11	"	"	"	
31-69	2E-08	"	"	"	
70	3E-04	"	"	"	
71	3E-03	"	"	"	
72	3E-06	Ⅱ	"	"	
73	3E-③一括		"	"	
74	3E-11	Ⅱ	"	"	
75	2E-04	"	"	"	
76	3F-11	"	"	"	
77	4E-02	Ⅲ	"	"	
78	2E-08	Ⅱ	"	"	
79	3F-01	Ⅱ	"	"	
80	3E-③一括		"	"	
81	3F-14	Ⅱ	"	"	
82	2F-15	Ⅲ	胴部	"	
83	3F-17	Ⅱ	口縁部	"	
84	2E-19	"	"	"	
85	3E-20	"	胴部	"	
86	2E-18	"	"	"	
87	4E-17	"	"	"	
88	2E-17	Ⅲ	"	"	
89	2F-06	Ⅱ	"	"	
90	2E-25	"	口縁部	"	
91	2E-18	"	"	"	
32-92	2E-17	"	"	Ⅳ C	後北 B

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値	分類	備考
32-93	2F-14	Ⅱ	胴部	IV C	後北 C ₁
94	2E-04	"	口縁部	"	"
95	3F-04	"	底径 5.0cm 器高 (7.3)cm	"	
96	2F-④	"	注口部	"	後北 C ₂ -D
97	2E-14	"	注口部	"	
98	4E-10 一括	"	"	"	
99	3F-19	"	"	"	
100	3F-09	"	"	"	
101	3F-06	"	"	"	
102	攪乱	"	"	"	
103	3F-09	"	"	"	
104	2E-03	"	"	"	
105	2F-23	"	"	"	
106	2F-10	"	"	"	
107	2F-11	"	口縁部	"	
108	2F-16	"	"	"	
109	2E-08	"	"	"	
110	3F-12	"	"	"	
111	2F-20 3F-04	"	"	"	
112	2F-19	"	"	"	
33-113	4F-17	"	"	"	
114	3F-12	"	"	"	
115	2F-10 3F-10	"	"	"	
116	2E-03	"	"	"	
117	2E-19	"	"	"	
118	3F-12	"	"	"	
119	4E-08	"	"	"	
120	2E-19	"	"	"	
121	3F-12	"	"	"	
122	2F-21	"	"	"	
123	2E-10	"	"	"	
124	2F-07	"	"	"	
125	2E-18	"	胴部	"	
126	2E-13	"	底部	"	
127	3F-02	"	胴部	"	
128	2F-24	"	底部	"	
129	3F-07	"	"	"	
130	6E-11	"	"	"	
131	2E-04	"	底径 (8.2)cm 器高 (5.5)cm	"	
34-132	3F-14	"	口縁部	"	
133	3F-02 3F-14	Ⅲ Ⅱ	"	"	
134	3F-09	Ⅱ	"	"	
135	3F-08	"	"	IV D	
136	2E-25	"	"	"	

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値	分類	備考
34-137	3F-12	Ⅱ	口縁部	IV E	
138	3F-09, 11	"	胴部	"	
139	3F-09	"	口縁部	"	
140	2E-18	"	"	"	
141	2E-10	"	"	"	
142	2E-10	"	"	"	
143	2E-25	"	"	"	
145	2E-04	"	"	V	
146	2E-09	"	"	"	
147	2E-24	"	"	"	
148	2E-25	"	"	"	
149	2E-19	"	"	"	
150	2E-19	"	"	"	
151	3F-13	"	"	"	
152	2E-14	"	"	"	
153	2E-15	"	"	"	
154	2E-14	"	"	"	
155	2E-23	"	"	"	
156	2E-23	"	"	"	
157	3F-01	"	口縁部	"	
158	2E-14	"	胴部	"	粘土紐貼付
159	3E-10	"	"	"	"
160	3F-16	"	"	"	
161	2E-20	"	"	"	
35-162	3E-21	"	口縁部	"	
163	5E 一括	"	胴部	"	
164	5E 一括	"	"	"	
165	2E-25	"	口縁部	"	
166	2E-05	"	"	"	
167	5E 一括	"	"	"	
168	5E 一括	"	"	"	
169	2E-19	"	口縁部+胴部+底部	IV B	ハケ目
170	3F-03	"	"	"	"
171	2E-13	"	口縁部+胴部	"	
172	3F-02	"	"	"	
173	2F-07	"	口縁部+胴部+底部	"	
174	3E-05	"	"	"	
175	3E-09	"	口縁部+胴部	"	
176	2F-07	"	"	"	
177	2E-15	"	口縁部+胴部+底部	IV A	
178	4E-09	"	"	"	
179	4E-10	Ⅲ	口縁部+胴部	"	
180	2F-㊸		口縁部+胴部+底部	"	糸切底
181	3E-18	Ⅱ	口径 15.9cm 底径 7.2cm 器高 7.5cm	"	"

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計 測 値				分 類	備 考
36-182	3F-㉔一括		口径 12.0cm 底径 5.2cm 器高 4.2cm				VB	
183	3F 一括		" 9.8cm " 4.1cm " 4.5cm				"	
184	3E-25	II	胴部+底部+底				"	
185	3F-12	II	口縁部				"	
186	3F-13	II	胴部				VC	
36-187	3F-01	III	胴部				VC	
188	11-19	II	"				"	
189	2E-15	"	"				"	
190	2E-20	"	"				"	
191	2E-08	"	器高(5.8)				"	長頸壺
192	2F-13, 18, 19, 20	"	器高(13.5)cm 胴径(17.6)cm				"	"
193	2F-02	"	長さ 1.6cm 幅 1.7cm 厚さ 1.0cm				土製玉	
194	2E-05	III					IVB	クマ形付口縁
195	2F-02	II	長さ (3.0)cm 幅 2.2cm				土製品	コマ形
196	5E-18	"					IVB	クマ形付口縁
197	2E-03	"	長さ (3.6)cm	幅 (3.4)cm	厚さ 1.9cm		石鏃	
37-1	2E-15	"	" 2.2cm	" 1.3cm	" 0.25cm	重さ 0.6g	"	
2	2F-09	"	" 2.1cm	" 1.5cm	" 0.32cm	" 0.8g	"	
3	2E-08	"	" (3.0)cm	" 1.6cm	" 0.4 cm	" 1.6g	"	
4	2E-13	"	" (2.7)cm	" 1.4cm	" 0.3 cm	" 1.0g	"	
5	4F-16	"	" 2.3cm	" 1.2cm	" 0.32cm	" 0.8g	"	
6	3F-11	"	" (2.7)cm	" 1.7cm	" 0.32cm	" 1.3g	"	
7	2F-01	"	" (1.8)cm	" 1.2cm	" 0.25cm	" 0.5g	"	
8	3E-09	"	" (3.8)cm	" 1.3cm	" 0.3 cm	" 1.0g	"	
9	3E-15	"	" 3.3cm	" 1.5cm	" 0.28cm	" 0.8g	"	
10	2E-24	"	" 1.6cm	" 1.2cm	" 0.25cm	" 0.4g	"	
11	2F-06	"	" 2.0cm	" 1.4cm	" 0.22cm	" 0.5g	"	
12	2E-14	"	" 2.9cm	" 1.6cm	" 0.32cm	" 1.2g	"	
13	2F-07	"	" 2.9cm	" 1.2cm	" 0.52cm	" 1.3g	"	
14	2E-20	"	" 2.1cm	" 1.0cm	" 0.18cm	" 0.4g	"	
15	2E-19	"	" 2.3cm	" 1.3cm	" 0.5 cm	" 0.7g	"	
16	4E-03	III	" 2.6cm	" 1.5cm	" 0.47cm	" 1.2g	"	
17	4E-15	II	" 2.5cm	" 1.3cm	" 0.4 cm	" 0.8g	"	
18	5E-06	III	" 3.3cm	" 1.1cm	" 0.52cm	" 1.5g	"	
19	2E-17	II	" (3.3)cm	" 1.2cm	" 0.42cm	" 1.2g	"	
20	2E-22	II	" 3.9cm	" 1.2cm	" 0.39cm	" 1.5g	"	
21	4E-11	III	" 3.8cm	" 1.3cm	" 0.3 cm	" 1.3g	"	
22	3F-04	II	" (4.7)cm	" 1.2cm	" 0.45cm	" 1.5g	"	
23	3E-15	II	" 3.8cm	" 1.2cm	" 0.5 cm	" 1.4g	"	
24	2F-11	"	" 2.6cm	" 1.3cm	" 0.28cm	" 0.8g	"	
25	11E-18	"	" 3.2cm	" 1.0cm	" 0.35cm	" 0.9g	"	
26	2E-23	"	" (4.2)cm	" 1.2cm	" 0.4 cm	" 1.4g	"	
27	2F-18	"	" 3.8cm	" 1.3cm	" 0.38cm	" 1.5g	"	
28	4E-13	"	" 3.3cm	" 1.1cm	" 0.34cm	" 0.9g	"	

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値				分類	備考
			長さ (3.3)cm	幅 (1.3)cm	厚さ 0.5 cm	重さ 1.8 g		
37-29	2F-07	Ⅲ	長さ (3.3)cm	幅 (1.3)cm	厚さ 0.5 cm	重さ 1.8 g	石錐	
30	2E-13	Ⅱ	" 3.5cm	" 1.2cm	" 0.4 cm	" 1.1 g	"	
31	2F-07	"	" 3.1cm	" 1.2cm	" 0.3 cm	" 0.9 g	"	
32	2E-15	"	" (3.1)cm	" 1.3cm	" 0.3 cm	" 0.9 g	"	
33	2F-08	"	" 3.9cm	" 1.2cm	" 0.45cm	" 1.4 g	"	
34	2F-13	"	" 3.5cm	" 1.3cm	" 0.4 cm	" 1.3 g	"	
35	3E-18	Ⅱ	" 3.9cm	" 1.4cm	" 0.3 cm	" 1.2 g	"	
36	2F-22	"	" 3.3cm	" 1.1cm	" 0.4 cm	" 1.0 g	"	
37	2E-18	"	" 3.5cm	" 1.2cm	" 0.52cm	" 1.9 g	"	
38	3E-22	"	" 3.1cm	" 1.2cm	" 0.68cm	" 2.9 g	"	
39	2F-06	Ⅲ	" 4.0cm	" 1.2cm	" 0.4 cm	" 2.0 g	"	
40	2F-16	"	" 3.5cm	" 1.4cm	" 0.4 cm	" 1.8 g	"	
41	3E-23	Ⅱ	" 4.2cm	" 1.8cm	" 0.6 cm	" 3.2 g	"	
38-42	5F-06	Ⅲ	" 6.2cm	" 2.6cm	" 0.7 cm	" 8.5 g	石槍	
43	3E-11	"	" (6.0)cm	" 3.6cm	" 0.63cm	" 8.0 g	"	
44	1F-18	Ⅱ	" 5.2cm	" 2.6cm	" 0.7 cm	" 7.8 g	"	
45	1F-23	"	" 5.3cm	" 2.3cm	" 0.7 cm	" 7.4 g	"	
46	3F-04	"	" 5.0cm	" 2.0cm	" 0.82cm	" 7.4 g	スクレイパー	
47	5F-17	Ⅲ	" 5.7cm	" 2.7cm	" 0.51cm	" 8.0 g	"	
48	2E-18	Ⅱ	" 6.7cm	" 2.3cm	" 1.03cm	" 15.6 g	"	
49	2E-05	"	" 5.2cm	" 2.8cm	" 0.79cm	" 8.9 g	"	
50	3F-08	"	" 6.3cm	" 2.2cm	" 0.8 cm	" 9.7 g	"	
51	4F-21	Ⅲ	" 5.9cm	" 2.4cm	" 0.8 cm	" 10.4 g	"	
52	2E-15	Ⅱ	" 7.3cm	" 3.6cm	" 0.98cm	" 24.1 g	"	
53	2E-05	"	" 7.1cm	" 3.3cm	" 0.85cm	" 24.2 g	"	
54	2F-02	"	" 5.0cm	" 3.1cm	" 0.5 cm	" 9.0 g	"	
55	2E-04	"	" 5.1cm	" 2.7cm	" 0.75cm	" 12.7 g	"	
56	4E-06	"	" 4.1cm	" 1.7cm	" 0.75cm	" 5.0 g	"	
57	2F-23	Ⅲ	" 5.1cm	" 2.8cm	" 0.68cm	" 10.6 g	"	
58	5F-08	Ⅱ	" 6.0cm	" 2.4cm	" 1.05cm	" 16.6 g	"	
59	5F-07	"	" 5.3cm	" 2.6cm	" 1.09cm	" 11.8 g	"	
39-60	2E-19	"	" 6.3cm	" 2.8cm	" 1.0 cm	" 16.1 g	"	
61	2E-22	"	" 6.9cm	" 3.9cm	" 1.0 cm	" 27.2 g	"	
62	3E-25	"	" 4.7cm	" 1.8cm	" 0.9 cm	" 7.1 g	"	
63	3F-01	"	" 6.1cm	" 1.8cm	" 0.7 cm	" 7.6 g	"	
64	3G-11	"	" 3.6cm	" 1.8cm	" 0.8 cm	" 4.2 g	"	
65	2F-12	"	" 4.4cm	" 2.6cm	" 0.7 cm	" 6.2 g	"	
66	2G-16	"	" 4.8cm	" 2.4cm	" 1.0 cm	" 11.6 g	"	
67	2E-13	"	" 5.9cm	" 1.6cm	" 0.7 cm	" 6.3 g	"	
68	3E-11	Ⅲ	" 7.9cm	" 2.5cm	" 1.19cm	" 19.7 g	"	
69	3E-03	Ⅱ	" 10.9cm	" 4.8cm	" 1.1 cm	" 66.1 g	"	
70	2E-22	"	" 8.1cm	" 2.9cm	" 1.4 cm	" 34.0 g	"	
71	2F-24	Ⅲ	" 3.9cm	" 2.0cm	" 1.0 cm	" 6.3 g	"	
72	3E-11	"	" 6.1cm	" 1.1cm	" 0.7 cm	" 5.0 g	"	えぐり有

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計測値				分類	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ		
39-73	2E-14	Ⅲ	4.9cm	1.0cm	0.59cm	2.8 g	石錐	
74	2F-23	"	4.8cm	0.8cm	0.48cm	1.9 g	"	
75	3F-23	Ⅱ	4.4cm	0.9cm	0.55cm	2.1 g	"	
76	2E-14	"	3.5cm	2.8cm	0.65cm	7.1 g	"	
77	3F-14	"	2.2cm	2.7cm	1.05cm	5.6 g	スクレイパー	ラウンドスクレイパー
78	3F-23	"	2.5cm	3.0cm	1.1 cm	8.0 g	"	"
79	2E-03	"	3.6cm	3.5cm	1.05cm	13.4 g	"	"
40-80	2E-18	Ⅱ	9.2cm	6.9cm	1.4 cm	94 g	"	
81	3E-17	Ⅲ	11.6cm	4.6cm	2.3 cm	193 g	石斧	
82	2E-05	Ⅱ	7.8cm	3.7cm	1.9 cm	100 g	"	
83	2E-19	Ⅲ	9.6cm	4.2cm	1.5 cm	100 g	"	
84	2F-24	Ⅱ	15.8cm	6.4cm	3.1 cm	520 g	"	
85	2F-06	"	9.5cm	4.2cm	1.7 cm	107 g	"	
41-86	3E-23	"	7.1cm	4.2cm	1.1 cm	55 g	"	
87	4F-23	Ⅲ	11.9cm	5.0cm	2.5 cm	230 g	"	
88	2F-25	Ⅱ	11.6cm	4.3cm	1.59cm	136 g	"	
89	3E-01	"	6.3cm	3.5cm	1.15cm	46 g	"	
90	2E-13	"	11.6cm	4.4cm	2.5 cm	230 g	"	
91	2E-15	"	14.7cm	6.3cm	3.2 cm	560 g	"	
42-92	2F-11	"	19.4cm	4.5cm	4.4 cm	260 g	魚形石器	
93	9F-19	V	(7.1)cm	(2.5)cm	(1.3)cm	27.5 g	"	
94		Ⅱ	(6.9)cm	4.1cm	4.3 cm	155 g	"	
95	第1トレンチ	"	(7.8)cm	3.6cm	3.5 cm	72 g	"	
96	3F-06	"	16.3cm	9.0cm	5.8 cm	890 g	砥石	
97	3E-04	Ⅲ	(7.6)cm	7.4cm	2.0 cm	160 g	"	
43-98	3F-02	"	12.8cm	6.5cm	2.3 cm	295 g	敲石	
99	3E-03	"	14.4cm	5.0cm	3.43cm	380 g	"	
100	2E-20	"	(11.8)cm	7.5cm	10.0 cm	275 g	"	
101	2E-20	"	(9.5)cm	5.3cm	3.8 cm	190 g	砥石	
44-102	4E-08	"	20.8cm	6.5cm	5.6 cm	1070 g	"	
103	3E	"	18.8cm	17.0cm	14.2 cm	4500 g	茶臼	
104	8G-20	Ⅲ	3.5cm	2.6cm	0.4 cm	5.5 g	垂飾	
105	3E-12	Ⅱ	2.7cm	2.8cm	0.2 cm	2.6 g	三穴垂飾	
106	3E-19	"	(3.5)cm	(1.6)cm	(0.5)cm	3.8 g	装身具	
107	6E-19	U	2.7cm	2.5cm	0.9 cm	3.1 g	"	
108	3E-14	Ⅱ	4.5cm	4.4cm	1.1 cm	13.8 g	垂飾	
45-109	9F-14	V	10.1cm	9.7cm	3.2 cm	335 g	環状石斧	
110	2E-22	Ⅱ	(6.2)cm	(6.5)cm	2.1 cm	40 g	紡錘車	
111	8H	U		6.8cm	高さ 1.9 cm		Ⅶ	
45-112	11F-U	V	長さ 11.2cm	幅 0.92cm	厚さ 0.4cm	重さ 6.4 g	刺突具	中柄?
113	攪乱	攪乱	(14.0)cm	1.1 cm	0.7cm		歯ブラシ	海獣骨
114	2F	Ⅱ	(5.0)cm	2.1 cm	0.9cm		銚頭	キテ・海獣骨
115	5F-27	"	(4.2)cm	1.0 cm	0.6cm		銚頭	キテ・鹿骨?
46-1	4G-20	V			器高(12.7)cm		Ⅵ	酒徳利

報告書掲載遺物一覧

図 No	出土グリット	層位	計 測 値				分 類	備 考
			口径 (9.8)cm	底径 4.1cm	器高 2.2 cm			
46-2	4G	V	口径 (9.8)cm	底径 4.1cm	器高 2.2 cm		VI	
3	8G	II	" (10.5)cm	" 4.0cm	" 5.4 cm		"	
4	9F-16	V	" (8.3)cm	" 3.3cm	" 4.5 cm		"	
5	4H	"	" (10.2)cm	" 3.8cm	" 5.7 cm		"	タコ唐草文
47-6	8F-15	"	" (13.6)cm	" 7.2cm	" 3.0 cm		"	
7	9G-06	"	" (13.7)cm	" 6.0cm	" 4.6 cm		"	
8	9G-11	III	" (14.2)cm	" (9.5)cm	" 3.4 cm		"	
9	4G	V	" (15.0)cm	" (9.0)cm	" 4.3 cm		"	
48-10	9F-14, 15	"	" 9.7cm	" 4.1cm	" 5.8cm		VII	
11	9F-15	表採	" (14.4)cm	" 7.0cm	" 4.0cm		"	
12	9F	U	" (14.7)cm	" 9.0cm	" 4.0cm	胴径	"	
13	4H	V	" (7.5)cm		" (10.4)cm	" (14.7)cm	"	相馬焼?
49-14	9F-15	"	" 5.9cm	底径 6.8cm	" 23.8 cm	" (14.8)cm	"	
15	9G-21	"		" 7.2cm	" (20.5)cm	" (14.6)cm	"	
16	7G-04 8G	"	口径 (9.6)cm	" (9.0)cm	" 18.5cm	" (14.8)cm	"	
17	9F-24	"	" (15.8)cm		" (10.8)cm		"	
18	9F-14	"		底径 (7.2)cm	" (10.8)cm	胴径(15.8)cm	"	
19	6H	"		" (7.6)cm	" (14.8)cm	" (14.6)cm	"	
20	9G-02 他	"		" (7.0)cm	" (11.0)cm	" (15.7)cm	"	
21	8G	U		" (7.7)cm	" (13.5)cm	" (15.0)cm	"	
22	不明	V		" (7.6)cm	" (6.2)cm		木製品	浮子 (アバ)
50-1	8G-③	"	長さ 34.4cm	幅 10.4cm	厚さ 5.5cm		"	" 屋号有
2	13G-04	"	" 43.7cm	" 11.0cm	" 1.4cm		"	"
3	11I-16	"	" 30.5cm	" 6.5cm	" 2.7cm		"	"
4	SM-5 10F-④	"	" 38.6cm	" 5.3cm	" 1.3cm		"	"
5	SM-5 10F-⑤	"	" 38.4cm	" 5.0cm	" 1.2cm		"	"
51-6	12H-22	"	" 13.6cm	" 36.4cm	" 2.4cm		"	蓋
7	12G-14	"	" 11.3cm	" 31.6cm	" 2.2cm		"	"
8	9G-05	"	" 16.5cm	" 33.0cm	" 2.0cm		"	"
9	10G-11-②	"	" 10.3cm	" 33.0cm	" 1.9cm		"	"
10	11H-24	"	" 7.2cm	" 4.1cm			"	栓
52-11		U	" 25.0cm	" 15.4cm	厚さ 1.3cm		"	蓋
12	11H-24	V	" 44.4cm	" 7.5cm	" 1.8cm		"	ヘラ
13	7G-12	"	" 64.8cm	" 6.7cm	" 1.2cm		"	用途不明
14	11H-09	III	" 26.4cm	" 1.9cm	" 0.7cm		"	"
15	12H-09	V	" 25.8cm	" 2.2cm	" 0.8cm		"	"
16	12G-18	"	" 28.7cm	" 1.9cm	" 1.2cm		"	串
53-17		U	" 37.4cm	" 5.2cm	" 2.0cm		"	用途不明
18	11F-2	V	" 38.2cm	" 11.3cm	" 1.3cm	重さ 145 g	"	ヘラ
54-19	12H-03	"	" 22.5cm	" 9.8cm	" 1.8cm		"	下駄
20		U	" 22.1cm	" 8.9cm	" 2.1cm		"	"
21	11H-15	V	" 21.3cm	" 9.1cm	" 3.6cm		"	"
22	11J-44	"	" 19.2cm	" 9.0cm	" 3.2cm		"	"
23	13G-03	"	" 16.1cm	" 8.8cm	" 3.1cm		"	"
24	13G-03	"	" 16.4cm	" 8.8cm	" 2.9cm		"	"

第IV章 まとめ

大川遺跡では縄文時代晩期から続縄文時代の墓坑群が主体となっていたが、対岸の入舟遺跡はまったく様相が異なり生業をしめず遺跡であることが判明した。

地形的には川の蛇行の背の部分にあたり土地が削り取られる場所となっていて、護岸が作られた理由も理解できるところである。

遺跡はIV層においては礫層で無遺物層である。

Ⅲ層下部から遺物の出土がある。縄文時代の中期後半から後期初頭にかけての遺物が多く、天神山式、北筒式、余市式土器などで遺構は確認できなかった。

Ⅲ層からⅡ層下部にかけては続縄文時代の恵山式、後北式（江別式）土器が見られる。恵山式の遺構として貝塚、竪穴住居跡があり、貝塚は当時の生業を知る上で重要である。

発掘区の関係で全面を調査できなかったが、道南の恵山文化とほぼ同様な遺物が出土している。

石器については整った二等辺三角形の有茎石鏃が主体となり、無茎石鏃、石錐、スクレイパー類、蛤刃の磨製石斧、魚形石器がある。また、伴出が明確ではないが環状石斧もこの時期のものと思われる。

魚形石器は恵山文化の特徴的なものであり、貝塚と包含層から出土している。通常はスレート製であるが、安山岩や砂岩を利用して製作され、先端の鼻部分が幅広の面に平坦部を作出している傾向がある。形態は類似するが材質や加工などから当地で製作されたものであろう。

骨角器については完形のものはないが、使用して破損したものである。動物形の骨製品は日本海側では初めてのもので装飾を持つ刺突具ではないかと思われる。

銛頭は恵山型に相当し、尾部が分かれ閉窩式のもので、燕尾形は見られなかった。この時代の資料としてフゴッペ洞窟の出土資料があるが、開窩式で有溝を有する点で大きく異なっている。

針は非常に細いもので、先端部にくびれを持つことは恵山貝塚のものと類似する。

土器については恵山Ⅱ式に相当し、頸部がやや長いこととくびれが少ないことから後半に属すると考えられる。

貝塚に見られる墓坑は改葬といえるもので、対岸の大川遺跡の恵山文化の墓坑群のありかたと比較すると異質である。Ⅱ層は続縄文時代後半の北大式～擦文時代にかけての文化層及び近世・近代のものである。

遺構として擦文時代前半の平行沈線を有する土器で住居の形態は方形で竈をもつものが1軒のみ確認された。対岸の大川遺跡では多数の擦文時代の住居がみられることから、両岸に擦文時代の集落が形成されていたことが推測される。近世・近代にかけては貝塚、石組炉、護岸の石垣などがある。

貝塚は河岸に捨てられているもので伊万里焼（有田）の酒徳利、東北諸窯の焼酎徳利、漆器、耳飾り、コンプラ瓶などが見られる。

アイヌ民族が使用したのものとしてシントコ（行器）と呼んでいる漆器の脚部と金具が出土している。またニンカリ（耳飾り）と呼ぶガラス玉を付したのも出土している。通常はシントコを含めた漆器については家屋の奥に宝物として並べて、大切に保管されている

ものであるが、この地ではその価値が早くから失われたのだろうか。さらに骨角器では銚頭（キテ）中柄、針入れ、針、エイ尾などがある。

銚頭（キテ）は銅板を着装しており、未成品もⅡ層から出土していることから、この場所で製作されていたことがわかる。

針入れは非常に細い鳥管骨を利用しており、文様が彫刻されている。

エイ尾は猛毒をもつと言われ、狩猟、漁労時に使用した可能性がある。

コンプラ瓶は幕末に長崎から海外向けに輸出した日本酒や醤油をいれた染め付けの容器であり、日本では北海道内の幕末頃の遺跡で時折発見されている。

近世において蝦夷地がどのように見られていたかを知るための一資料といえるものである。

この貝塚を残した人々は和人なのかアイヌ民族なのかは常に考える問題であり、当地が早くから、アイヌ民族が和人の生活様式を取り入れた可能性もある。

それは、中世以降の北海道史を見る場合には必要な視点といえるであろう。

この川の上流約1kmの左岸の舌状台地にはかつてフルカチャシと呼ばれた天内山遺跡がある。ここからは続縄文時代から擦文時代にかけての墓坑群とともに近世の貝塚が発見されており、陶磁器や金属器が出土している。

このチャシは寛文9年（1669）のシャクシャインの戦いの砦と推定されているものであり、大川・入舟遺跡との関連も今後追及してみることも必要である。

石組炉は1つのもの、2つ一対のものがある。余市地方はニシン漁がさかんであるため大量の粕を必要とし、本州の作物肥料として利用されたことは周知の事実であるが小型であるため雑魚煮・湯で蛸などの使用も考えられるだろう。

構築についてはⅢ層を掘こんだ後に円礫を積んで粘土で固めたもの、角礫をたてに並べて粘土で固めたものがあり、底面は固く、木炭層と焼土が互層となっている。

時代については判然としないが、貝塚を切って構築されているもの、埋め立て以前であることや聞き取りなどから明治～大正時代頃のものとして推定したい。

明治時代の遺物として歯磨容器が出土しており、埋め立て土出土ではあるが骨製歯ブラシとの組み合わせを想像すると興味深い。

以上のようにこの地は縄文、続縄文、擦文時代の後に空白があるものの近世・近代になって再び土地利用が行われている。

現在はコンクリートブロックの護岸であるが、その昔は大勢の人々が汗を流しながら石積みをしたことだろう。それは川の蛇行による浸食と土地利用者との悪戦苦闘の歴史を物語るものであり、余市町の中央を流れる大川が交通や生活の場において太古から人々の生活の上で重要であった証拠とも言えるだろう。

参考文献 (年代順)

- 河野 広道 1959 「北海道の土器」『郷土の科学』23
- 大場 利夫他 1961 『上ノ国遺跡』上ノ国町教育委員会
- 桑原 護 1966 「北筒式土器」『考古学雑誌』51-4
- 余市町教育研究所 1966 『余市漁業発達史～余市郷土史』1
- 竹田 輝雄 1969 「北海道」『新版考古学講座』3
- フゴッペ調査団編 1970 『フゴッペ洞窟』
- 名取 武光 1970 「網と釣の覚書」『北方文化研究報告』15
- 峰山 巖他 1971 『天内山』余市町教育委員会
- 高橋 正勝 1972 「北海道における縄文時代中期の終末」『北海道青年人類科学研究会会誌』9・10
- 海保 嶺夫 1974 『日本北方史の論理』
- 松下 亘 1978 「焼酎徳利について」『北海道開拓記念館研究年報』6
- 1978 「北海道に現存する異色徳利について」『物質文化』30
- 萱野 茂 1978 『アイヌの民具』
- 加藤 邦雄 1980 「縄文文化後期・晩期」『北海道考古学講座』
- 樋口 英夫他 1980 『日本のにしん漁～樋口英夫写真集』
- 高橋 和樹他 1981 『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会
- 松下 亘 1981 「駄知産三平皿について」『北海道開拓記念館研究年報』9
- 加藤 晋平他 1982 『続縄文・南島文化～縄文文化の研究』6
- 木村 英明 1982 「骨角器」『縄文文化の研究』6
- 村越 潔 1983 『亀ヶ岡文化』考古学ライブラリー18
- 古泉 弘 1983 『江戸を掘る～近世都市考古学への招待』
- 北海道開拓記念館監修 1993 『北海道の民具』
- 千代 肇 1984 『続縄文文化』考古学ライブラリー25
- 1984 『続縄文時代の生活様式』考古学ライブラリー29
- 北海道開拓記念館 1984 『第25回特別展 アイヌの装い』
- 石附喜三男 1984 「擦文式土器の編年的研究 『北海道の研究』Ⅱ
- 今田 光夫 1986 『ニシン文化史』
- 大橋 康二監修 1988 『古伊万里 別冊太陽』日本のこころ63
- 宇田川 洋 1988 『アイヌ民族成立史』
- 大島 直行 1988 「北海道続縄文の魚撈具について～恵山式銚頭について」『考古学ジャーナル』295
- 乾 芳宏他 1998 『大谷地貝塚』余市町教育委員会
- 乾 芳宏 1998 『登川右岸遺跡』余市町教育委員会
- 江坂 輝弥・渡辺 誠 1988 『装身具と骨角製漁具の知識』
- 種市 幸生他 1989 『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 大竹 憲治 1989 『骨角器』考古学ライブラリー53
- 吉岡 康暘 1989 『日本海域の土器・陶磁(中世編)』

- 横山 英介 1990『擦文文化』考古学ライブラリー59
- 野村 崇 1992「積丹半島における考古学研究の進展と遺跡の概況」『北海道開拓記念館研究報告』12
- 上野 修一 1992「北海道における天王山式土器について」『東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 大橋 康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55
- 森 秀之 1993「北海道の遺跡から出土した金属煙管の実年代」『北海道考古学』29
- 岡田 淳子他 1993『1992年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
1994『1993年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
1995『1994年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
- 中川 裕 1995『アイヌ語辞典』
- 田島 佳也 1995「場所請負制後期のアイヌの漁業とその特質」『前近代の日本と東アジア』
- 佐藤 智雄 1996「能戸川コレクション骨角器について」『市立函館博物館研究紀要』6
- 高瀬 克範 1996「恵山文化における魚形石器の機能・用途」『物質文化』60
- 鈴木 靖民編 1996『古代蝦夷の世界と交流～古代王権と交流』1
- 大橋 康二監修 1997『染付の粹 別冊太陽』骨董をたのしむ18
- 乾 芳宏 1998「恵山文化の北方伝播について」『列島の考古学』
- 石川 直章 1998「回転式銚先再考」『時の絆～道を辿る』
- 銀貨編集部編 1999『印判の愉しみ』親しい染付
- 岡田 淳子他 1999『入舟遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
- 田端 宏 1999「ヨイチアイヌの自分商売－漁業手配仕来書上」『北海道史研究協議会』64
- 高橋 明雄 1999『鯨～失われた群衆の記録』
- 永井 秀夫他 1999『北海道の百年』
- 青野 友哉 1999「大洞～恵山式土器の墓と副葬品」『海峡と北の考古学』日本考古学協会1999年度釧路大会資料集
- 岡田 淳子他 2000『大川遺跡における考古学的調査』I 余市町教育委員会

付 編

付 編 1

入舟遺跡の角胴について

余市水産博物館 浅野 敏 昭

はじめに

平成11年度入舟遺跡発掘調査において、魚肥製造用の圧搾器の一部分である搾胴（角胴）が出土した。小稿では近世から近代まで北海道の代表的な産業であった鯨漁においてその主たる産品であった魚肥を製造するために用いられた圧搾器についてその用途・形式の変化について述べたい。

鯨粕利用の歴史的経緯

近世において商品作物用の肥料として素乾状態の干鰯が広く利用されていたが、西日本を中心とした地域では蝦夷地からもたらされた胴鯨と呼ばれる身欠鯨製造の副産物（鯨の腹側部・背骨部）が利用されるようになった。

これは近江商人によって開発された蝦夷地・京阪市場間の輸送路上に、畿内において展開された藍・綿花などの肥料として胴鯨や鯨粕などの鯨を用いた魚肥が注目され流通されたこと、その販路が拡大し、需要に応えるかたちで漁法の大規模化・改良が進んだことによるものと考えられる。

鯨漁は当初和人地のみ、漁法も刺網に限ったものであったが、和人地の薄漁による漁場の北上と、大網の使用が雑魚漁名目ではあるが実質的に許可されたため急激に発展し、場所請負人による資本の投下・新技術の導入が行われ、北海道における代表的な産業となった。明治期に入って鯨漁は引き続き活況を見せ、明治20年代には徳島県下を中心とした葉藍栽培業の勃興と開拓使の鯨搾粕製造の奨励という更なる追い風が吹いた。

この傾向は魚肥が石灰や化学肥料に転換されるまで続き、鯨粕を始めとする魚肥は鯨産品の中心的な位置を占めていた。

余市地方においては、近世末には運上家（屋）を中心に大網を使用した大規模漁を行い、食用の身欠鯨、肥料としての鯨粕などの鯨製品の製造加工を行っていた。安政4（1857）年におけるヨイチ場所の産物の報告中に身欠と並んで「胴鯨」、「鯨粕」、「笹目」、「白子」といった鯨魚肥製品が見え（当巳年出産物書上、「御役人廻浦の節書上・諸覚 控」『余市町史第一巻資料編一』）、また文久2（1862）年には建網23放、笹網3放、鯨釜130個を使用し、鯨釜の内訳は運上家が83個、浜中と呼ばれた漁民は92個を使用し、この年は昨年比4個の鯨釜の増加を見せている。（与市御場所建網笹網員数書上、与市御場所鯨釜員数書上、「与市御場所役人廻浦の節報告」『余市町史第一巻資料編一』）

明治期になると流通機能や技術の発達により鮮魚の出荷量が増加の傾向を見せ、余市地方においては鯨粕より高価な身欠の製造にシフトさせる動きがあるものの、依然として漁獲された鯨の4割強が鯨粕、笹目粕、白子、胴鯨、鯨鱗といった肥料製品として出荷されていた。

鯧粕の製法と圧搾器（写真図版15参照）

鯧粕製造の工程は次のとおりである。漁獲された鯧を鯧釜と呼ばれる鉄製の大型の釜に入れ、海水と共に煮沸しその身を砕く。その後鯧を搾胴に移し入れ、梃子式あるいはジャッキ式の装置によって圧力を加え（写真1・写真5）、煮汁を搾り出し、粕玉（写真2）と呼ばれる搾粕と油に分離させる。搾胴から取り出された搾粕を干場へと運び、分割・粉碎し（写真3）、数日間乾燥させた後（写真4）、ムシロをかけて発酵させて鯧粕が完成となる。鯧粕は肥料として用いられ、煮汁から分離された魚油は同じく肥料あるいは工業用油脂として用いられた。

圧搾器の構造は原料魚を入れ圧搾する搾胴の部分と圧力装置からなり、搾胴はその形態から角柱型の角胴（図1）と円柱型の丸胴に大別され、また丸胴は木製と鉄製があり、鉄製丸胴は側面が開く開扉式に改良された。圧力装置も梃子式のものからキリンと呼ばれるジャッキ式のものに改良された。

圧搾器の種類については以下のとおりである。

① 槓桿（テコ）式圧搾器

圧搾器主要部は支柱・ロクロ・テコからなり、ロクロとテコとは直径3cm程度の縄で連結し、ロクロの回転によりテコが圧搾するものである。利点は絶えず圧力を加えることが出来、長時間徐々に圧搾し得ることである。欠点としては圧搾力が弱く操作しづらい点、広い設置面積が必要な点が挙げられる。搾胴部分は木製角型、高さ64cm、下部56cm平方、上部62cm平方で下部が上部に比して狭い。圧搾に要する時間は40～50分で、一回に使用する原料魚は約70貫（約260kg）である。

② 在来キリン（螺旋）式圧搾器

明治末期から昭和10年代まで北海道地方において広く使用される。四角に梁を組み天地の梁間に搾胴を設置、キリンによって搾胴の押蓋に圧力をかける方法をとる。操作が容易で、槓桿式に比して狭い面積で設置が可能である。欠点としては圧搾力が少なく、キリンの回転を中止すれば圧力がなくなる点である。この形式の圧搾器にも角胴が用いられるが、多くは木製丸胴で高さ60cm、上部径60cm、下部径69cmの規格は下部が広く、圧搾後搾胴を上へ抜いて粕玉を取り出すので、テコ式より操作が容易である。一回当たりの原料魚使用量は約50～60貫（190～230kg）である。キリン以外は自作が可能である。

③ 改良ジャッキ付キリン（螺旋）式圧搾器

水谷式とウロコ式の2つの形態が共に函館市内の製造所で製作される。形態は鉄製の丸型、搾胴の中央に鉄製の支柱を配し、ハンドルを回転して下部へ押し下げて圧搾するもので、圧搾後は開扉式の側面から粕玉を取り出す。前述の2形式に比較して圧搾力が強く、そのため油水が分離しやすい点、小型のため設置面積が狭く移動が容易な点、粕玉が取り出しやすい点が利点である。反面操作が煩雑で、価格は高価である。

このように圧搾器の形式は、テコ式から明治末期にはキリン式に改良され、昭和初期にはジャッキ方式による圧搾器が開発された。搾胴はテコ式とキリン式の当初段階においては木製角胴が用いられ、丸胴へと変わり、材質も木製から鉄製へと改良された。

圧搾器の使用状況

次に北海道日本海側において、実際に鯧粕製造用の圧搾器が使用された状況は如何なも

のであったのか、断片的な聞き取りの結果ではあるが紹介したい。

余市町在住の佐藤利雄氏のご教示によると、余市地方では「明治・大正期にはほとんどは木製角型（テコ式）であったが、昭和初期になって木製丸同型（キリン式）が一部に導入されるようになって、従来の木製角型も圧搾にはキリン式を採用するようになった。その後キリン式も改良され（改良ジャッキ付キリン）、丸胴型の搾り杵も鉄製丸胴に移行していった。以後ほとんどの漁場ではこれになっていった。

山臼町（現余市町港町）に在った罎（カクサン）猪俣漁場では番屋（大型の番屋、帳場、陸廻り、船頭等の役付き使用人や常雇の雑役使用人の詰所であり、漁期には季節漁夫が寝泊りをする）の建っていた周囲は広大な海産干場になっており、魚粕の原料の鯨を炊く、いわゆる鯨釜の設備は、この干場の東側に一列に設けられていた。鯨釜を据え付ける竈は地元の「湯内石」（凝灰岩）を使用した半地下式の積石作りであった。罎の竈は4基在ったように記憶している。最後まで残っていたこの設備は、昭和12年に鰯の大漁があった際に鰯を原料とした魚粕と魚油の製造のために利用された。」とのことである。

岩内町郷土館吉田吉就館長のご教示によれば、岩内地方では「明治後期から木製の丸胴が見られ、昭和初期になって鉄製の丸胴が使用された。昭和10年代後半になると鯨粕製造用の角胴は徐々に見られなくなるものの、昭和10年代においても角胴はスケソウ粕製造に使用された。岩内地方の漁場の道具には地元で製作されたものがあった。角胴と丸胴が平行して使用された時期があり、昭和30年頃まで鯨場の風景はあちこちに残っていた」とのことである。

浜益村郷土資料館土門勉氏のご教示によると、「浜益地方では大正10年頃には在来キリン式圧搾器の使用が見られた。始めは角胴が用いられ、キリンの装置はそのまま使用し、丸胴や角胴は浜益村で製作されず購入されたものであった」とのことである。

現在道内各地の博物館に展示あるいは保存されている圧搾器には前述した3つの形式に該当しない資料、例えば上部径と下部径が同じ寸法の「ずん胴」とも呼べる搾胴や、鉄材を併用した木製の開扉式丸胴などが写真資料あるいは実物資料として存在する。これらの漁場の道具は、船大工を始めとした地元職人の技術の成熟が、各地の諸道具の形態に独自化を進ませたものなのであろうか。吉田吉就氏のご教示からもそれを伺うことができる。

入舟遺跡出土の角胴

今回入舟遺跡において出土した搾胴は余市川左岸のかつての護岸と思われる石組構造の中に下部構造が欠損し、石が詰まった状態で出土したものであり、一見廃棄されたとも思える出土状態であった。また98年度入舟遺跡発掘調査区に2基、99年度には4基の自然石で組まれた魚粕製造用と思われる石組炉跡が検出され、廃棄されたとしても原位置からさほど移動したとは考えられず、余市川左岸が魚肥の製造場として利用された可能性は否定できない。

本資料は下部が欠損しているため高さ及び下部径は不明であるが、上部内径58cm、上部外径68.5cmの木製角胴である（写真6・写真7）。テコ式あるいはキリン式圧縮器に利用されたものであり、キリン式が後には木製丸胴を多く使用し、木製角胴自体も徐々に大型化していったことから、作成時期は明治後半期と考えられる。また98年度入舟遺跡発掘調査区の護岸の石組構造から明治10年代に発売された国内最初の練歯磨容器や、三平皿が出

土していることから護岸は明治期以降のものであり、前述の石組炉竈跡が小型で、焚口が様々な方位に開口していること、99年度同遺跡発掘調査区から刺網用の浮子（アバ）が出土したことから、それぞれが独立した小規模な刺網漁家の使用していた遺構であると思われる。入舟遺跡の立地する余市川左岸はかなり早い時期から長屋や銭湯といった建物が立ち並び、護岸がされていたことと併せて考えれば、それらの市街地が形成されるまで、つまり明治後半から大正期の間使用された遺構であろう。

最後に小稿に関してご教示を頂くなどお世話になった佐藤利雄、岩内町郷土館館長 吉田吉就、浜益村郷土資料館 土門勉、北海道開拓記念館 山田健の諸氏にお礼を申し上げる次第である。

参考文献

余市町教育研究所編	『余市郷土史 第1巻 余市漁業発達史』	昭和41年
余市町教育研究所編	『余市郷土史 第2巻 余市農業発達史』	昭和43年
余市町史編纂室	『余市町史第一巻資料編一』	昭和60年
北海道新聞社	『北海道の民具』	平成2年
大島幸吉	『魚粉と魚粕』	昭和13年
大阪水産物流通史研究会	『資料大阪水産物流通史』	昭和46年
松前町	『松前町史史料編第一巻』「松前蝦夷記」	昭和49年
北海道水産部	『北海道漁業史』	昭和32年

付 編 2

入舟遺跡貝塚出土金属輪の蛍光X線分析による調査結果

岩手県立博物館 赤 沼 英 男

入舟遺跡貝塚から出土した金属輪の蛍光X線分析結果について、以下に報告する。

1 分析資料

分析資料は、入舟遺跡続縄文時代恵山文化期に比定される貝塚¹⁾の土壌中より見出されたものである²⁾。金属輪の外径は約6φで、表面には土砂が固着しているものの、ところどころに青みがかかった銀灰色の金属光沢がみられた。同形状の資料は7点出土しており¹⁾、そのうちの1点が分析に供された。分析資料の外観を図1に示す。

2 分析方法

分析資料の表面に固着している土砂を除去した後、エチルアルコールに浸し超音波洗浄した。資料を十分に乾かした結果、クリーニング前に比べ銀灰色の金属光沢が一層増した。このようにして準備した資料を、99.99%純度のアルミホルダーの上に張ったポリプロピレンフィルムに乗せ、資料表面をポリプロピレンフィルムで固定し、試料ホルダーに装填した。最後に、30mmφマスクを装着し(図2)、真空下で蛍光X線分析に供した。蛍光X線の印加電圧・電流は50KV-50mA、分光結晶はL I Fである。

3 分析結果

蛍光X線分析結果は図3に示すとおりである。主成分はマンガン(Mn)および亜鉛(Zn)で、他に銅(Cu)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr)、およびチタン(Ti)が検出された。金属輪は亜鉛、マンガンにより製作されており、他に検出された元素はそれらに随伴する不純物と固着する土砂等の影響によるものと思われる。亜鉛が認識されるようになったのは、17世紀代といわれていることをふまえれば、この資料と検出遺構との関係を吟味する必要があると考える。

註)

- 1) 『入舟遺跡・大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会、1999年。
- 2) 余市町教育委員会 乾 芳宏氏からのご教授による。

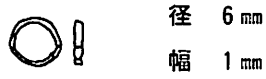
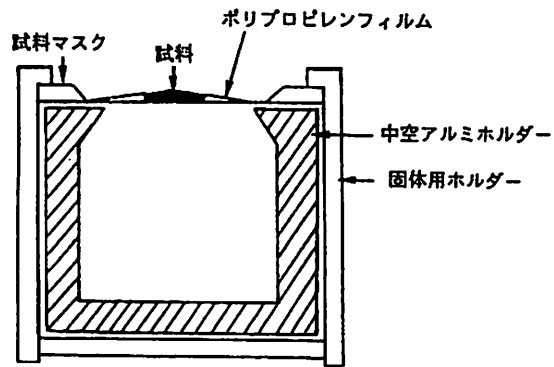


図1 金属輪の外観



対陰極 : Cr
印加電流・電圧 : 50KV-50mA
分光結晶 : LiF

図2 試料ホルダーの調整

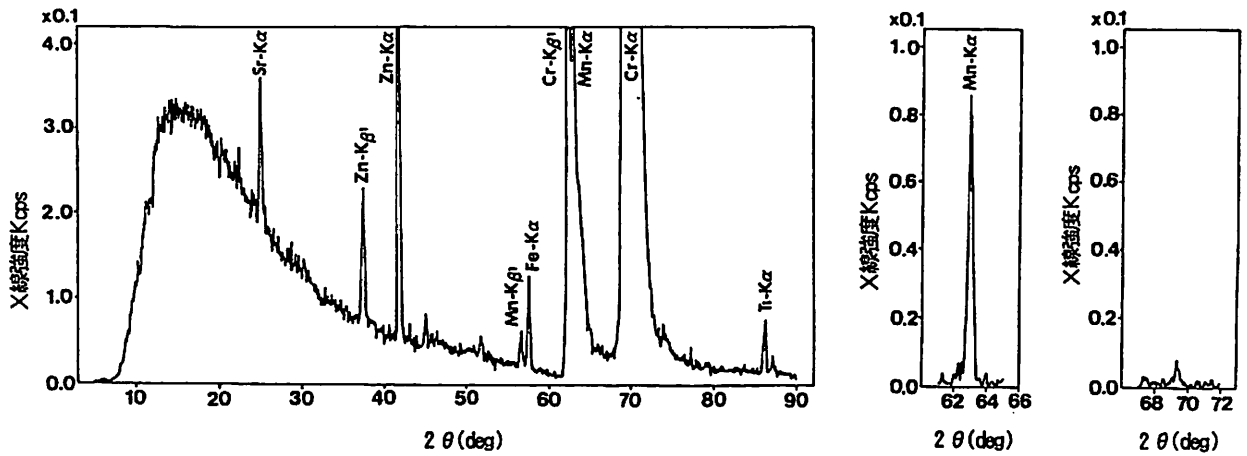


図3 蛍光X線分析結果

付 編 3

入舟遺跡貝塚（SM-1）出土の古人骨について

札幌医科大学 乗 安 整 而

出土した人骨は頭蓋、上肢、下肢、および体幹の骨が残存している。特に左手、および下腿の骨はよく保存されているが、計測は不可能である。骨盤を構成する骨はなく性別および年齢の判定は定かではないが、頭蓋のレリーフや縫合状態、乳様突起の大きさと形、四肢骨の形態や状態、さらに歯の咬耗の程度から20才前後の女性と推定される。

〔頭蓋〕

頭蓋は完全ではないが眼窩上縁と前頭鼻骨縫合より後方の頭蓋冠、左の側頭部、左の頬骨の眼窩部から上顎骨、左の大孔縁から後頭顆部、右の正円孔および卵円孔を含む蝶形骨大翼部、右の内耳孔を含む側頭骨錐体部および数片の骨が残存しているが、それぞれの接合は不可能である。

矢状、冠状縫合は複雑である。外板、内板ともに開離している。ラムダ縫合部は欠損している。この部での縫合骨および前頭縫合はみられない。眉弓および眉間の発達程度は弱い。眼窩上縁では右に眼窩上孔、左に前頭切痕を認める。

左の眼窩軸は水平に近い。左の梨状口下縁の状態は鈍角的である。鼻骨の平坦度等は不明。残存する左の側頭骨では、乳様突起は突出度が弱く、小さい。後頭骨が欠損しているので、上項線や外後頭隆起の発達程度は不明である。

頭蓋の計測は不可能ではあるが、側面観での前頭から頭頂後部にかけてのレリーフは女性的である。残存する頭蓋における形態小変異は特にみられない。

残存している左の上顎には小臼歯2本および大臼歯3本が揃っている。咬合面の咬耗度は弱い。Lovejoy and Colleagues の咬耗パターンを参照すると、咬耗の程度はB₂と判定される。

〔肩甲骨〕

右の関節窩の一部とそれに続く長さ8 cm、幅2 cm程の外側縁部が残存する。

〔鎖骨〕

右の鎖骨は胸骨端から約半分残存しており、肩峰端の一部も残存する。左は右とは逆に肩峰端から3/4が残存しており、胸骨端部はない。湾曲の程度は強くない。

〔上腕骨〕

右の骨体中央部15cmのみ残存。三角筋粗面の発達は強くない。左はない。

〔尺骨〕

右の上方1/3が残存している。しかし肘頭を含む滑車切痕の上部は欠損している。残存している滑車切痕での二分傾向や切痕内の小骨片はみられない。橈骨と関節する関節環状面は明瞭である。

〔手の骨〕

右手の骨は手中骨が2本残存している。左手の骨は手根骨と指骨の末節骨は欠損するが中手骨、基節骨、中節骨はすべて残存している。また左右の判別はできないが、第I指の末節骨が残存する。

〔大腿骨〕

右の骨体部が22cm程残存している。しかし後面の大部分が欠損しているため粗線の発達程度はわからない。また小転子部のみだけ残存。左は大腿骨頭、大転子および小転子を含む上端部と骨体下半部が残存しているが、骨体中央部よりの前面が欠損している。粗線の発達程度は不明である。他に骨体部が残存しているが接合できない。また大腿骨長の計測が不可能なので、推定身長は算出できない。

〔脛骨〕

右の脛骨は上関節面を含む内側顆からその下部、および内果部が欠損している。左は上端の前面と内果部が欠損している。他の骨に較べ保存状態が良好である。左右とも中央矢状径は28cm、中央横径は19cmで中央断面示数は67.9である。

〔腓骨〕

右の腓骨は完全に接合できないが、腓骨頭を含む上半部、骨体部および外果部が残存する。左も右と同様な状態であるが、外果部は欠損している。

〔足根骨〕

右の足根骨は距骨、踵骨、舟状骨および立方骨が無傷で残存する。左は距骨、踵骨および舟状骨が残存する。しかし舟状骨は一部は欠損している。

〔中足骨〕

右は1本、左は3本の中足骨が残存している。この他に左右が判定できない基節骨が1本残存する。

〔体幹の骨〕

胸骨の胸骨体がほぼ完全に残存する。胸骨柄はないが、胸骨体との骨癒合の形跡が認められない。剣状突起はない。

肋骨は左の肋骨頭や肋骨結節を含む後方の部分1本と中間部のみの1本が残存する。

脊椎では、環椎（第一頸椎）の横突孔を含む左右の外側部のみ残存する。右の横突起を欠く頸椎が1個残存。椎体部が欠損した胸椎、左の椎体部から椎弓にかけて欠損した腰椎がそれぞれ1個ずつ残存する。仙骨の一部も残存している。

写真図版



(北方向より)



(南方向より)

発掘の全景



護岸石垣状況



埋立土の土層断面



住居跡 (SH-3) の全景



集石 1 の全景



(SM-4)



(SM-5)

貝塚の遺物出土状況

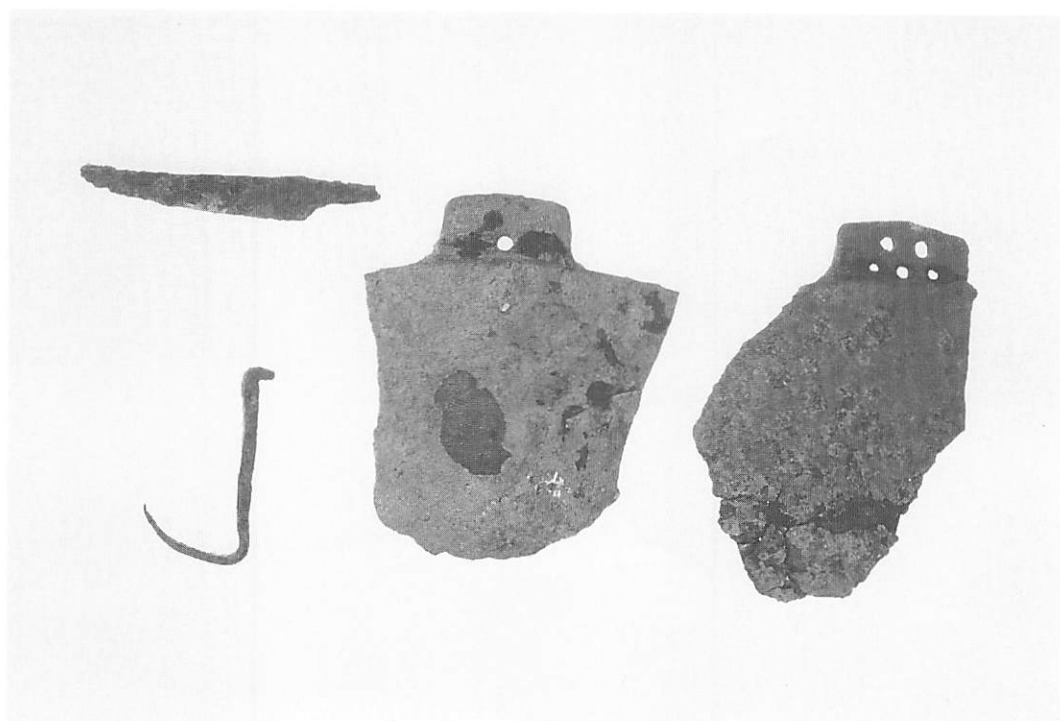
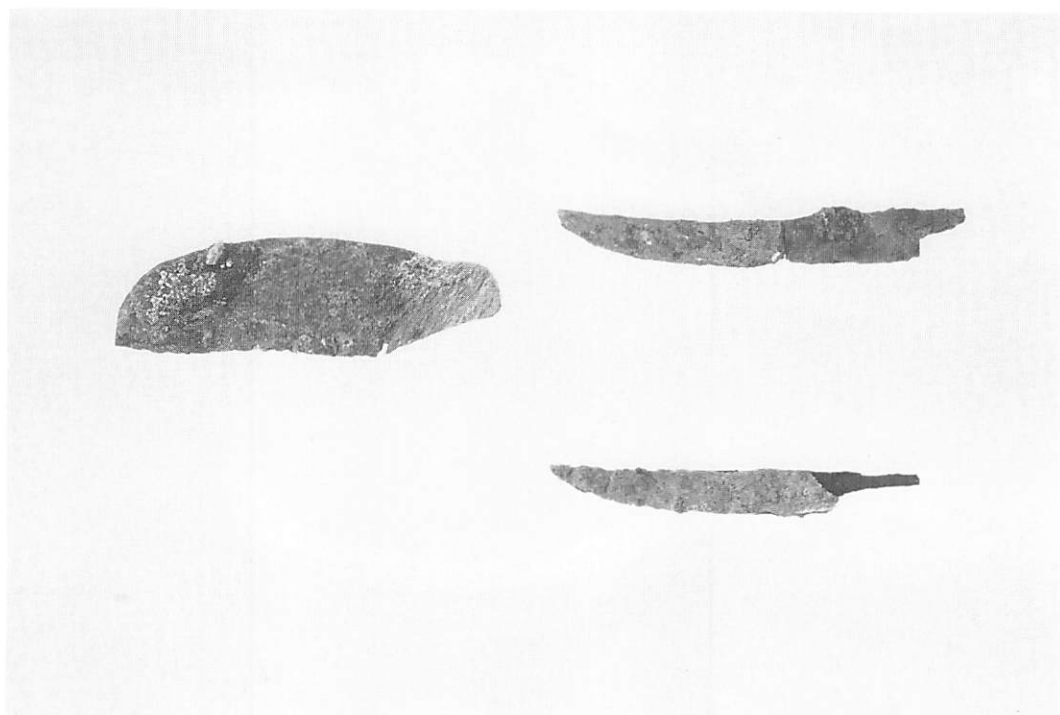


大形樽

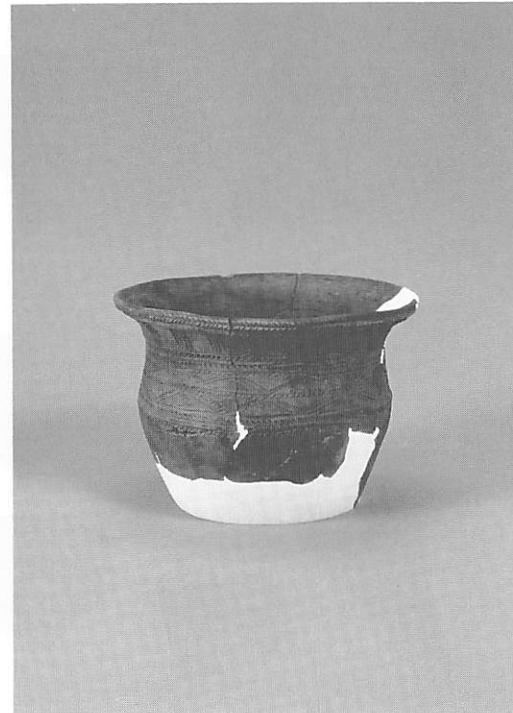


板材と木柱

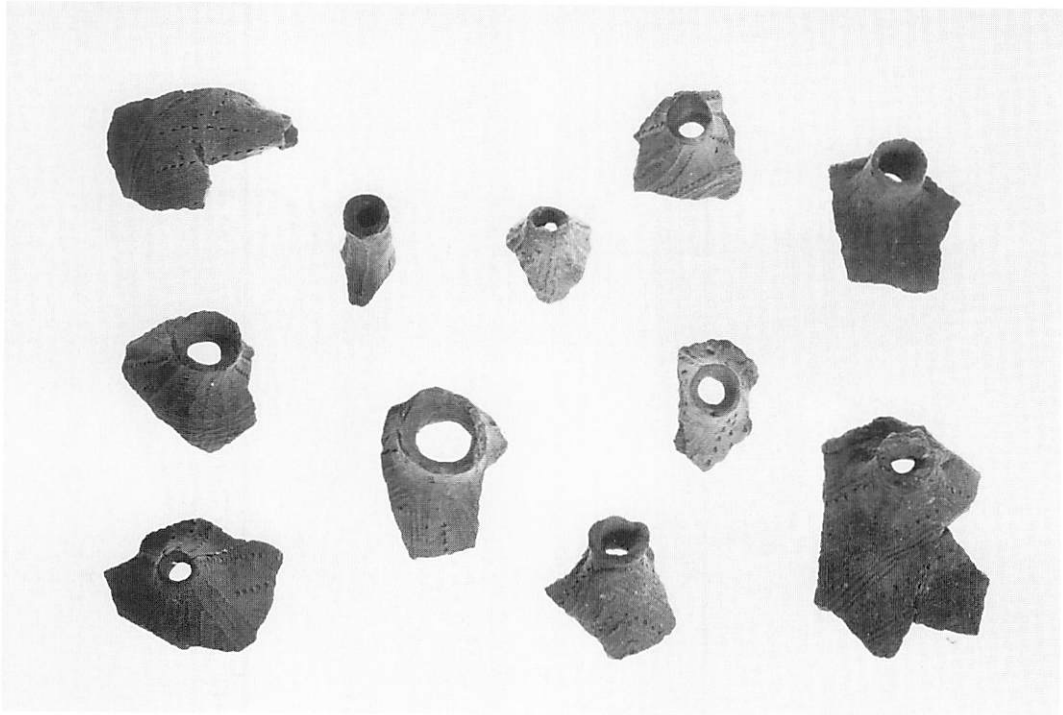
遺構・遺物の出土状況 (V層)



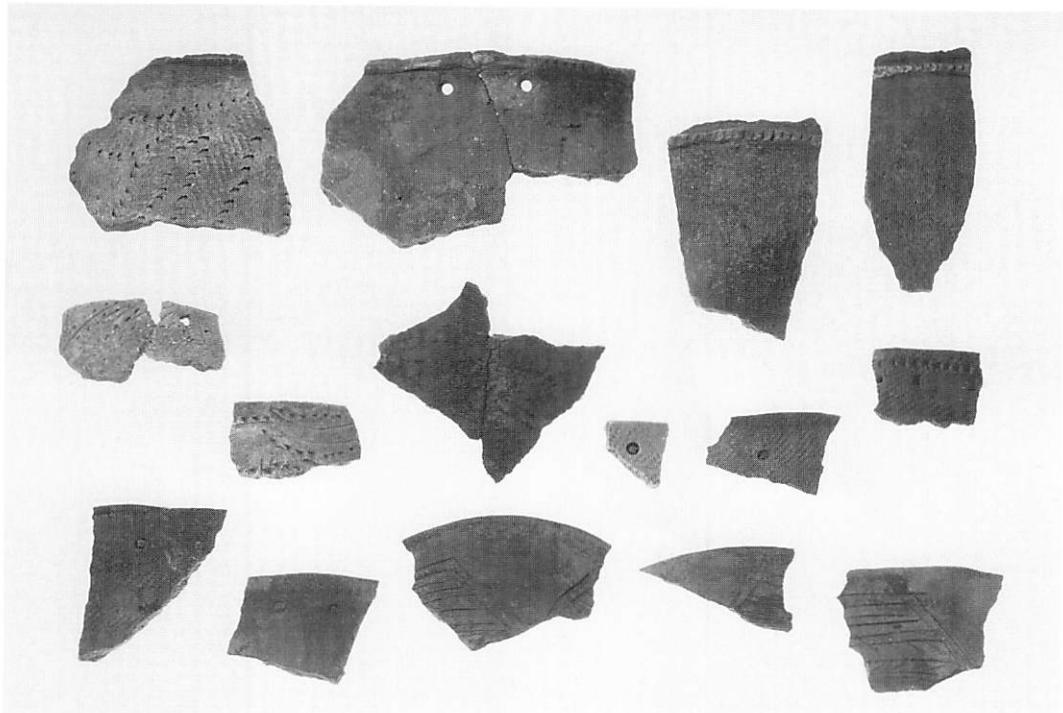
貝塚 (SM-4) 出土の遺物



包含層出土の土器

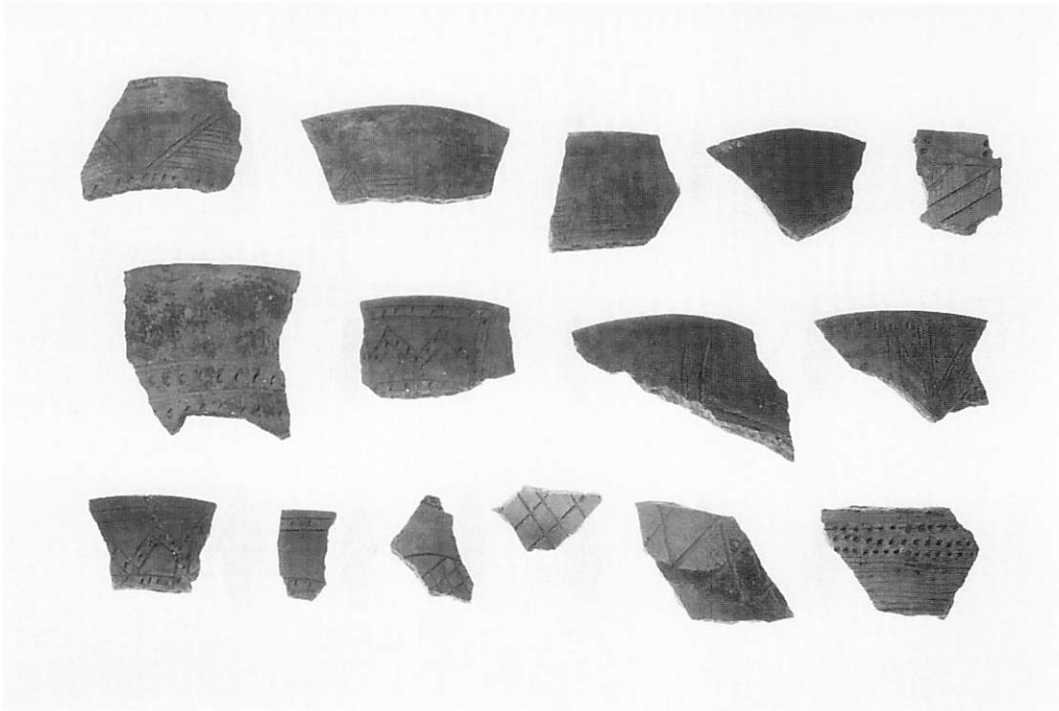


(第IV群土器)



(第IV～V群土器)

包含層出土の土器

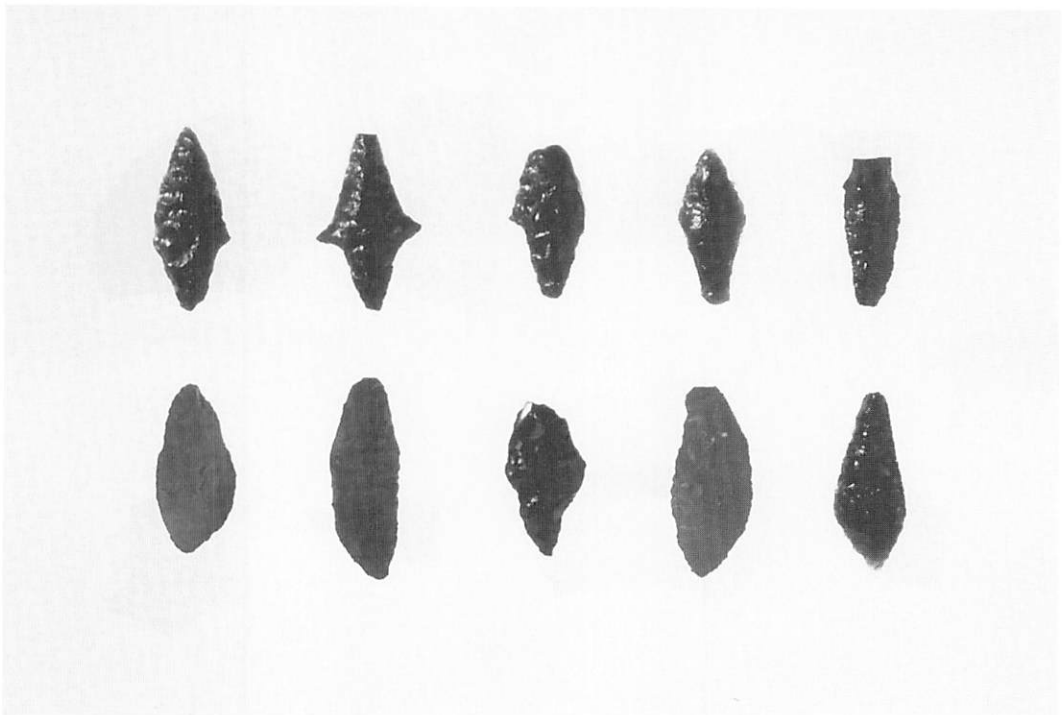
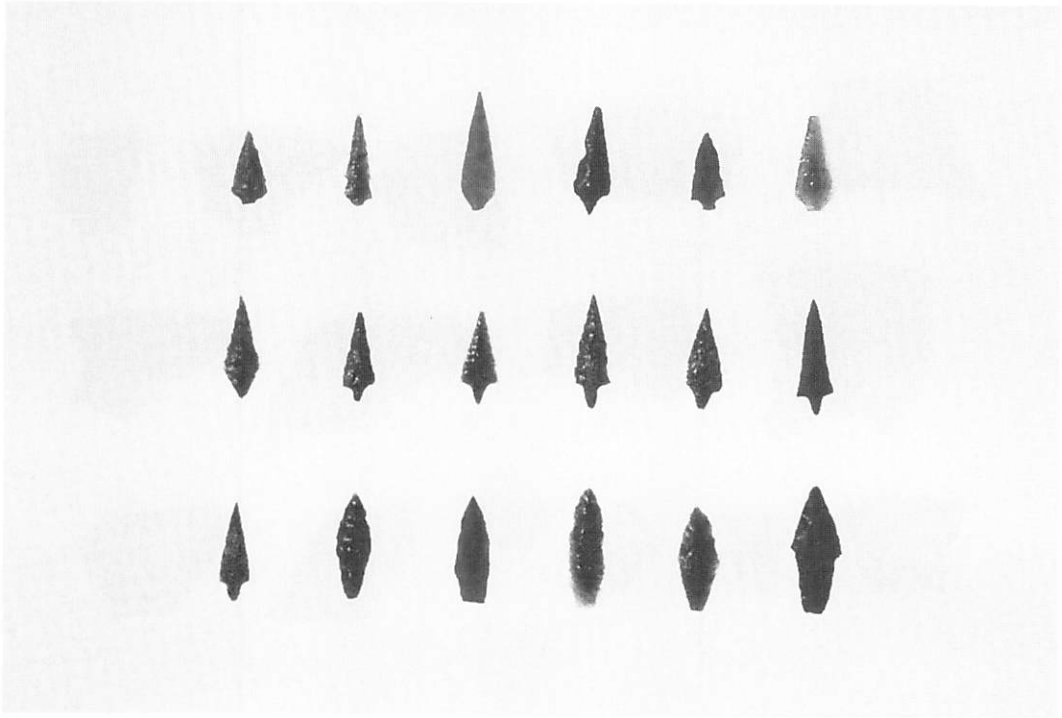


(第V群土器)

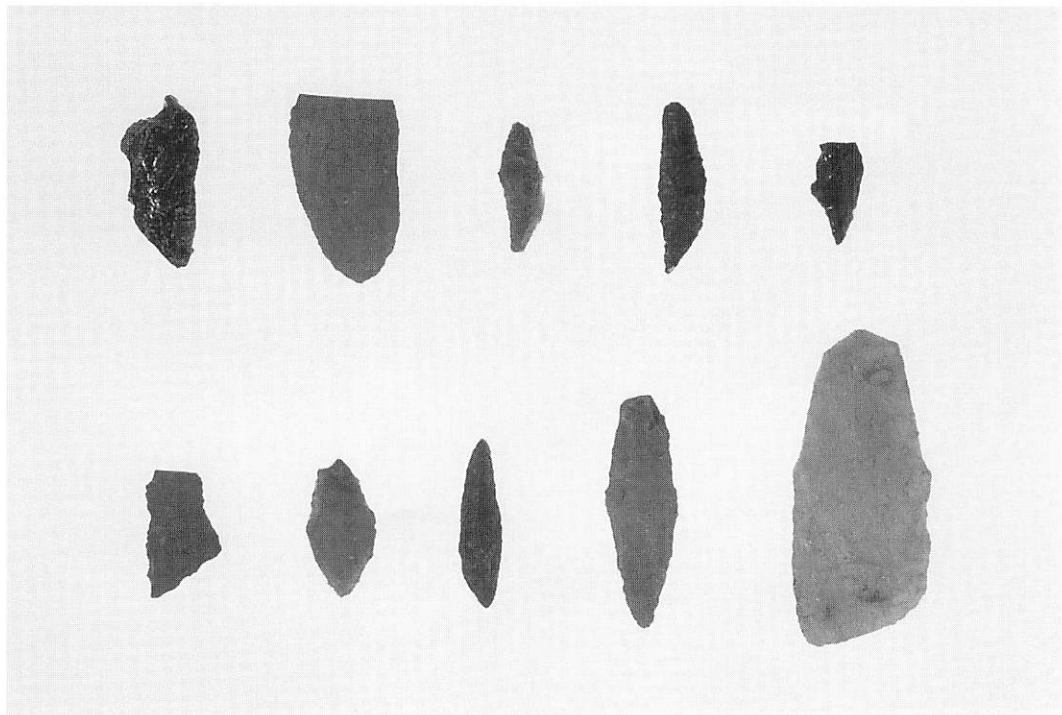
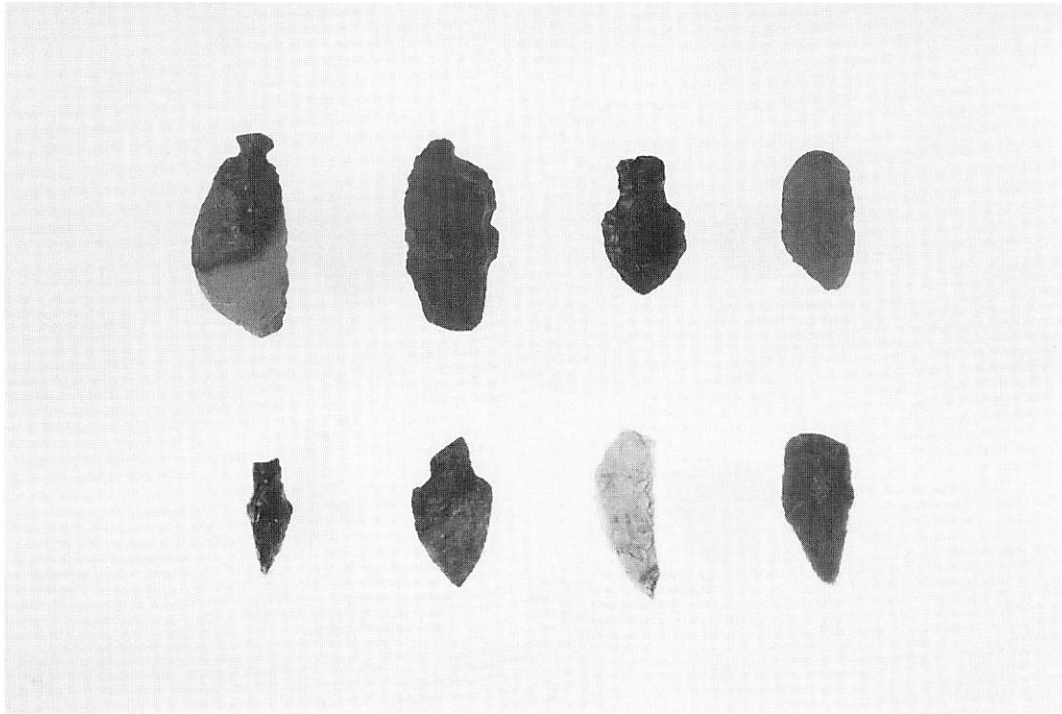


(第V群土器)

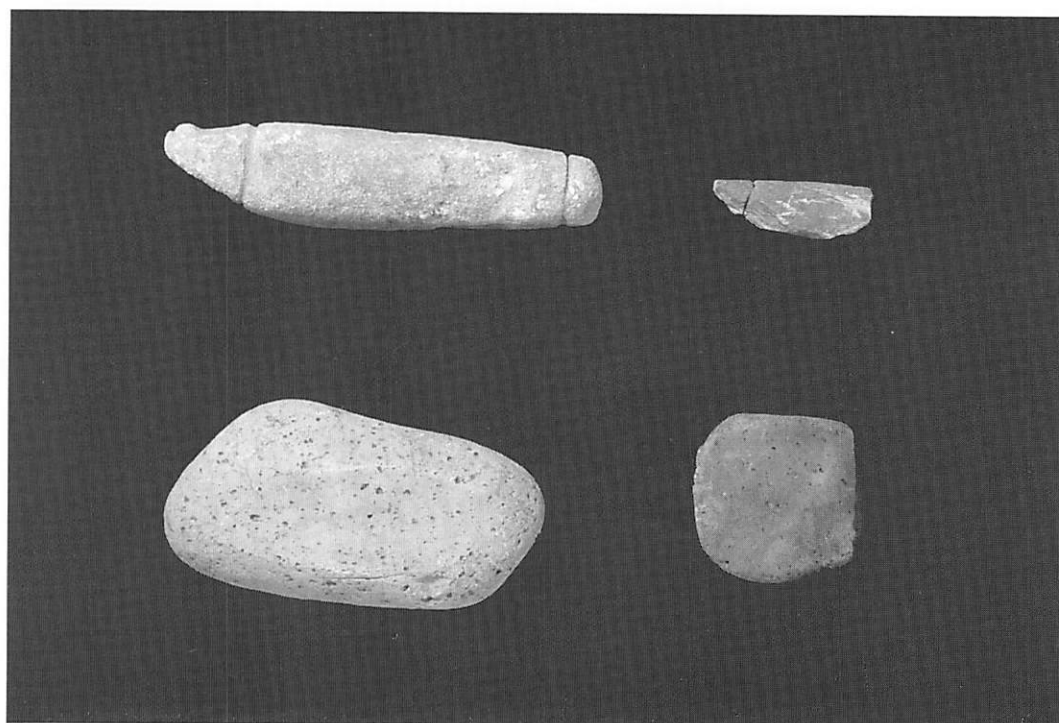
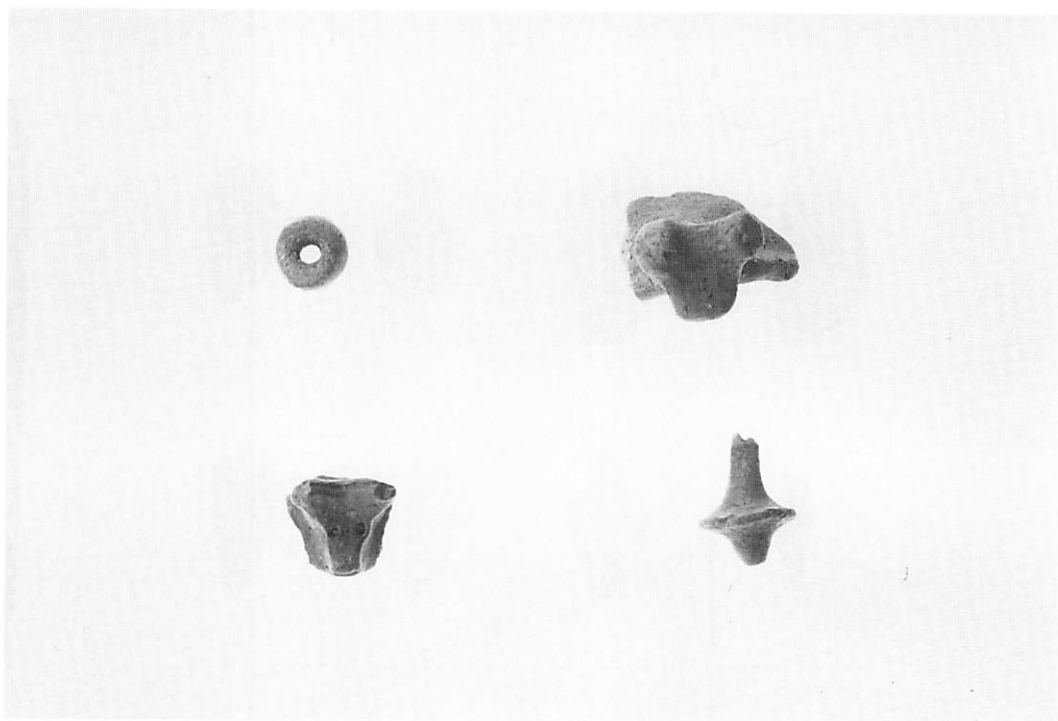
包含層出土の土器



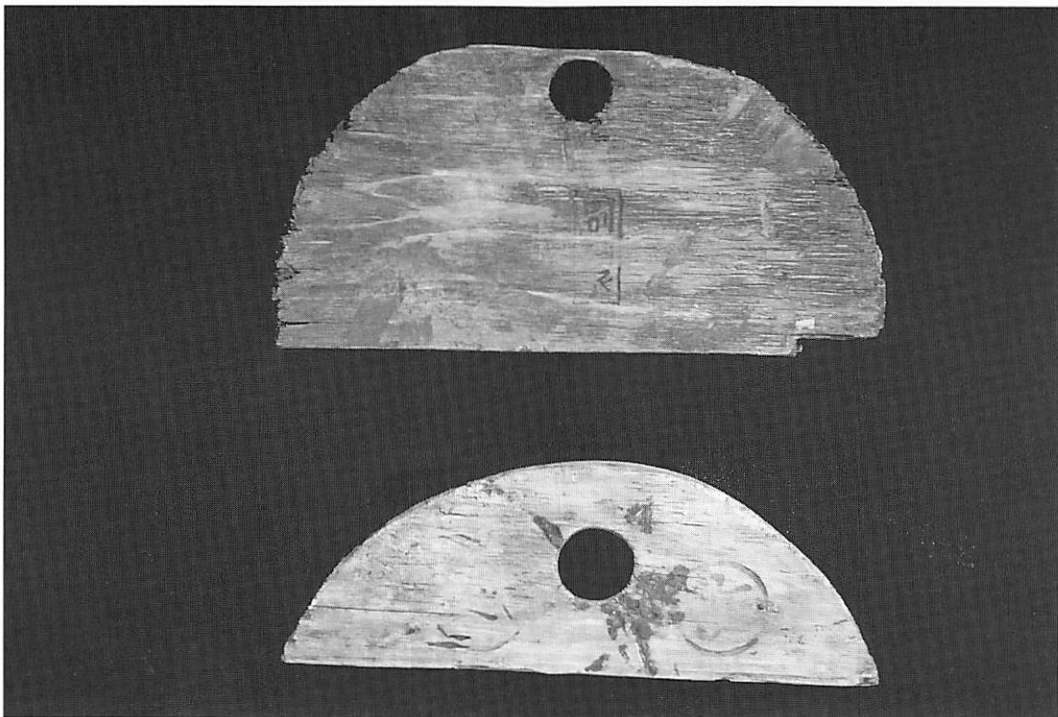
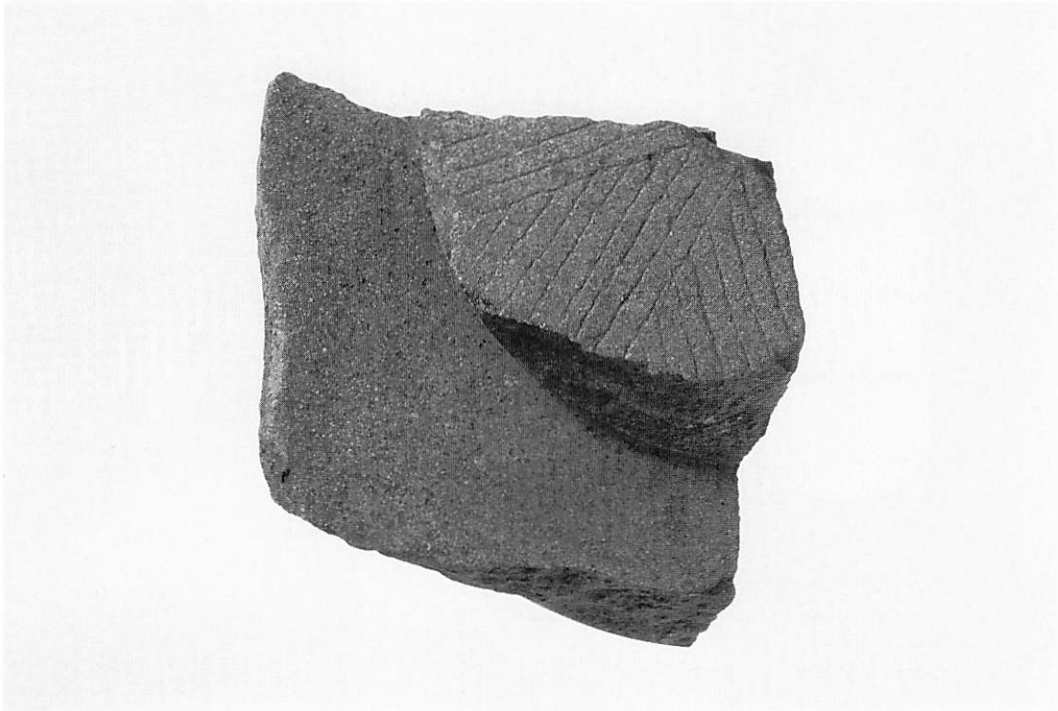
包含層出土の石器



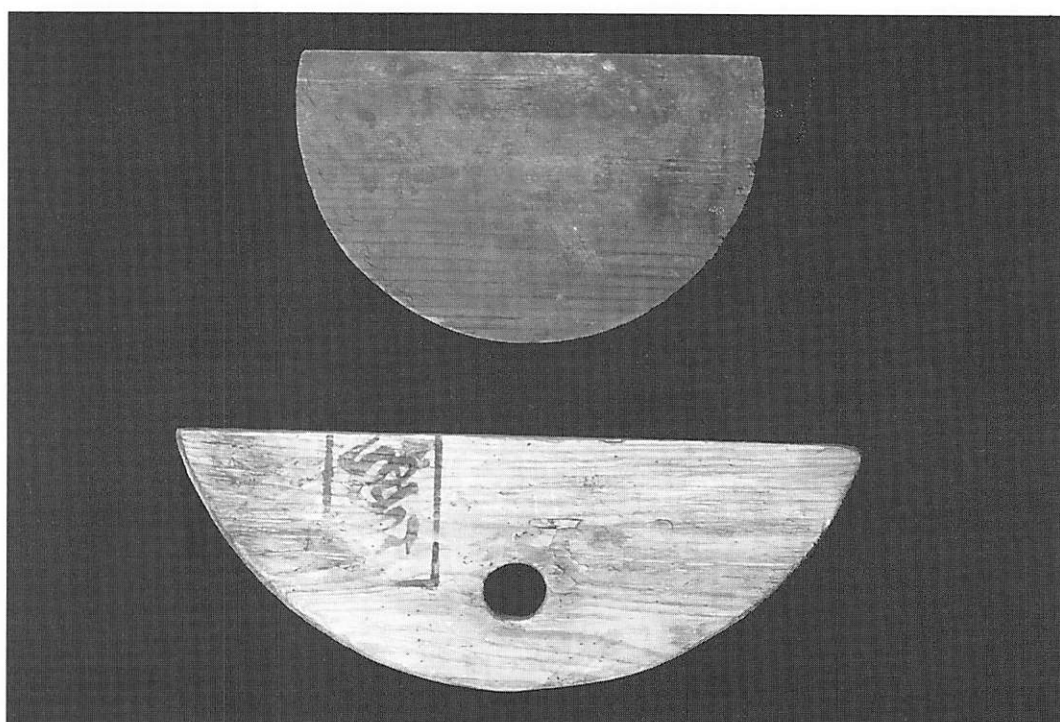
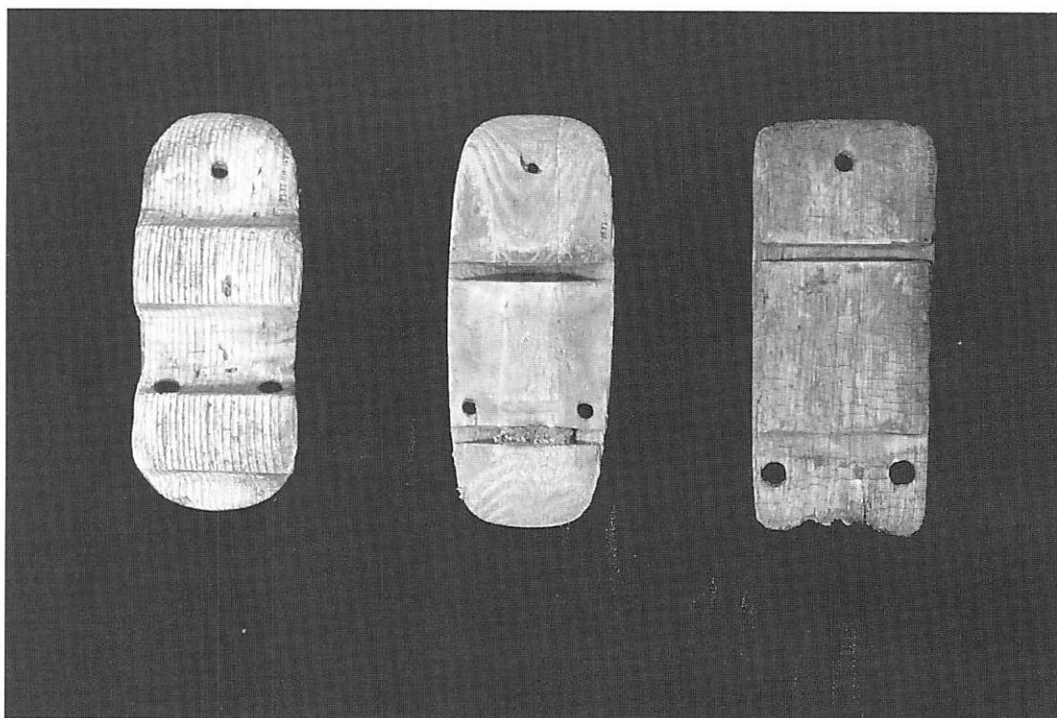
包含層出土の石器



包含層出土の土製品・石器



包含層出土の茶臼と木製品



包含層出土の木製品

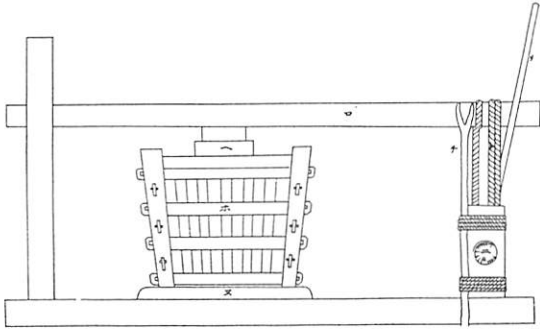


図 1 槓桿(テコ)式压榨器(『北海道漁業志稿』より転載)



写真4 魚粕干場「鯧粕干燥」 佐藤利雄氏所蔵資料



写真1 槓桿(テコ)式压榨器 大正期 余市地方



写真5 キリン(螺旋)式压榨器 佐藤利雄氏所蔵資料

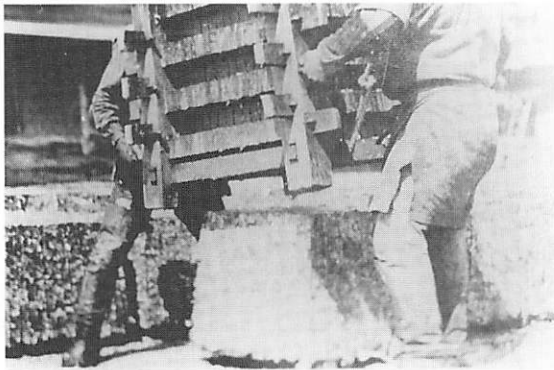


写真2 角胴から取り出された粕玉 大正期 余市地方

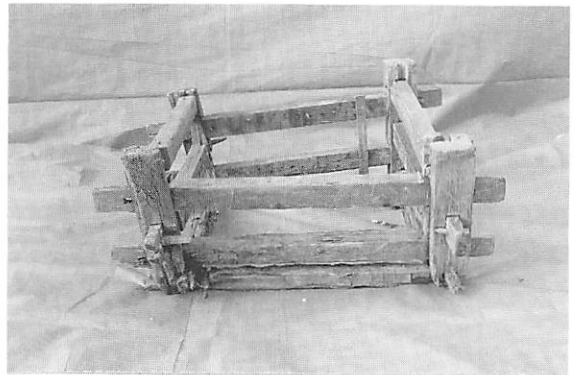


写真6 入舟遺跡出土の角胴



写真3 玉切包丁による粕玉切断 大正期 余市地方

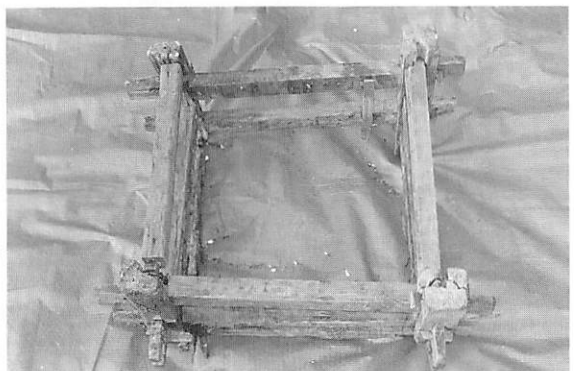


写真7 入舟遺跡出土の角胴 (上部より)

角胴資料

報告書抄録

ふりがな	いりふねいせき							
書名	入舟遺跡							
副書名	余市川改修事業および余市橋線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	乾 芳宏							
編集機関	北海道余市郡余市町教育委員会							
所在地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町26番地 TEL0135-21-2111							
発行年月日	西暦2000年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コ - ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いりふねいせき 入舟遺跡	ほっかいどう 北海道 よいちぐん 余市郡 よいちちょう 余市町 いりふねちょう 入舟町	01408	D-19-53	43°	143°	1998.5.11) 1998.10.31	2,512 m ²	余市川 改修事業
				12'	48'	1999.5.12) 1999.10.31		余市橋 線街路 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
入舟遺跡	包蔵地	続縄文時代 擦文時代 近世・近代	住居跡 焼き火跡 貝塚・集石 剝片集中 石組炉 護岸石垣 墓坑	土器 石器 骨角器 漆器 陶磁器		続縄文時代の恵山文化の貝塚から多量の骨角器が出土した。また、貝塚内に墓坑も確認された。		

入舟遺跡発掘調査報告書（1998・1999年度）

余市川改修事業および余市橋線街路事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 平成12年3月25日

編集・発行 余市町教育委員会

〒046-0015

北海道余市郡余市町朝日町26番地

印刷 株式会社 毛利印刷

余市郡余市町大川町1丁目26番地
